

ISSN 2760-2354(Print)
ISSN 2760-2362(Online)

「國分寺學」を学ぶ

国分寺市史研究 第一号

「國分寺學」を学ぶ

国分寺市史研究 第一号



国分寺市教育委員会

国分寺市教育委員会

「國分寺學」を学ぶ

国分寺市史研究 第一号



本誌の書名 「國分寺學」を学ぶ について

国分寺市では、令和6年度（2024）から市立小・中学校で総合的な学習の時間を中心に「国分寺学」を各校の教育課程に位置付け、地域や保護者の方のご支援をいただきながら、全校で取組を推進しています。「国分寺学」とは、「地域に親しみ、地域に学び、地域を考え、地域に貢献する」の理念を掲げ、次代を担う子どもたちが市民の方々の地域に対する思いを受け止め、主体的に地域と関わり、地域に根差した探求的な学習を進めることにより、「課題解決力」、「コミュニケーション力・協働力」、「社会参画力」に関する資質・能力を育むことを目指すものです。

新たな国分寺市史でも、貴重な地域の歴史資料を市民の共有財産としながら、次代へ継承できるよう、また「国分寺学」の理念に学びながら、地域に親しみ、地域に学び、地域を考えるきっかけとなるような市史とすることで、地域に貢献できるよう取り組むことが求められます。

そのような「国分寺学」との共通理念から着想を得て、国分寺市市史編さん推進委員会 坂詰秀一副委員長より市史研究の書名を『「國分寺學」を学ぶ 国分寺市史研究』と御提案賜わり、新たな国分寺市史編さん事業に着手した井澤邦夫市長が題字を揮毫しました。

表紙画 サツキ（市の花）

目次

■ トークセッション ■

国分寺の過去・現在・未来 ―新たな国分寺市史編さん事業に向けて―

井澤 邦夫・古屋 真宏・坂詰 秀一・荒井 秀規・西木 浩一・羽貝 正美……………1

■ 講演会の記録 ■

武蔵国分寺跡によせる心

坂詰 秀一……………33

国分寺の鉄道 ―東西、南北を結ぶ鉄路―そして新幹線―

奥原 哲志……………57

資料編さん事業がもたらすもの ―地域資料を守る、活かす―

西木 浩一……………96

■ 座談会の記録 ■

地域の歴史を学ぶこと

西木 浩一・富山 謙一・武藤 功・福山 智美……………117

■ 研究ノート ■

国分寺市の畠山重忠伝承と無量山道成寺 ―恋ヶ窪の地域説話をめぐって― 依田 亮一……………131

人口の変化に見る国分寺市の移り変わり ― 昭和初頭から市制施行まで ― 宮川 展夫 . . . 149

新たな国分寺市史編さん基本方針 160

市史編さん事業着手までのあゆみ（令和4年度・5年度） 173

令和5年度国分寺市史編さん関係者名簿 174

令和6年度市史編さん室業務日誌 175

令和6年度国分寺市史編さん関係者名簿 178

■ トークセッション ■

国分寺の過去・現在・未来 —新たな国分寺市史編さん事業に向けて—

(出席者) 井澤 邦夫・古屋 真宏・坂詰 秀一

荒井 秀規・西木 浩一・羽貝 正美

(司会) 依田 亮一

はじめに

司会 国分寺市は昭和三十九年(一九六四)一月三日に、東京都で一四番目となる市制を施行し、令和六年(二〇二四)に市制施行六〇周年を迎えました。市では市制施行一〇周年を機に、国分寺市が歩んできた歴史をまとめるため、昭和五〇年に市史編さん室を設置し、昭和六一年から平成三年(一九九一)までに上・中・下巻の『国分寺市史』全三巻を刊行しました。その後、三十年代が経過し、今年度から新たな国分寺市史の編さん事業に着手することになりました。

そこで本日は、長年国分寺市で文化財保護・史跡整備でご指導いただき、前回の市史編さん事業にも携わられ

ました立正大学特別榮譽教授の坂詰秀一先生と、新たな市史で原始・古代・中世をご担当される明治大学兼任講師の荒井秀規先生、近世・近現代をご担当されます東京都公文書館課長代理・認証アーキビストの西木浩一先生、それから現代市制をご担当されます東京経済大学現代法学部教授の羽貝正美先生をお招きし、井澤邦夫市長、古屋真宏教育長とともに、新たな国分寺市史編さん事業に着手するにあたっての課題と展望について、対談をお願いいたしました。皆様、よろしく願いたします。

1. 新たな市史編さん事業に着手した経緯

司会 それでは、令和五年・六年の施政方針で、新た

な国分寺市史編さん事業の推進を語られました井澤市長から、市史編さん事業を再開したきっかけですとか思いについて、一言いただけますか。

市長　ちょうど今年が市制施行六〇周年という節目で、私は一一年前に就任したものですから、市制五〇周年も経ております。そのときも一つの機会であったと思いますが、今度の六〇周年は、新庁舎も建設されるということで、市にとって大きな節目の年です。そういう年に新たな国分寺市史を始めたいと思い施政方針を示し、市民の方々にもご理解をいただきながら進めていくことになりました。

前回の市史は平成三年に下巻が刊行されましたが、既に三十数年が経過し、市の姿や、取り巻く行政、文化等、全てが大きく変わりました。ここで今までの市史も踏まえた上で、市史編さんを始めたいと思い、先生方にご協力をお願いした次第でございます。

昨年七月には「新たな国分寺市史編さん事業の実施」を教育委員会で決定し、本年二月には「新たな国分寺市史編さん基本方針」を市として決定しまして、いよいよ今年度から事業に着手するという段取りになりました。

新たに判明する史実もあると思いますので、ぜひ先生方に解き明かしていただけたらと思っています。

また、令和六年度までの「第一次国分寺市総合ビジョン」が終了して、令和七年度からは「第二次国分寺市総合ビジョン」がスタートしますので、長期的にこの国分寺市が歴史を持ったまちとして引き継がれ、また私どもの誇りであります歴史・文化が本当に豊かなまちとして、今後も市民の方々、また多くの方々にご理解いただけるような証を残していければと思っておりますので、ぜひ^{あかし}よろしくお願い申し上げます。

2. 自治体史の編さんとは何か

教育長　坂詰先生は前回の国分寺市史、最近では府中市史、さらには伊東市史の編さんにも携わっていらっしゃいますね。多くのご経験がある中で、この市史編さん事業を行う意義、意味を市民の方にもご理解していただく上で、まずはお話をいただきたいと思うのですが、いかがでしょうか。

坂詰　今、お話のありましたように、府中市は今、進



トークセッションで意見交換をする参加者

行中で、間もなく新府中市史が完成する予定です。ほぼ一〇年かかりました。非常に早かった。

ところが、地域史の編さんは大変でございまして、かなり長い時間をかけてやってきた例があります。多摩地域ですと、日野市は大体二〇年、東大和市も十数年、区部では品川区は、一回目が九年、二回目が四年。もう一つは台東区で、四年かかりました。それ以外、私の経験したところで、神奈川県では川崎市が八年、箱根町が一〇年、長野県では野沢温泉村が九年、それから今、お話しのアッタ静岡県の伊東市が、大体二〇年です。

今まで一〇か所ぐらいの市町村史編さんに関わった体験から考えますと、やはり一〇年では難しい。しかし、品川区の場合は、区史は一回作ったものがございまして、新しく作るというときに前回の区史を改めて全部点検しました。結果、新しい区史は前回の仕事を十分生かしながらも、その後の新しい内容を踏まえて区史を作ることになりました。

それを基に大体二年ぐらいでやろうということで始まったのです。ところが、行政の資料は全部つけて欲しいとか、いろいろな要望が区民の方から出まして、着手し



坂詰 秀一 氏
(国分寺市市史編さん推進委員会 副委員長)

てから区民の皆さんに区史を渡すまでに四年かかりまして、しかし、できたものはA4判の大冊です。けれども、内容は非常に濃くて、前回の区史と対照していただくと、非常にそのエキスが詰まっています。おまけに全ページカラーで作っており、非常に手間と時間がかかりました。そのような経験もあり、多摩地区で今後参考にしていただきたいのは東大和市です。東大和市史を見ていただきますと、通史とか資料編ではなくて、各時代の特殊な目的を持ったテーマにして一冊ずつ作っていきました。ですから普通の市史とは違う。一味違った資料を作ろう

ということをやってみただけです。

そのようなことを通じて感じているのは、自治体史や地域の研究は大変だということです。そういう経験をすると、やはり他市の状況も検討していただいて、特色のあるものを作る、その方がいいのではないかと思います。また、できたものを市民の皆さんに知っていただく、これが一番重要であると思います。そういう観点から、台東区では大きな区史を作りましたが、それを全部文庫本にして、区民の方に買っていただくという希望がありました。そうしましたら、文庫化が活用されて結構売れました。やはり区民の方に買っていただく、読んでいただくという工夫が必要だと思います。

それから、台東区は上野・浅草を控えているものですから、外部から来た方が興味を持つ地域です。そういう方々にも売れるということを考えたわけです。また、伊東市の場合は、図説の伊東市史を作りました。これは市史としては非常に評判がよくて、売り切れてしまいました。増刷をしたという経験がございます。

地域史の編集の目的というものは非常に難しく、それぞれの地域の特性に基づいて、作っていくべきだろう

と思うのです。ですから国分寺市史を作る場合も、国分寺特有の市史づくりというものがあっていいのではないかと。やはり市を見ていくためには、そこに残された資料を完全に蒐集^{しゅうしゅう}することが非常に重要です。悉皆^{しつがい}調査というのですが、それをまずやる必要がある。これができないと、市史を作るのは難しいだろうと思います。

それからもう一点は、資料を基にして、地域の歴史を広い立場から位置づけていく必要がある。これはまた大変な仕事ですが、最終目的をそこに持っていきませんといけません。地域の人は、例えば国分寺の歴史は国分寺だけ見ているわけではないです。東京の歴史であり、日本の歴史であり、世界の歴史である。そういう中で自分たちの住んでいる市の歴史を理解するのが必要ではないか。

また、伝説が案外なおざりにされていることがあります。伝説は民俗学の分野ですが、時期が分からないものが多いので、歴史資料の中で詳細にしていくという方法になろうと思います。

そういうことを考えますと、やっぱり単なる歴史というのではなくて、環境や市民の生活を踏まえた市史づく

りが必要だと思うのです。将来に託せる市史の作成といましようか、そういうことも考えていく必要があるのではないかと。要するに市民の関心に即した、その市に即した地域性を持った市史を作ることが必要ではないか。そのようなことを考えています。

教育長 大変大切なことを示していただいたのかなと思います。長い時間をかけて市史の編さん作業を行っていくものであると。市民に読んでいただける、国分寺ならではのものを作っていくとはいけないということが改めて分かりました。今、お話を頂いたところで、ぜひほかの先生方からも少しそれを受け止めていただいて、一言ずついただけたらどうでしょうか。

司会 西木先生や荒井先生も国分寺以外で自治体史の編さんに関わっていらつしやいますが、坂詰先生のお話を聞いて一言いただけますか。

西木 そうですね、坂詰先生が今、お話になったのうかがっただけでも、ずっと大変苦労されてきたというのがよく分かります。共同作業ですので、なかなかスムーズにいかないことも事例としてはあるかと思っています。自治体史編さんで言えば、私の職場である東京都公文書



西木 浩一 氏（国分寺市市史編さん推進委員会
近世・近現代部会 部会長）

館も、実は明治三〇年代から始まった、当時の東京市史の編さん事業からスタートしております。やはり地域の資料を集めたり、保存したりということは、なかなか自治体史を編むという目的がないと、意識をして進まないことがあります。そういった意味では今回の市史は一つのチャンスであると思います。

既に前回の市史のときに目録もかなり整備されていますので、基礎ができています。ですからそれを踏まえながら、先ほど悉皆的な調査が必要と坂詰先生がおっしゃいましたけれども、やはりそういう地域の歴史資料とい

うものを改めて洗い直していく必要があります。それから今まで歴史資料と思っていなかった、例えば写真ですとか、そういったものも実は貴重な地域資料なのではないかと思います。そういう新しい資料論といえますか、いわゆる古文書だけではない、いろいろなものが地域の歴史を組み立てる素材になるという、そういう議論も踏まえながら展開していくと、市民の方もより多く巻き込みながらの市史編さん事業ができるのではないかなと、今の坂詰先生の話をつながっていて感じました。

荒井 実は私、生まれも育ちも台東区です。今、坂詰先生のおっしゃられた文庫本は実家にありますし、結婚して区外に出るとき、やはりもう一セットを区役所に行って買ってから外に出ました。それぐらいあれば評判がいいものです。手軽な文庫本なのです。

もう一つ、自治体史の編さんは長くかかるというお話がありました。が、神奈川県内で、私が関わりましたのは大磯町史、これはもう終わりましたけれども、二〇年ほどかかりました。また、現在、厚木市史にも関わっているのですが、これはまだ仕事が残っています。それとも二〇年以上かかっています。自治体の規模にもよります



荒井 秀規氏（国分寺市市史編さん推進委員会
原始・古代・中世部会 部会長）

が、あと資料の豊富さにもよるんですけど、やはりそれぐらい時間がかかっています。当初の計画はもう少しコンパクトにしようと思うのかもしれませんが、なかなかそうはいかないということです。改めて共通認識として持っていただくというのではないかなということを思っただ次第です。

それと私の勤め先の藤沢市は、市史編さんが昭和の時代に終わっています。もう一度やろうという企画はあるのですが、なかなか予算的なものもあつて出来ていません。国分寺市さんで新たな市史を作る動きがあるという

のは、非常に羨ましいですし、いい機会ですので、ぜひとも私も参加させていただきたいと思った次第です。

昭和の頃の市町村史と違いまして、今はカラーが必須ですし、あとCDをつけるとか、あるいは対市民向けにはダイジェスト版を作る必要があると思います。ただ、いきなりダイジェスト版は作れないですから、まずはしっかりしたものを作って、その上でもう一度かみ砕いたダイジェスト版を作っていければいいのかなと思っておられます。そのような形で、始めてしまうと長くなると思うのですけれども、市長さんも教育長さんもそのようなお考えの下に、新しい市史編さんを進めていただければと思います。

司会 ありがとうございます。羽貝先生の現代市制部会は前回の市史では全く触れられていません。

羽貝 そうですね。

司会 扱われる時代は昭和三九年以降、六〇〜七〇年で、年代幅は短いのですが、でも残っている資料は膨大だと思しますので、その辺のところで見通しなどを一言いただければ。

羽貝 皆様からすぐ長期の仕事になるというお話が

ありました。先日も、一緒にやりましょうというメンバーが顔合わせも兼ねて集まって相談しているのですけれども、とにかく元気で完成させようという話をしたところですよ。個人的な仕事としては都市史、都市行政史を、しかも外国の都市を前提にやっていたものですから、一九世紀ぐらい、あるいはもう少し前から、土地台帳、古文書を格納している埃だらけの部屋に入って、しばらく格闘していた時期が若いときにありますけれども、こうした形の自治体史をお手伝いするのは初めてです。いろいろと本当に教えていただきながら進めたいと思っています。

この市制施行六〇年という節目に新たに、これまでのことにさらに補足するものもあるでしょうし、修正もあるかもしれません。現代史は初めてということで、新たに市史を編さんするというのに、誠に大きな意味があると思うのです。人の人生でいえば還暦というところから始まるわけですが、ゼロからスタート、原点に立って考えてみようという意味合いもそこに付け加えることができるかもしれません。灯台下暗しという言葉はありますけれども、今生きる人間にとっては、自分が生まれた

り、生きたり、生活したりしている場所の大きさがどの辺にあるのかとか、どういう変化をたどってきたかということは案外知られていないことかと思っています。

話は後に続くとは思いますが、多くの方がまさに住民として暮らしているながら、同時に少しずつ市民として成長していくという認識でおります。そのためにはやはり地域を知ることがものすごく大事なことだと思います。小学生、中学生とか、若い方々にも学校で学ぶ中でいろいろと共有していきましよう、予定されていますけれども、これもまた非常に大事なことで、それがその人の中に積み重なっていくのだろうなと思っています。

地方のある場所で、どんどん人口が減っているところがあります。東日本大震災の被災地でもありました。その地域のリーダーの一人の方が、若者が生まれ育った場所を離れていくことを妨げることはできないと言っています。けれども、その後は耳に残って、もう絶対忘れないのですけれども、送り出し方があるとおっしゃるのです。離れていくのは妨げられない、止められないけど、送り出し方がある。そうすると、やがて帰ってくるときもあ

るだろうし、離れたままかもしれないけれども、時々戻っていらつしやる。そういうときに何を思うかということをおつしやるのです。そういう意味では若い方、子どもさんがこういうことに触れていく、学んでいくという時間は決定的に重要だと思っています。

同時に上の世代の方々を見たらどうかという話なのですけれども、六〇年というのは文字どおり、恐らくは自分が生きてきた時間です。子どもの頃からいらつしやるとすれば、文字どおり自分がどのように生きてきたか、何が環境の中で変わったかなどということを本当にもう



羽貝 正美 氏（国分寺市市史編さん推進委員会
現代市制部会 部会長）

肌で感じ取ることができる。こういうことなのだと思います。そういう生きてきた時間、時代そのもので、かつ現在進行形というところもあるので、まとめるということについては、やはりいろいろと工夫もいる、視点といいますが、軸が必要とされているところです。いずれにしても、オーラルヒストリーなども含めて多様な観点、視点を生かせるような、かつ、皆様が異口同音におつしやつておられますけれども、自分のまちだという感覚を持つて読んでもらえる、読み続けようと、折に触れて開こうという、こういう市史にしたいなと思っています。ろです。

司会 ありがとうございます。先生方のお話を受けて市長、教育長、何かございますか。

教育長 もう皆様のおつしやるとおりです。

市長 いや、本当に今、お話があったように、我々、長生きしていかないと、この市史の完成まで見られないのかなと思いました。あわせて、本当に私事で申し訳ないのですけれども、自分の親を亡くしたときに、親がどういう生き方をして、どうしてここの地に住んだのか、その前はどうかだったのかという、自分史から遡っていく

というのが、やはりすごく意味があるのかな。もともとはこの国分寺はどうだったのか、だから自分がここに今いるのだという証になるものだなと感じます。

そういう意味で、先生方は本当にいろいろなご経験をお持ちなので、我々の子どもたちが同じ思いになったときに、よりどころになる市史ができればありがたいなど、お聞きしながら考えていました。文庫本というのもありましたし、やはり読んでいただかないと意味がないので、どこかに立てかけておく市史ではなくて、身近なもので親しめるものにしていければなど、そんな感想を持ったところでもあります。

3. 前回の市史のふり返り

教育長 坂詰先生からいろいろなご指導をいただいたわけですが、悉皆調査の必要性和、新たな調査もしていかなければいけないと思いますし、また前回の市史以降も様々な調査を実施していますので、そういうものも生かしていきたいと思っていますところです。

特に、最近発行しました多喜窪遺跡^{たきくぼ}の発掘調査報告書

(令和六年三月刊)では、坂詰先生に総括文を書いていただきました。そのなかで市史の上巻の一部に誤りがあるというご指摘がありました。やはりこの辺りも先輩の仕事を生かし、またその先輩のお仕事を確認していくというところも今後必要になってくるのかなと思います。やはり新しく編集をしていくだけではなくて、過去のものも振り返りながら新しいものを作っていくという視点も必要なのかなと思っています。

司会 多喜窪遺跡は、戦後間もない頃に発掘調査が行われ、縄文時代の遺跡として有名な遺跡ですが、このほど市では調査報告書を刊行しました。坂詰先生に総括文を書いていただく中で、実は過去の市史に一部記述が間違っていたという新たな発見もございました。ちょっとその辺りのことを、先生からお話をいただけましたらと思います。

坂詰 報告書については改めてお話ししますが、今、先輩のお仕事というお話がありました。前回の国分寺市史を皆さんもご覧になっていると思うのですが、前回の市史を監修されたのが、有名な一橋大学名誉教授の増田四郎先生です。増田先生がお書きになったものを、昔、

一生懸命読んだことがあるのですけれども、先生は地域史について、学問的批判に十分応え得るものを作りなさい、これが地域史の特性だとおっしゃっています。

増田先生はドイツ中世史が専門ですが、日本の地域史について注目された論文を書いているのです。それは『一橋論叢』という、先生が教鞭を執られていた大学の雑誌に掲載されておりまして、「地域史研究の効用と限界」という論文です。なぜその増田先生が関係されたのかと思っていましたら、国分寺市民だったのが一つです。それからもう一点は当時の塩谷市長と増田先生、思想的に相入っていたのです。そういうことがあって、恐らく増田先生のところに行ったのだらうと思います。

なぜそういうことを私が申し上げるかといいますと、私は、前回の市史編さんで、私がお手伝いしたのは事業期間の後半なのです。それはどういうことかといいますと、市史の編集委員に市が任命した方々のうち、文化財保護審議会の委員が半分以上入っています、そのうちの一名がお年でお亡くなりになり、その欠員として私が就任しました。当時、私は遺跡の発掘調査ばかりやっていたのですが、文化財の方も手伝えと言われ、審議会に

入ったのです。文化財保護審議会委員だから、市史も手伝えということになりました。

その中で市史をやる場合、満遍なく項目を立てて作っていくのかどうかという問題がありました。前の国分寺史に私も原稿を書いたのですが、これは国分寺の遺跡そのものについて書いていないのです。瓦を焼いた場所を検討するというのが私に課せられた仕事でした。これは武蔵国全体を踏まえて書いたものですから、ある程度今でも使える内容になっていると思うのですが、それは国分寺市のことではなかったのです。というのは、当初の論議が十分なされた上での分担執筆ではなかったのです。これは監修者の増田先生のご意見もあつたかと思いますが、やはり市の事務局が積極的に自分たちの歴史を作るのだという意欲を委員会にも反映してもらわなければ困るのです。そこをひとつ頑張っていたことが重要ではないかという気がします。

増田先生は監修の言葉を書いておられますが、これは皆さんの意見を総合しながら、まとめてくださった文章ではないかなと思います。そこに当時の時代の動向というものが反映されています。ドイツ中世史の権威におい

て日本で第一人者、世界的にも有名な先生。その先生が市民で、代表で、市長さんとの間に入ったものですから、非常に強い力がありました。

ところが市長さんが一年ぐらいでお替わりになりました。そうしたら、次の本多市長は地元出身なものですから、地元を中心にしないといけないことをおっしゃったのを記憶しています。私がお手伝いに入ったとき文化財保護審議会をやっていたものですから地域を大事にしようと、武蔵国分寺を大事にしてくれよ、とおっしゃったのを記憶しています。

そういう中で私が感じましたのは、増田先生のおっしゃたような悉皆調査というものは、非常に重要だなというのを改めて感じました。考古学の場合ですと、モノは具体性を持っていますから、悉皆調査しやすいのです。市内を満遍なく歩きまして、十分調査すればいいというので、発掘を伴わない前の段階では楽だったのです。

ところがそういうものを調べてみますと、国分寺市は日本で有名な場所です。今はどこの教科書にも出てまいりますが、旧石器時代から日本は始まると書いてあるのです。群馬県の岩宿という遺跡です。しかし、本来は国

分寺市で見つかったのが最初です。ですから国分寺市の地名のついた文化になるべきだった。熊ノ郷で出土したものですから、最初の発見地の熊ノ郷式文化という名前にすれば面白かったなと思うのです。

そのようなことを先駆的にやったのが、当時国分寺の住職だった星野亮勝先生です。後に市長になりました。熊ノ郷遺跡の発見の公表が岩宿遺跡より一年遅れたために群馬県の方の遺跡名が有名になってしまったのです。星野先生は地域を非常に細かく歩いて調査をしたわけです。その調査をした一つが、先ほど教育長さんがおっしゃった、今回の多喜窪遺跡なのです。その報告書が、私もうっかりしてまして、前の国分寺市史を作るとき先ほどの理由で、私は全体を見ていなかったのです。その部分を書いた方はよく知っている先生です。後でそれを見まして、これはまずいと思ったのです。

多喜窪遺跡は有名な、国指定重要文化財にもなっている土器の出土地です。本来、発掘調査は文化財保護法によって届出をして発掘をしなくてはならないのですが、この土器を発見した発掘では、届出をおやりにならないかったです。まだ文化財保護法が発布されて間もない頃

で、ご存じなかったのもしれません。その調査のなかで、あの大きな有名な重要文化財の土器を発掘されたわけですね。

そういうことに全く触れないで作ったものが前回の市史なのです。それはもちろん公にできないこともありますけれども、市としては市の歴史というものは正しく書いておかなくてはいけないということで、書いていいことと悪いことを識別しながら、やはり残すべきだろうと。資料として残すべきものはちゃんと記録として残さなくてはいけないと思いました。

このたび、報告書を作る際に改めて調べて、を書いたわけです。もう時効になっているのいいと思うのですが、そのようなことが実はあったのです。そういうことを考えますと、付近の遺跡を都立国立高等学校が掘ったのですが、調査した時の資料が、その高等学校にあるかどうか分かりません。調べ足らないということでした。だからそういう点を考えますと、国分寺市の遺跡から出たものは国分寺市で保管すべきだ。そこで責任を持って郷土の資料にすべきだろうと思います。遺跡の基本台帳を作るのは、今度の新しい市史のやり方だろうと思うの

です。そういうことも考えなくてはいけないのではないかと思います。

それからもう一点、仮に私が責任者として国分寺市史を作るならば、原始・古代から始めません。現代からやります。まず現代がどうだったということを最初の巻で



和やかな雰囲気の中で進むトークセッション

押さえます。それから今度は近代・近世、一番最初の古代・原始というものは最後の巻に持つてくると、私ならするでしょう。倒置法というのですが、私が以前書いたある本はそのように書いたのです。そうしたら、案外評判がよかったのです。やはり現代から遡っていくことがいいねという人もいました。考古学でそんなことを言う人はあまりいないのですが、私はそれが一番皆さんに理解していただけるだろうと思ったわけです。というのは遺跡を掘りますと、上の層は現代です。だんだん古くなつていき、一番下は古代・原始です。それを歴史の順番に並べていくならば、何で下から行くのだと、やはり上から行くべきだろう。そのように考えたわけです。そういうことを言いますと、そんなことは行政ではできないよとおっしゃる人が多いのですが、そういう新しい考え方というものを地域の人の立場に立つて考えるならば、やはり編み出していくことも必要ではないかなと思います。

市長　私も同感です。そうしましょうか、今回。でも、やはりそう思うのです。市民の方に読んでいただくのだったら、やはりそこからはいいかな。

坂詰　でも前の国分寺市史を拝見しますと、近世を扱っている中巻はすばらしいです。非常にいい点は、地元の方を動員して悉皆調査をした成果なのです。ですから、今まで知らなかったこともどんどん分かってきました。恐らく、多摩地域の自治体史で近世史がうまくまとめられている国分寺市史が圧巻だと思います。あれだけのものはなかなかできないのではないかと。ただ欠陥もあるのです。私の友人が担当したので言うのですが、彼もやっぱり自分の意識に沿って編集していたのです。やはりトップの人が一人でやっては駄目なのです。周りの人の意見を作っていくかなくてはならないと思います。

ただ近世については、もうすばらしいものだということとは言えると思います。ですから、まさに今度近世をどのように切るのか、後でお話が出るとは思います。教育長さんがおっしゃった「国分寺学」をやるためには非常に重要な材料がいっぱい入っています。ですから、ぜひそういう点で新しい視点をやっていただければと思います。過去の資料でも一部誤りがあったというお話がありましたけれども、立派なところもあるということです。

市長　ありがとうございます。

4. 「国分寺学」と新たな国分寺市史

市長 今、「国分寺学」のお話を坂詰先生からいただきました。国分寺の市民、そして子どもたちが理解できる、そんな進め方をしていきたいなと思っています。そういう意味で子どもたちの参加というものも非常に重要かなと思っています。また、第三次教育ビジョン策定にあたっては、令和五年度に小中学生にアンケートを取りました。それから、一〇〇歳とは言いませんけれども、九〇代、八〇代のお元気な方もおられますので、そういう方々から生の声を聞き取っていただきたい。裏話みたいなものがあるかもしれませんが、語れない部分もあるのかもしれませんが、悉皆調査というものはまさにそうではないかな。やはり今あるものをきちんと調べ上げていくということが必要かなと思っています。

ちよつと話は飛ぶかもしれませんが、これから「第二次国分寺市総合ビジョン」という、市の総合計画の策定に向けて現在作業しております。その中で、これからの八年間を、「教育ビジョン」ともすり合わせた上で進めていきたいと思っておりますが、その中に市史を

ぜひ取り入れていきたいと思っています。

広く市民と一緒に、できれば協働して進めていきたいと思っていますので、専門員・調査員の方のご協力をお願いできますかと思っています。四月一五日号の市報で市史編さん市民協力を募集いたします。国分寺市に非常に興味を持っておられる方がたくさんおられますし、国分寺に長く住んでおられて、ずっと先祖からの歴史もご存じの方もおられますので、そういう方を巻き込んで進めてまいりたいと思っています。

先ほど申し上げたアンケートの結果でありますけれども、また後で教育長から補足していただければと思いますが、その中で幾つか設問を投げかけています。「あなたは、あなたが住んでいる地域で昔どのような出来事があったのか知りたいと思いますか」とか、「あなたは私たちの親や先祖が、昔、どのような暮らしをしていたか興味がありますか」、その二項目を設定し、子どもたちの歴史に対する関心度を確認したところ、多くの子どもたちが関心を寄せていることも明らかとなっています。特に子どもたちには国分寺市という地域に愛着を抱いていたかのように、今回この「国分寺学」というものを「地



「国分寺学」の取り組みを紹介する
井澤市長(中央)と古屋教育長(左)

域に親しみ、地域に学び、地域を考え、地域に貢献する」という理念に基づいて、学習を進めていきたいと、このように思っております。

教育長から、この辺についてちょっと一言付け加えていただけますか。

教育長 ありがとうございます。これまでお話いただいたように、市民との協働というところが、この市史編

さんの大きな特色にもなろうかなと思っております。史跡指定一〇〇周年を契機として、坂詰先生にもご講演いただきましたけれども、多くの著名な先生方のご講演や研修会等も開催させていただきました。これらにはたくさんの方、また都外からもお越しいただくような状況で、国分寺について多くの方が関心を寄せられているな、魅力を感じていらっしやるなと思ったところでございます。ぜひ協働作業を進めていきたいと思っております。また、やはりこの国分寺の貴重な歴史・文化を守っていくのは子どもたちです。ですので、子どもたちにもこの市史編さんについても何らかの形で関わってほしいという願いを、私も持っているところでございます。

そんな意味もあって、アンケート調査の結果も、本当に子どもたちは国分寺のことを知りたい、もっと学びたいという意欲もたくさん持っていますので、今年度から公立小中学校全校で「国分寺学」というものを実施することといたしました。ここに「国分寺学」のリーフレットも配らせていただいているところでございますけれども、教科横断型、様々な教科、社会科ですとか、総合的な学習の時間ですとか、特別活動とか、様々な場面で学

んでいくと。それを総合して「国分寺学」という名称に位置づけているところでございます。

国分寺市全体を学びのフィールドとしながら、また教材としながら、子どもたちが探究的に学んでいくというものであります。当然歴史や文化、自然について学んで、そのほか様々な人材から学ぶこともございます。そういう学びを通して、きっと子どもたちはこの国分寺のすばらしさ、よさを感じ取りながら、また自分自身のアイデンティティのよりどころとなるような、根幹となるような郷土への愛着とか、愛情といったものを持つようになっていくのかなと思っております。

さらに、探究的な学習ですので、こういう課題解決力、コミュニケーション能力、また社会参画力といった様々な、これから子どもたちが未来を作るために必要な力も育てていきたいと思っております。

そんな子どもたちですので、ぜひこの市史編さんで、中間地点でも結構ですので、何か成果物があれば、それを教材として学ばせていただきたいと思います。また、今、小学校三・四年生の社会科では『わたしたちの国分寺』という副読本を使っています。これも、これから更新を

していきますので、その中で市史編さんの成果を生かせればなと思っております。

さらに、「子ども市史」といったものも作れたらいいなど、そんな夢というか願いを抱いているところでございますので、ぜひ子どもたちにもこの市史編さんに関わってほしい、それから市史編さんの成果を生かして学びを深めてほしい、そんな願いを持っております。ぜひ皆様方にご理解とご協力をお願いしたいと思います。

司会 ありがとうございます。昨年「新たな国分寺市史編さん基本方針」を先生方にご審議いただくなかで、いろいろとご意見をいただきました。坂詰先生、「国分寺学」の取り組みについて、どのような感想を抱かれましたか。

坂詰 私も「国分寺学」の構想を見させていただきました。私は国分寺市の歴史を知る場合に、子どもたちと一緒に話す場合にやはり一番いいのは、歩いて、見て、考えると、この三つだと思うのです。自分たちの郷土を考える場合には、まず第一に歩かなくてはいい。それから、二番目にはよく見て、観察していかなくてはならない。そして、その結果を考えていかななくてはな

らない。これが非常に重要なのです。

この「国分寺学」で、「地域に学び、地域を考え、地域に貢献する」と書いてありますが、まさにそのとおりだと思います。ぜひ市史の編さんを通して地域を学んでいただきたい。そのためにはまず学校教員の皆さんにも学んでいただかないとならないのではないかとという気がいたします。できれば教員の皆さんに対して、教育長さんが「国分寺学」というものは市史を作る場合の基本精神なのだよと。みんなに対する教育をする場合の基本なのだよということを啓発していただければいいと。子どもたちにはそういう先生方を通して、啓蒙していただくということだと思っています。

先ほど私は、歩いて、見て、考えるといいとお話しましたが、国分寺の近世を考えた場合に、子どもたちに身近な問題を提起してあげたらどうだろうか。例えば、私が以前から考えていることなのですが、国分寺に二人、江戸時代の文化人としては、これに勝る人がいないという有名な人がます。その一人が、宝雪庵可尊ほうせつあんかそんという俳句の名人です。可尊は江戸でも有名な人でした。この方が大政奉還後に国分寺に戻ってきて、大変多くの弟子を養

成されています。この方の歴史をぜひ、歩く、見る、考えるの中でやっていただいたらどうだろうか。お墓も残っています。顕彰碑もあります。そういうところを見ていただくということも重要だろうと思います。

それから、もう一人は本多すけけん雖軒です。国分寺に資料がたくさんあります。おたかの道湧水園、あそこの長屋門に行っていたかと分かりますが、この方はお医者さんでありながら、国分寺学校の教師でした。こういう方がたを大いに活用してというのは申し訳ないですが、二人の国分寺の文化人を通して、近世の国分寺市を知っていただくということも一つ方法ではないでしょうか。

中世の場合は、この前の市史ではあまり取り扱わなかったのですが、市内には鎌倉街道が通っていました。鎌倉街道があるために武蔵国分寺の伽藍も焼けたという説もあるからです。以前、発掘調査したことがあり、それで道路の幅が古代の東山道武蔵路とは異なることが分かりました。そういうものは子どもたちを連れていけば実際にここなのだよと。なぜ鎌倉街道がここに作られたのか、なぜ古代の道路の東山道武蔵路があったのかという説明もできるわけです。古代の東山道武蔵路という遺構



地域に親しみ、地域に学び、
地域を考え、地域に貢献する

国分寺学

～人と学びが循環するまちを目指して～



国分寺学とは
次代の国分寺市を担う子どもたちが、市民の方々の地域に対する思いを受け止め、主体的に地域と関わり、地域に根差した探究的な学習を進めることにより、「課題解決力」「コミュニケーション力・協働力」「社会参画力」に関する資質・能力を育むことを目指しています。

令和6年4月
国分寺市教育委員会

市が取り組む「国分寺学」の
リーフレット

も、よく残っていたと思うのです。これなどは大いに鎌倉街道の関係で教材になるのではないかと思います。

そのようなことは幾らでも出てくると思うのです。殿ヶ谷戸庭園へ多くの方が来られます。ところがなぜ殿ヶ谷戸庭園がそこにあるのかという理解はあまりないのです。ですから、殿ヶ谷戸庭園を含めて国分寺市は大正年間に別荘地として大変発達した。その意味づけを皆さんはほとんど知らないのです。それを周知して頂くのも市史の一つの大きな眼目になるのではないかという気がいたします。

この前、国分寺の遺跡で、何人かを連れている学校の先生がおられました。府中はいいですね、いい古墳がありますからと言うのです。いい古墳とは何だと思いましたが、武蔵府中熊野神社古墳。実際、私が調査したものですから、いい古墳ですよと話をしたのですが、その先生は、国分寺には何もないと言うから、とんでもないと言ったのです。国分寺の古墳は、あまり知られていないかもしれないけど、内藤新田横穴墓という古墳があるのです。これはもう関東に冠たる横穴墓で、七世紀後半、ちょうど熊野神社古墳とほぼ同じ時期に、大変位の高い人が内藤にいたということを示す材料なのです。

ところが今、横穴墓はないので、皆さんは見る事ができません。その調査報告書は都立国立高等学校がまとめたレポートでしか残っていないです。だから、そういう資料も今度の市史で探していただいて、国分寺市でも古墳時代の文化があったのですよと紹介していただきたい。別に府中市と競争する必要はないです。府中・国分寺は一体であると私は考えておりますから。

その地域を考える場合に、具体的な知識がないとあやふやな理解になってしまいます。そんな例を幾つか挙げ

て見ていただくと、それはまさに教育長さんのおっしゃる「国分寺学」の考えだと思うのです。

ですから、まず学校の先生方にこれを学んでいただき、子どもに伝達してもらう。これが郷土愛を育む一つの資料になると同時に、先生方の力を今回の国分寺市史に役立てていただきたい。国分寺市の場合には教育長さんのお力で、先生方の意見を反映する市史を作っていたければありがたいなと思っております。やはり地域を大事にする場合には、地域の人の意見というものは大事だと。市長さんがおっしゃったように、市の子どもたちを中心に、それこそ「子ども市史」というものができればすばらしいと思います。ぜひそういう冊子も作っていたけるとありがたいと思います。

私は府中市などに行つてよく言うのですけれども、府中市内は第二次世界大戦のときの飛行機えんたいじゅうの掩体壕せんせまが残っています。そうするとそこを起点にして戦跡せんせまということが問題になりまして、おじいさん、おばあさんが知っている身近な歴史が語られることがあります。国分寺もきつと探せば各所に戦争の痕跡はあると思いますので、ぜひ身近なことをテーマにして、市史づくりのきっかけに

していただくことも重要ではないかなと思います。

市長 ありがとうございます。今、坂詰先生からお話がありましたけれども、子どもたちは本当にとても敏感です。話は飛ぶかもしれませんが、今、新しい庁舎を建てており、庁舎の外観は「木漏れ日グリーン」をカラーコンセプトとしています。これは、子どもたちが市内を巡って、国分寺の色を考えて、みんなで決定しました。大人ですと「木漏れ日グリーン」という発想は出てきませんよね。ですから、大人にはない感性を子どもたちは持っていると思います。「国分寺学」や市史編さんを通じて子どもたちの豊かな感性が育つてほしいです。

そのようなところで、「国分寺学」ができました。また、「国分寺学派」というものを、今、東京経済大学で学長さんが非常に熱心にやられていますけれども、羽貝先生ご自身も東京経済大学に一〇年以上お勤めですね。

羽貝 二〇一一年四月からですので一三年勤めています。その前から非常勤などでお世話になったので、もう一五年以上が経つのですけれども、とてもいい場所だなと思って、いつも毎日通っています。

5. 各部会の課題

市長 それでは、ここからは各部会の課題を皆様にお聞きしたいと思います。まず、羽貝先生、現代市制部会についてお願いします。

羽貝 先ほどややフライング気味で子どもたちに、という話を申し上げましたけれども、一連の話がありますので、少しだけ補足します。

増田四郎先生のお話もあつて、確かにご本人は中世ドイツ都市のご専門で、そこから地域とは何かというご本をお書きになって、僕も勉強させてもらいました。結局、都市自治体の自立度をいかに高めるかというのが増田先生の最大の関心なのです。本学（東京経済大学）の理事長だったこともありまして、いろいろな意味で学ばせてもらつてはいますけれども、都市自治体の自立度、結局は市民自治度といえますか、自治意識の問題です。その中で、繰り返し主張されるのはやはり意識改革ということをおっしゃるのです。市民自治の観点からいうと、当時から逆照射したときの日本の都市自治体はどういう状態なのだろうかということを論じられました。

繰り返し意識改革とおっしゃるのは、それだけ難しいということなのですが、しかしそれはある意味で、どこでそれができるか、どうやってやるのだというのが次のものすごく大きい問題ですよね。結局それは、それこそ子どもの頃から少しずつ、やはりいろいろな機会を通して学んでいくことだと思います。学ぶ手がかりが、おっしゃるとおり歴史なのだと思うのです。

坂詰先生が強調されているとおり、そうならばその歴史は、市史は正確を期したものでなければならぬ。増田先生の言葉でいえば、まさに学問に耐えられるもの。これだけやはりきっちり正確を期して本を編集する事実上の、一種の学術書だと思うのです。しかし読みやすく、どなたにとつても手に取つて、なるほどと思えるものに、そんなふうにイメージしているのですが、歴史を知ることが大事だというならば、なおさら正確な記述が必要だと、おっしゃるとおりだと思います。

そのときに、先ほどご指摘がありました、歩いて、見て、考えるという、このことですよね。これも本当におっしゃるとおりだと思つてお聞きしました。僕の専門分野で、「歴史は人につくというよりも場所につく」とい

う言い方があるのです。武蔵国分寺跡が最たるもの、象徴だと思います。もちろん歴史は人が作るものでありますが、しかし「歴史は人につくというよりは場所につく」と。その場所がずつと残る。それで、そういう観点からすると、そこを歩いてみれば、立ってみれば、周りを



現代市制部会の展望を語る羽貝氏

てみれば、何事かを感じることがあると。そういう観点で今のご指摘は本当に大事だと思いました。

それを踏まえながら、現代市制部会の話でいえば、先ほどのように、まさに現代史を扱うという分野になるので、本当にいろいろな準備を重ねながら、多くの方々のお知恵を拝借しながら、根拠のある記述をしなくてはいいけないと思っています。

その根拠のある記述をするときに、市史編さん室の皆さんに過去の市報の見出しを集めた資料をいただいて、既に読ませてもらったのですけれども、本当に様々な出来事があったのだなと思います。過去を振り返ってみても、やはりポイントになる節目というのですか、六〇年代、七〇年代、それから八〇年代になってから、九〇年代以降みたいな形で、ここは大きい節目としての取組なのだなというものが分かる、そういう出来事はいっぱいあるのです。

「新たな国分寺市史編さん基本方針」では、市民との協働がうたわれています。パートナーシップ、二〇年前ぐらいから「協力して働く」協働という言葉が大分浸透してまいりましたが、本市の場合は協働などという言葉

が使われる相当前から、実質的に市民、民間事業者、それから行政の方々、かつ、また大学等々、広く関係主体と本当に一緒にやっているということが分かるのです。

地区防災、地域防災につながる取組なども最たるもので、それも非常に大きい試みだと思います。それをベースにこれをルール化するという、またある種のルールとして共通の認識であるものにしように書かれたものが、僕は「国分寺市自治基本条例」だと思っているのです。それから自治基本条例に書かれていることは、文字どおりそれまでの間に本市がやってきたこと、それが前提になっているなと思っています。

先ほど住民が市民になるなんて生意気なことを申し上げました。市民の捉え方も様々ありますが、市民と言ったときに、いわゆる本当に住民票を持つ方々のみならず、在勤・在学、ここで活動する方々、様々な方が入るのですよというふうになっています。これなど、二〇〇八年に制定され、十数年がたちますけれども、非常に大きな道しるべであるし、それまでの取組を前提にして、その先を見た、そういう条例なのだろうなと位置づけております。

いずれにしても、現代市制部会は本当に大きな節目を、やはりここというところをきっちりみんなで話し合って決めながら、その上でこれがどういう働きを持っていたかという辺りもきちんと議論していきたいなと思っています。過去を振り返りながら、今を思い、かつ未来につながる視点というのですか、そういうものをはっきり打ち出していきたいと思っています。

市長 ありがとうございます。続きまして近世・近現代部会の西木先生お願いします。先生とは、J・COMの「長つと散歩」という番組で、何度か共演させていただきました。そして、東京都公文書館にも訪問させていただきましたが、令和四年に国分寺市教育委員会と共催しました企画展「史料に見る国分寺のあゆみ〜江戸時代の村々〜」は大変良い展示でした。改めて国分寺市内にあった江戸時代の一〇か村の成り立ちなども、市にはない資料を公文書館でたくさんお持ちということで、貴重な資料を見学させていただきました。ぜひ新しい市史でも、そういった資料を活用していただければなと思っていますので、いかがでしょうか。

西木 そうですね。まず、ちょっと個人的にことをお

話しさせていただくと、私はもともと小学校の教員を
目指して、東京学芸大学に一九七九年に入りまして、そ
で近世史の竹内誠先生に出会って、歴史研究の道を歩
むことになりました。学生時代に国分寺は自転車に乗
って、ジャージを履いて、しょっちゅう来ていたところ
ですし、授業をさぼって殿ヶ谷戸庭園でぶらぶらして
いたので、いろいろと思い出の残っているところです。

数年前に世田谷からこちらへ職場が移ってきました
が、本当に新しくきれいになっていて国分寺駅周辺の
変わりようにすごく衝撃を受けました。かといって職
場の周辺や市内をちよつと散策しますと、私の学生時
代と変わらない町並みとか、武蔵野の面影が十分に
残る光景があります。そういう新しい利便性のある、
活気のあるまちという側面と、歴史的な魅力を重
ね備えているというのが国分寺の魅力なのかなと思
っております。

実は三月に一度事務局からご依頼をいただいて
歴史に関する講演を予定していました。ちよつと私の
不注意でけがをしてしまったもので、延期となり、ご
迷惑をかけたしまったのですけれども、そこでお話を
できたらと思つて、一月頃にいろいろと先進的な自治
体史の、特に市

民が参加するところの自治体史編さんの話を聞きに
大阪の方で研究会に参加しました。

大体市民参加がうまくいっている自治体の多くの
事例を聞くと、やはり新しい住民がその地域に関心
を持つて積極的に関わっている。もちろん古文書とか
をお持ちなのは、古くからここに住まわれている方々
なのでしょうけれども、新住民という、国分寺の場合
も新たな子育て世代とかがどんどん入つてこられて
いて、やはりそういう方がこの地域に関心を持つて
いく、そういう契機にこの編さん事業がなつてい
たらいいかなと思います。

つまり国分寺がふるさとである人と、国分寺を
ふるさとにしていく人と、それがうまく融合するた
めにいろいろな取組が、市史編さん事業期間中に
できたら面白いかなと思つております。

近世史の話の前に、今、配つていただいていた
のですが、東京都公文書館で「国分寺一九六四」と
いうミニ企画展をやっております、まさに市制が
施行された一九六四年の写真と、それから現代の
写真、これを六四年の住宅地図というものはまだ
ないです。この何年か後の住宅地図があつて、そ
れを見比べながら、うちの職員



「国分寺一九六四」を紹介する西木氏

がずっと歩いて、この写真はこの場所だということを示しながら、現在の写真と並べて展示をしています。こんなものをもう少し大々的に、市民からも写真とかを提供していただいて、やったら面白いかなと思うのです。今の小学生や中学生にとっては一九六四年のまちの姿はとてつもない異文化に映ると思います。舗装されていない道路がある風景などは知らないかもしれません。

一方で、この頃、小学生だった方は、まだ七〇歳ぐらい、お元気で記憶も確かでいらっしやるから、一九六四年の遊び場マップ、どこで遊んでいて、何をやっていたのかみたいな話というものが切り口になっていくのでは

ないかなと。その辺、一九六四年、六〇年前というものは、やはりそこからの変化というものはとてつもないスピードで変化しているので、ひとつ面白いのではないかなと思います。

それから、近世と近現代については、先ほど坂詰先生からもお話がありましたように、十分に使える旧市史があるの、今回新しいシリーズが出たらお蔵入りになるのではなくて、並べて使っていただきたい内容になっています。ただ前回は残念ながら論述の根拠となる資料集ができていません。かなり膨大な資料目録はきちんと作られているのですけれども、それを生かした資料集がないのと、やはり目録に掲載されている資料が、現状、どこでどう保管されているのかというところがちょっと危なっかしい部分があるのです。その見直しがまず大事になってくるかなと思っています。

私も公文書館に勤めておりますので、やはりその地域の歴史、資料自体がとても重要です。最終的にそのごく一部を使って刊行物ができるわけですが、やはりその地域資料自体を大切にしていくことを、この一〇年の中で意識していきたいなと思っています。

そういった意味では、先ほどから話の出ている武蔵国分寺という史跡を、ボランティアガイドの皆さんがたくさんおられたり、地域の中で守っていただく、語り継いでいく、保存していくという取組を国分寺市は経験しているのです、これは強みだと思うのです。ただ、言ってみれば、そういう地域の中の景観とか史跡とか古文書といった地域歴史資料というものを、この武蔵国分寺のようを守るうとする市民の結びつきが、それを一体として地域歴史遺産と呼べるかと思います。この地域歴史遺産を武蔵国分寺跡だけではなくて、歴史資料や歴史的な景観を含めて市民の皆さんとともに確認していくというのが、これからの市史編さんの事業の大切なことかなと思っています。

ですから、我々は当然成果物に責任を持たなくてはいいませんが、そのプロセスでできる学びの場みたいな、そういうものができてこそ小学生や中学生にも伝わっていく基礎ができていくのかなと思います。責任は重いですが、とても楽しみでもあるのだと思っています。

市長 ありがとうございます。荒井先生は、現在藤沢市にお勤めされながら、明治大学・駒澤大学で古代史の

ご教鞭を取られていらっしゃいますけれども、国分寺市にはどんなイメージをお持ちでしょうか。武蔵国分寺のことをご研究されていらっしゃいますね。

荒井 まず史跡という空間があるというのは一つ大きなポイントだと思います。市民共通の、ある意味憩いの場であつてもいいわけですし、学習の場であつてもいいわけですし、いろいろなことが展開できる場があるというのは、国分寺市の一つ大きな強みだと思います。

それともう一つ、国分寺という自治体の名称ですね。ちよつと前までは栃木県と佐賀県にもあつたのですけれども、今、全国的に国分寺という名前を持っている自治体はここだけです。これはもう売りに使うしかないと思うのですよね。市史編さんでも、国分寺の資料、古代の資料は悉皆調査というよりも、ある程度はすでに明らかになっている資料があります。それをどこまで追及するかという課題もございますが、せっかく国分寺という名前を冠している市町村はここだけなので、国分寺のことに關しては国分寺市史をみると参考になるというような、それぐらいの構想は少し考えてもいいのではないかなと思っています。

先ほど坂詰先生からお話がございましたように、国分寺市と府中市は、今の自治体としては分かれてしまっています。ただ昔は一緒に、その中でも行政が府中で、こちらは文化というイメージがあります。そうしたことをうまく府中と、つかず離れずというか、どう差別化するというところもあるんですけど、そんな形でやっていければ独自色がでるのかなと思っています。

国分寺というネーミングは古代なので、古代史的な国分寺、聖武天皇とか天平文化といったものが出てきてしまふのでしようけれども、その後もずっと続いていて、今でも国分寺というお寺さんがあるわけですね。そうした点で、国分寺市史の歴史を貫く一つの軸として、国分寺というものを取り上げていきたい。それがまさに国分寺市の歴史なのではないだろうか、そのように思っています。

ですから古代はどこまでやるか、中世・近世の中で全国的にどこまで広げていくか、そんなこともほかの部会長さんと相談していければいいのかなと思います。

司会 令和五年にたましん地域文化財団・東京都市町村自治調査会が共催で第二六回「多摩の歴史講座―多摩

の古代文化」という連続講座を開催しました。荒井先生は多摩地域の古代史で、今、非常にホットな話題の人物を取り上げ、「深大寺の白鳳仏と渡来人高麗福信」と題するご講演をされました。会場には、市民の方もたくさん足を運ばれていました。

古代史の分野では、こういった渡来人の研究も大分進んでいるようですが、前回の市史では、あまりクロースアップされていなかった印象がありますね。

荒井 渡来人高麗福信といわれますが、武蔵国の生まれの渡来三世なのです。そこはちょっと用語の問題として難しいところもありますが、この人は武蔵の国守、今で言えば東京都知事兼埼玉県知事を三回務めているという、奈良時代のこの地域の、政治的にも文化的にも非常に重要な人物です。深大寺の白鳳仏が国宝になりましたが、あの仏像を都のほうから持ってきたのも、背景には高麗福信がいるのではないだろうかというのが最近の学説なのです。

そうした意味では、高麗福信はとても注目すべき人物です。武蔵国分寺の造営がなかなか進みませんでした、福信が国守を務めているときに、テコ入れて国分寺の



古代史研究の進展を語る荒井氏

造営が進んだのだろうと考えられています。この福信という人物は、今回の新しい市史の中では大きく取り上げる必要があると思っています。

あと、冒頭にお話がありましたように、前回の市史の上巻が刊行されたのは昭和六一年ですから、それから

四〇年近く経っています。四〇年というのはかなり長い時間差がありますので、考古学の成果でも、この間、東山道武蔵路の発見がありました。

それから、国分寺に二つめの塔跡がみつかりました。この二つの発見は前の市史には入っていない情報なので、難しい問題は残っているのですけれども、これを市民の方にもわかりやすく紹介する。

それと、先ほどの先生方のお話を聞いて思いましたのが、この東山道武蔵路に関しましては現代的行政課題として保存運動がありまして、その結果として遺跡が残ったという経緯もありますから、それは現代史で扱うのか、古代史で扱うのか、いろいろ調整すべき課題はありますが、やはり市にとって大事な歴史ですので取り上げるべきだろうと思います。

もちろん、それと同時に、武蔵国分寺が大正十一年（一九二二）に国の史跡に指定された後、どう保存されて今日に至っているのかということも、武蔵国分寺が決して古代的な問題ではなくて、現代的な問題、あるいは未来につながる問題として押さえていく必要があるのだらうと。そういった点でもいろいろところで、専門部

会の縦割り、横割りではなくて、クロスしながら市史がうまく編んでいければいいのかなと、そんなことを思いました。

6. 全体総括

市長 ありがとうございます。今、部会長の先生のお話を聞いただけでも、新しい視点での市史ができそうだなという気がいたしました。

私は全国史跡整備市町村協議会の会長を五年務めていたのですけれども、その折に全国の国分寺を幾つか回りました。現存する建物はなく、所在不明な国分寺もあるので、武蔵国分寺のように遺跡が残っているというのは非常に価値が大きいのかなと。幾つかの首長さんから「全国国分寺サミット」をまたやろうよというお話を頂いているのですが、ちょっと途切れておりまして、ぜひまた復活させていきたいなと思っています。

これだけの国の財産を私どもは管理しているので、しっかりとこれからも、市史はもちろんでありますけれども、歴史を引き継いでいく、そういう役割が必要だと

また責務だと思つているところでございます。

最後に坂詰先生から、一言お願いできますでしょうか。坂詰 各部会長の方々からお話をうかがいますと、非

常にユニークな市史ができるのではないかなと思ひます。ぜひ他の市と同じようなものではなく、新しい切り口の市史を作つていただきたいと思います。特に国分寺が市制を施行して以降、羽貝先生のところは大変だと思ふのですけれども、資料集をしつかり出して、その資料集を基に国分寺市としては文書館もんじょかんをぜひ作つて、保存体制を確立していただきたいなと思います。

もう一点、郷土史でございますから、やはり資料は正確な資料を残すということが重要ではないかと思ひます。国分寺市に関係ある資料を、どうにかして正確に将来へ伝えていく方法をぜひ市としてとつていただきたい。また市史で集めた資料をどのように今後活用していくかという先の見通しをつけていただきたい。普通、市町村史ができるのと、集めた資料をそのあとどうするかということについてはなかなか難しいのです。図書館に入れてしまえばいいといった意見もありますが、ぜひ国分寺市の場合はどういうことをやったらいいのか検討して

いただきたいと思います。

目下、府中市では市制施行七〇年を迎え、ぜひ文書館を作って欲しいとお願いしているところです。やはり博物館、図書館、文書館、また美術館もありますけれども、市の皆さんのご協力をいただいて、市史が一過性に終わらないような、先々に結びつく内容をやっていただきたいと思います。

それから、お願いしたいのは、「市史だより（ニュース・レター）」を作成することが必要と思うのです。市史編さんはどのようなことをやっているのかを広く知っていただくことも重要です。私が伊東市史を引き受けた際には、「伊東市史だより」を市内全戸に配布することを提案しました。そうしましたら、年に一回ないし二回ですが、市長さんの英断で全戸配布が決まりました。他の市ではやっている例がありませんのではないかと思います。そういうことを市史が終わるまでやってもらいました。こういうことも市民の人の協力を得るために重要ではないかと思います。

また、「市史研究」という冊子を出す予定だそうですが、それでも、その場合にはあまり専門的な論文ばかりを載

せても意味がないのです。専門的な論文はそれぞれの所属の学会の雑誌に出せばいいのです。何も市史に出す必要はないと思いますので、市史研究は市史に即した分かりやすい内容の、啓蒙的な内容も含めるといいと思ってあります。特に講演会の内容はそっくり載せてもらいたい。そうすると、聞きに来られなかった市民の方も「市史研究」を読むことによって、こういう講演が行われたかを理解できる。

そういう点で市史研究の役割というものも、また大きくなっていくのではないかと思います。私は各地でかなり強引に主張してきましたが、案外住民の人にとっては評判よかったです。

先ほど市長さんもお話しになりましたけれども、市史は飾っておくだけでは意味がないのです。作成する途中で、市民の人、そして子どもさんたちに分かる写真を中心としたもの、技術が今、発達しておりますから、中間的なものでもいいと思うので、図録の市史もぜひ作っていただきたい。終了したときに、その改訂版を出せばいいわけですから、そんなことも考慮に入れていただいて、市史の活用をやっていただければいいと思います。

それから、先ほど新市民のお話が出ましたね。よく私も府中市で話しているのですが、市に転入をした新しい方には、その市が分かるパンフレットを渡す。極端なことを言えば、市史の概要版でいいから、それを配ってもらいたい。それで自分の入ってくる市がどういう歴史であつたのか、どういう成り立ちであるのかということを理解していただくために、現在の市の行政と同時に歴史が分かるパンフレットを作ってはどうかと思っております。できれば市史でそういう編さんもやっていただいて、市の行政の窓口の対応をやる。市史は決して孤立してないのだと、市役所全体の広報マンとしての役割を果たしていくことをしめさんと、単なる市史作成では意味がないと思うのです。ぜひそういったものをお願いしたいなと思っております。

幾つか勝手なことを申し上げましたけれども、最終的には市長さんと教育長さんの腕次第。お二人が市史作成にあたり叱咤激励して下されば、いい市史ができると思っています。

しかし、いざ始めてみると、期日どおりに原稿が揃わないこともあります。ですから執筆者は非常に人選が難

しい。下手をしますと、高度な内容の学術論文集みたいな市史ができます。それでは意味がないと思います。それはぜひ避けていただきたい。

ひとつのやり方として、小・中学校の先生方との協調で、どういう文章で、どの程度のものを出したらいいのかということ、ぜひ教育長のところで決めていただいて、誰にでも読める市史づくりを心がけて、開かれた市史を作っていただきたいと思います。そんなことを考えておりますので、市長さん、教育長さん、よろしく願います。

市長 ありがとうございます。背中を押されたというか、叱咤激励された部分が多くて、我々としても気を引き締めて、国分寺市制七〇周年に出来上がる目途でまいりましょうか。いずれにしても長丁場になりますけれども、先生方にはご苦勞をおかけしますが、ひとつよろしくお願い申し上げます。

まずはご健康であられることが大事でありますので、ぜひ最後まで一緒に刊行に携われればと思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。本日は誠にありがとうございました。今後ともよろしく願います。



対談された皆さま（左から荒井秀規氏・西木浩一氏・井澤邦夫市長・坂詰秀一氏・古屋真宏教育長・羽貝正美氏）

（出席者）

いざわ くに お 国分寺市長

ふるや まさひろ 国分寺市教育委員会教育長

さかづめ ひでいち 立正大学特別栄誉教授
市史編さん推進委員会副委員長

あら い ひ で き 明治大学兼任講師
原始・古代・中世部会長

にしき こういち 東京都公文書館課長代理
近世・近現代部会長

はが い ま さ み 東京経済大学現代法学部教授
現代市制部会長

（司会）

よ だ りよういち 市史編さん室長

【開催情報】

市制施行60周年記念 新たな国分寺市史編さん
事業着手記念トークセッション

テーマ…国分寺の過去・現在・未来

―新たな国分寺市史編さん事業に向けて―

日時…令和六年四月一二日（金）

会場…国分寺市役所市長公室

武蔵国分寺跡によせる心

坂詰 秀一

ただいまご紹介いただきました坂詰でございます。武蔵国分寺の遺跡が国の史跡に指定されて一〇〇年を迎えました。そこで、一〇〇年間に渡り国分寺の遺跡を保存し、調査・研究し、現在に至った多くの方々について紹介いたします。本日の題は「武蔵国分寺跡によせる心」といたしました。この題は武蔵国分寺に対しまして格別の愛着を持って調査をされ、今日の保存検討の基礎を築かれました早稲田大学教授の滝口宏先生が国分寺市の歴史講座のときにつけられた題名です。本日は滝口先生を偲びながら、併せて、武蔵国分寺跡を最初に発掘調査されました私の恩師である石田茂作先生を思い出してお話ししたいと思います。

石田先生が国分寺の遺跡を最初に掘られましたのが遠江国分寺でした。その発掘の経緯を踏まえて、国分寺の遺跡はやはり発掘調査をやることによって範囲も確

定し、伽藍の在り方も分かると提唱され、日本考古学協会の仏教遺跡調査特別委員会の仕事として第一に取り上げられましたのが武蔵国分寺跡でした。昭和三一年（一九五八）は学生時でしたが、私も調査に参加させていただき、初めて武蔵国分寺の遺跡に臨みました。それが武蔵国分寺跡の発掘に対する最初の経験であり、また思い出です。そのような石田先生に対する思い出と、その後、武蔵国分寺跡を調査・研究し、今日の保存の基礎を築かれました滝口先生。お二人の先生を偲びながら、進めたいと思います。

本日お話し上げます内容につきましては、今日お配りしましたレジュメを見ていただきますとお分りになるかと思えます。最初に国分寺の遺跡について注目され「杖をついた江戸の文人」、江戸時代の人々がどういう対応をされたかをお話しします。

二番目に、「遺跡を探った人々」と題し、お話ししたいと思います。探ったというのは、江戸時代は瓦に関心が注がれましたが、遺跡として国分寺跡をどう考えたらいいかということで臨んだ人々がおります。三番目に、その表面的な調査の結果を踏まえ、大正八年（一九一九）の東京府の、史跡指定に尽力し、報告した方々をご紹介します。それをもとにそれぞれの遺構を調査した方々もおられます。四番目として「遺跡を調査し、研究した人々」です。そのような表面的な調査踏まえて、遺跡それ自体を発掘調査して、考古学的に明らかにしたいという意図で臨んだ方々が五番目「遺跡を発掘し、探求した人々」です。それから六番目に、そのような遺跡を保存し、尽力した方々を紹介したいと思います。七番目と八番目で、この武蔵国分寺遺跡が東山道武蔵路、武蔵国府を踏まえて保存対象、研究対象になってきたことをお話ししたいと思います。最後に、武蔵国分寺の当面しております謎について、私なりの意見をお話ししたい。それから「国分寺市立郷土博物館構想」というのがありました。現在、武蔵国分寺跡資料館が建っておりますが、それ以前に郷土資

1 杖を曳いた江戸の文人

大田南畝（蜀山人）『調布日記』

斎藤鶴磯『武蔵野話』

植田孟縉『武蔵名勝図会』、『新編武蔵風土記稿』（巻之八十九多磨郡）

斎藤月岑（幸成）『江戸名所図会』（絵・長谷川雪旦）

屋代弘賢「不忍文庫」"武蔵国分寺古瓦研"

2 遺跡を探った人々

重田定一、柴田常恵、沼田頼輔

（根岸武香、蛭川式胤、住田正一、三輪善之助）

3 史跡指定に尽力し、報告した人々

鷲尾順敬、高橋源一郎、後藤守一、稲村担元

4 遺跡を調査し、研究した人々

石村亮司（喜英）、太田静六、宮崎 紘、鎌谷木三次、堀井三友、宇野信四郎

5 遺跡を発掘し、探求した人々

石田茂作、内藤政恒、滝口 宏、大川 清、甲野 勇

6 遺跡の保存に尽力した人々

星野亮勝、大場磐雄、棚 國男、岩永蓮代、星野亮雅

7 武蔵国分二寺跡と武蔵国府跡、東山道武蔵路跡

8 史跡の保存と整備

国分寺市、国分寺市教育委員会（国分寺市遺跡調査会）

付けたり

武蔵国分寺跡の行方（武蔵国分寺の謎、国分寺市郷土博物館構想、観光考古学と武蔵国分二寺跡）



坂詰 秀一 氏

料館構想という構想が立てられたことがあります。武蔵国分寺の瓦は江戸時代以来、膨大な数の瓦が出土し各地に保存されております。その瓦が全国に散らばっていませんが、国分寺市に施設があればそこで保管されたのではないかと。そういうようなこともあるので博物館構想と、

現在国分寺出土の瓦が全国どこに保管されているのか、紹介しておきたいと思います。国分寺の遺跡は調査し、研究する、そして地元の方々の協力の下に保存されているわけですが、その遺跡を今後どのように保存し、活用していったらいいか大きな課題になるうかと思えます。この点について、来月に観光考古学会・武蔵野文化協会と国分寺市教育委員会が共催して、その方向を探ってみたいと考えています。限られた時間でございますが、盛りだくさん触れてみたいと思っております。

ページを開いていただきますと、今まで国分寺に関係されてこられました多くの主な先生方の写真を並べてみました（写真1）。この写真を集めるのもちよつと大変だったのですが、教育委員会の中道誠さんが協力して、やつとできました。恐らく考古学の専門家を含めて、このような方々の風貌でご覧いただければと思います。ここでご覧いただきました以外の方々の写真をすべて集めたいと思いますが、残念ながら叶いませんでした。

最初に触れておきたいのは、この写真の上に「事々無礙法界底」「瓦礫洞人」とありますが（図1）、石田茂作先生の事です。石田先生は書をよくされ、展覧会までお

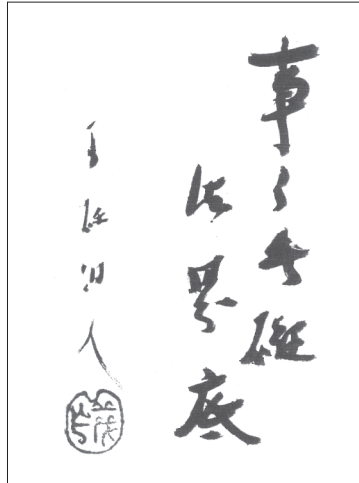


図1 石田茂作（瓦礫洞人）事々無礙法界底



重田定一
(1874—1917)



柴田常恵
(1877—1954)



後藤守一
(1888—1960)



稲村坦元
(1893—1988)



太田静六
(1911—2009)



石村喜英
(1914—1994)



宮崎 紬
(1914—2000)



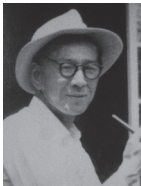
石田茂作
(1894—1977)



内藤政恒
(1907—1970)



滝口 宏
(1910—1992)



甲野 勇
(1901—1967)



大川 清
(1925—2003)



星野亮勝
(1905—1999)



大場磐雄
(1899—1975)



国分寺第28代住職
星野亮雅
(1934—2025)

写真1 武蔵国分寺跡・調査研究の先覚者、保存を推進した人

やりになった先生ですが、先生が著された『東大寺と国分寺』という本に「サインを頂きたい」と私がねだると、東大寺と国分寺を象徴する文句を書かれて、「よくこれをかみしめてみる」ということでいただいたのが、「事々無礙法界底」です。これは華嚴經の真髓を示しています。我々の考えている理念というものの、それから目にしているのは、それぞれ相関関係で成り立っている。それがだんだんと増幅していく、それらの全てを通して仏教の世界という華嚴の世界が成立している。これはすなわち、全部の人々の思いが集約されている言葉なのだということを紹介されました。ちよつと難しい言葉でございますが、「事々無礙法界底」は華嚴思想の根本をなすことだということだけお話ししておきたいと思います。

江戸時代の人々が研究をされてきた一番目「杖を曳いた江戸の文人」という題で書いておきました。この江戸の文人というのは、江戸時代というのはたくさんの方々が輩出されて文化が花咲いた時代でございます。最初に書いておきました大田南畝。おおたなんぼ皆さんは蜀山人でお名前はよくご存じかと思ひます。ここに書きました五人の方々をあえて触れましたのは、それぞれが江戸時代を代

表する文人で、これらの人々がこの国分寺まで来られているのですね。そして記録を残され、そこから採集する瓦類について文章を残されております。武蔵国分寺出土瓦、採集した瓦。それを愛玩し、多くの人々の注目を受けてきたようです。

大田南畝の『調布日記』。この人は多摩川の防水のお役人だったのです。多摩川を水害から守るためにどうしたらいいかということを担当するお役人だった。その大田南畝、蜀山人が国分寺まで来まして、この『調布日記』を読みますといろいろなことが書いてあるのですが、例えば「布目ある瓦と青き石のかけらを得た」と書いているのです。布目ある瓦というのは、皆さんご案内のように国分寺の瓦です。青き石というのは、恐らくこれは中世の板碑のかけらではないかと思ひます。文化年間のこととです。

それから二番目に書きました斎藤鶴磯は『武蔵野話』という、全部で六冊からなる地誌ですが、いろいろなことが書いてあります。国分寺に直接関係あるところでは、「この寺」というのは武蔵国分寺ですが「この寺の東南二丁ほどのところに石切戸という地名がある。この石は、

国分寺遠望

和永2年



国分寺
伽藍旧跡

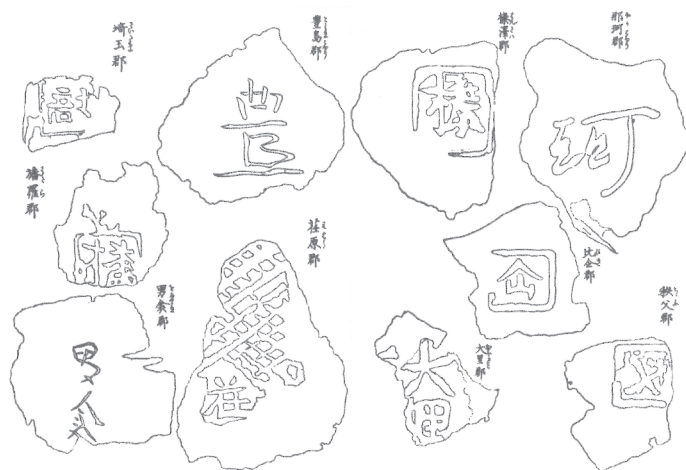


図2 斎藤月岑(幸成) 絵師 長谷川雪旦『江戸名所図会』(1834—天保5一年)

石を切つて石臼を作ったところだ」と。国分寺の礎石を使って石臼を作った場所です。石切戸という名前が残ったのではないかと書いています。武蔵国分寺跡の逸話だと思います。

次の植田孟縉^{うえだもうしん} この方は有名です。『武蔵名勝図会』を作り、『新編武蔵風土記稿』の編さんにも携わりました。『武蔵名勝図会』は二巻の本です。国分寺の西院、尼寺と呼んでいるところが「西の院」で西院と呼ばれていました。それが国分寺の尼寺だろうということを指摘しています。恐らく武蔵国分寺を指摘した人として最初ではないかと思うのです。そのような地誌を踏まえまして武蔵国分寺に注目された方です。

それから、次に斎藤月岑^{さいとうげっしん}を挙げておきました。この方は『江戸名所図会』、『東都名所図会』という本を残されました。有名な挿し絵が出ておりますのでよくご存じかと思いますが、その挿し絵を踏まえて国分寺の実際を触れられた方です。図2に『江戸名所図会』を掲げておきました。この図を見てみますと、国分寺を遠望すると同時に国分寺の状況がどうなっていたかという絵が載っています。この絵は、斎藤と一緒に現地に臨みました

はせがわせつたん
長谷川雪旦という有名な絵描きの絵だろうと思います。上のほうは国分寺跡の遠望、ちよつと小さいですが、遠望が描いてあります。その下の図は、国分寺が当時どういうふうになっていたのか、大きな礎石があるのがお分かりいただけるかと思います。国分寺の、恐らく金堂の跡だろうと思いますが、このような礎石があるところを訪ねて、そして瓦を大量に拾われていきます。その拾った瓦の一部が、その下に図を示しました(図2)。このような図で描く郡の瓦、文字瓦について、こういうのが出るのだと紹介されていました。『江戸名所図会』は、武蔵国分寺の状況をよく触れられた本ではないかと思ひます。

このような図をご覧になりますと、江戸時代にどういう状況だったかということが分かるかと思ひます。当時の国分寺の跡がよく分かるのです。真ん中の礎石のところに立っております二人が、恐らく斎藤月岑と絵を描いた長谷川雪旦ではないかと思ひます。そして、そこから出てまいります文字の書かれた瓦、文字の書かれない布目瓦については、斎藤の『武蔵野話』という本の中にあります(図3)。こういう布目瓦まで拾ってくるわけです。

江戸時代に武蔵国の郡の名前が書いてある瓦を集めることが流行ったのです。それから、瓦を使いまして硯を作りました。武蔵国分寺硯です。江戸時代に物産館や展覧会が開かれると、江戸の文人は武蔵国分寺硯という瓦を使った硯を作りました。そしてその硯をぐるぐる回したのですね。そういう記録が残っております。特に有名な随筆家でありました屋代弘賢は、この硯を愛玩しようです。このような瓦をたくさん集めた藤貞幹の『古瓦譜』にも武蔵国分寺の瓦が書いてありました。

硯が非常に江戸の文人の間でもてはやされ、字の書いた瓦、すなわち郡名の瓦と同時に、この硯が非常にもてはやされたということが資料を見るとよく分かります。瓦はいろいろな方がいろいろなところで書いておりますが、この武蔵国分寺の瓦は中国伝来の石硯とか、木で作った硯、化石で作った硯、銅で作った硯、そういう硯と並びまして、古瓦で作った武蔵国分寺硯が有名だったので、江戸の人々の面影がしのばれると思うのです。瓦に対する意識が既に江戸時代の人々にあったのです。

江戸時代の人々の瓦を愛玩するのに対しまして、明治時代になりますと、国分寺の遺跡の瓦の出た場所が注目

されるようになります。それに関連して思い出されますのは、江戸時代の終わりの文献などを読みますと、武蔵国分寺に来て瓦を拾うと、それはたたりがあるのだ。だから拾ってはいけないということが言われていたことが、いかに多くの人々が国分寺に来て瓦を拾っていたかということなのですね。文字のある瓦をみんなで見せ合いをして、品評会をやったらしいのですが。そこまで江戸の人々は武蔵国分寺に対する愛着を持っていたということが分かると思います。

そのような武蔵国分寺跡に対しまして、大正八年（一九一九）七月一〇日に史跡名勝天然記念物保存法が公布されました。それに先立ちまして、既に明治新政府は太政官布告を出したり、あるいはその後社寺保存法とか国宝保存法、あるいは重要文化財等保存に関する法制を成立させます。そのまとまりが史跡名勝天然記念物保存法であろうかと思えます。この保存法を基に各地域の遺跡調査というものが進んでくるわけです。

その中で保存法に基づきまして調査が東京府においても行われました。武蔵国分寺は明治三六年（一九〇三）に作られました帝国古蹟取調会で、会が重要な役割を果

たしました。帝国古蹟取調会というのは、同年に雑誌『古蹟』というのを発行いたしました。しかし、あくる年に廃刊になります。なぜ、この帝国古蹟取調会の『古蹟』という雑誌がなくなったかといいますと、日露戦争が勃発したからです。この雑誌が日露戦争の勃発を契機として廃刊したことがあとがきに述べられております。

この『古蹟』という雑誌があまり流布していなかったのでしょうか、多くの人々の目に触れることがなく、現在考古学のほうでも注視する方がいないのですが、この雑誌は注目する雑誌でございまして、特にこの帝国古蹟取調会は、調査を担当する人と、それからもう一つはこのような雑誌をどう編集するかという二本立てで作られました。その幹事で調査を担当したのが重田定一^{しげたださかず}さんで、それからもう一人が考古学をやっておりました柴田常恵^{しばたじょうえ}先生です。この二人が中心になりました帝国古蹟取調会が運営されました。

その会の研究の一つのテーマが、諸国国分寺の研究でした。これは今でも注目する業績だろうと思いますが、この雑誌を見ていると、一巻一号から廃刊になります。二巻八号に至るまで各地域の国分寺が触れられておりま

す。例えば創刊号では下野と伊予の国分寺、二号では武蔵国が取り上げられました。次の二巻四号では上総と下野、五号では千葉県安房と四国の阿波、両方の「あわ」が、六番目には下総、七番目は下野、九番目には常陸が取り上げられました。このような国分寺に対する、当時における現況のレポートが載せられたわけです。これは国分寺研究の本格的な始まりではないかと思えます。

その最初のほうで取り上げられたのが、明治三六年の「武蔵国分僧寺の廃址」です。図5に載せておきました。右のほうに『古蹟』とあります。そして、左のほうに「武蔵国分僧寺の廃址 文学士 重田定一」と書いてあります。重田定一の武蔵国分寺に対する本格的な調査の最初のレポートでございます。このレポートが基になりました、史跡名勝天然記念物保存調査、大正七年の調査に結びついてくるわけです。

普通は『古蹟』に載せた文献がよく取り上げられるのですが、重田さんは大正五年（一九一六）に『史説史話』という論文をまとめた本を出します（図6）。この中で武蔵国分寺についてさらに触れられております。これは『古蹟』に載せた文献とは違いまして、もっと別の視点

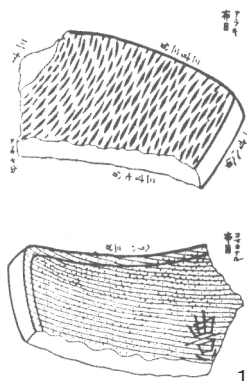


図3 斎藤鶴磯『武蔵野話』
(1815—文化12一年)



図4 沼田頼輔「武蔵國分寺遺跡考」(『武蔵野』1—1
1918—大正7一年)

(沼田頼輔「武蔵國分寺発見に係る文字瓦に就きて」
『考古界』1—1 1901—明治34一年)

武蔵國分僧寺の廢址
文學士 重田 定一

余は一月二十五日を以て柴田常惠君と共に國分寺村に至りて一日の調査を爲せり。近きものは尺度に依り、遠きものは測歩を用ひて一小圖を輯成せり。即添ふるに聊臆説を以てし敢て、博雅の叱正を乞ふ。

甲武鐵道の國分寺驛を南に距ること七丁許にして一聚落あり、これを國分寺村と爲す。村に一小隆起あり、蜿蜒東西に亘れり。その南面の石階上

一一

古蹟

第二卷
第二號

3

図5 『古蹟』(2—2、1918—明治36一年)

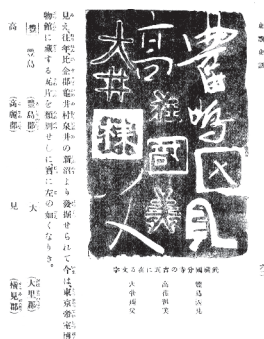
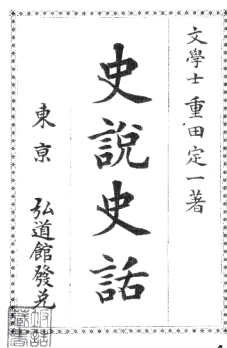


図6 『史說史話』(1916—大正5一年 弘道館刊)



4

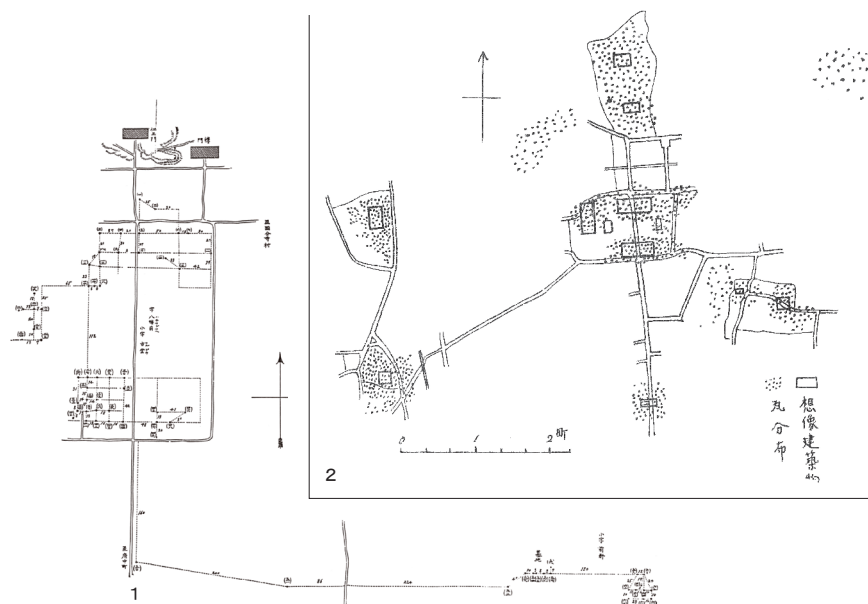


図7 礎石配列圖・遺址瓦分布圖
1 重田定一「武蔵国分僧寺の廃址」 2 東京府報告

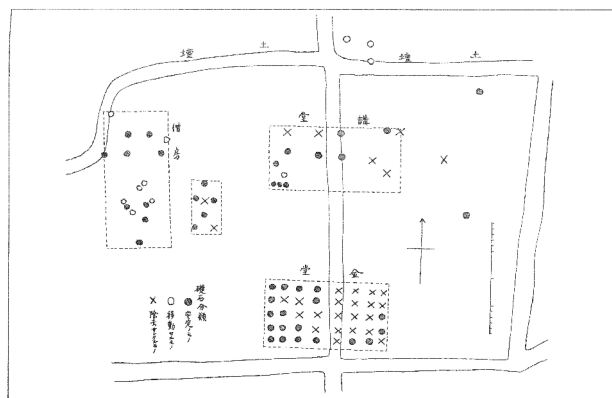
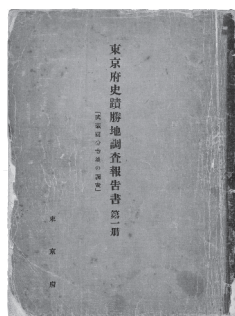


図8 東京府史跡勝地調査報告書第1冊『武蔵国分寺址の調査』(1923—大正12—年)

から重田さんがお書きになつてゐるわけです。重田さんが書いた文献は、『古蹟』と同時に『史説史話』にもあります。

図7の1は、重田さんが調べられましたときの国分寺の状況です。ここに書いてありますように、礎石がどういふふう配列されていたかを克明に調べられたのです。その調べられた状況をこのような図として発表されました。この図が中心になり、武蔵国分寺跡のその後の研究調査が進められます。明治三六年に重田さんは調査を行ったわけですが、そのとき編集の幹事をしております柴田常恵先生を誘ひまして、お二人で国分寺へ足を運びました。明治三六年一月二五日です。一日で重田さんと柴田さんが二人で国分寺跡を歩いたわけです。そして、礎石の分布を中心とした図をお作りになつたのです。この図を基にして書かれたのが、先ほど触れました『古蹟』の論文です。これが史跡指定の大きな役割を果たすことになります。武蔵国分寺に大きな礎石がたくさん残つてゐるのだということが分かつてきたわけですね。

この重田という方は武蔵国分寺の調査をやりました明

治三六年をもつて、東京から姿を消し、広島師範学校の教授になります。たまたま東京にいたときにこの雑誌の編集で武蔵国分寺の調査に当たつた。これは幸運といへば幸運だったのです。

それからもう一人、柴田常恵先生は考古学では有名でして、写真1に重田さんと並んで出しておきましたが、その柴田先生は内務省で史跡調査を本格的に進めた先生と伝えられています。先生は勉強一途の方でした。柴田さんは内務省で史跡整備の役割を果たすわけですが、このような明治時代の図を基にしたのが、図8の東京府報告です。この図が、その後多くの方々に活用されます。史跡調査の報告書で、『東京府史跡勝地報告書』です。よく調査をされておりまして、これが基本的になつています。重田さんの報告を基にして史跡指定がされたということですが、この図を見て調査した人がおられます。内務省では、大正八年の法令制定に従ひまして、各地域に調査をする申し出すように連絡します。それを受けた東京府では、早速内務省の指示に従ひまして武蔵国分寺の調査をいたします。そのとき調査に当たつたのが鷺尾わしお順敬じゅんけいさんと高橋源一郎さんです。この二人が東京府

の指示により調査に向かわれます。そのとき持参した図がこの重田さんの図だったのです。この図を基にして鷺尾と高橋御兩人が調査して、東京府に報告するわけです。

当時、鷺尾さんは東京府の史跡調査の担当の嘱託で高橋さんも東京府の嘱託をされておりました。この二人が大正八年の内務省経由の指示により大正九年一〇月から一月にかけて国分寺に向き調査をしました。その報告に基づいて、東京府は内務省に報告をしたのですけど、この大正九年の調査により新しいことが分かってまいりました。それは重田さんは平地の部分だけの調査しかやっていない。いろいろ調べてみると丘陵の上にも瓦が出るところが広がっていると(図7の2)。したがって、丘の上の調査も必要だということを提起されたわけです。そのため東京府としましては、それではその具体的な証明をするために、実際に一部発掘調査をして明らかにしなければならぬということになりました。それで鷺尾の紹介により、その調査に当たったのは稲村坦いなむらたんげん二元さんと、当時、東京帝室博物館に勤めたばかりの後藤守一ごとうしゅいさん。特に後藤先生は考古学者ですから、遺跡を発掘し礎石がある周りに瓦がどのようにあるかを調査して、確

かに推定尼寺の北の台地上、薬師堂の立つております僧寺の上、この両方に瓦が出るということを報告しました。史跡の範囲を広めなければならないということを東京府に報告をするわけです。その報告を受けて東京府は国分寺村長を通じて内務省に報告します。

その結果、早く大正一〇年に史跡指定をしていれよかったのですが、遅れてしまったのです。本来は武蔵国分寺は大正一〇年に指定された筈でしたが、先ほどお話ししましたように、鷺尾・高橋の指示により後藤先生などが調査した結果、そのまま現在知られている範囲、ここで重田定一の図面を基にして内務省に報告するということをせずに、調査を経てから報告をしようと時間が経ってしまった。したがって、高橋さんの調査、そして鷺尾さんの指示がなければ、そして稲村・後藤のお二人がいなければ、武蔵国分寺は大正一〇年に指定されているはずなのです。

ところが、結果からいうと、これはよかったのです。何故かと言いますと、東京府は史跡の調査のために、この調査を契機にいたしまして稲村・後藤両先生を東京府の史跡調査の嘱託にするわけです。稲村先生は曹洞宗の

方で、鷺尾さんの下で曹洞宗の歴史を研究していたのです。鷺尾さんが東京府の囑託として推薦しました。そして稲村さんが東京府に入られたわけです。ところが、稲村さんは文献を中心にしていたものですから、遺跡のほうはよく分らない。したがって、これについては当時の帝室博物館におりました後藤先生に頼みまして発掘するということになりました。その結果、平地だけではなくて台地の上で瓦が落ちている範囲、礎石の分布している範囲、総括的に遺跡の範囲が設定されたわけです。したがって、一年遅れてしまった。結果的には、現在、台地の上まで史跡が広がっておりますから、その地域にも今、遺跡がございます。当時、東京府が一年遅らせて武蔵国分寺の史跡を申請したのが、現在生きているのです。台地の上まで範囲が広がったわけです。そういうことで、武蔵国分寺は広い範囲が史跡の対象になったのです。

その結果を基にして、多くの方々が東京府の報告を基に調査を進めてまいります。その調査をした方は、たくさんおられますが、特に石村喜英先生、それから太田静六先生。この二人が精力的に調査をいたします。特に石村先生は図10の『国分寺大観』という本を出され

ました。先生が二六歳のときに書かれた本です。この本は非常に希少本で、石村先生の研究につきましては、図12の『武蔵国分寺の研究』が知られています。先生が四六歳の時ですから、二〇年たつてまとめられた本です。この石村先生の調査が表面的な調査の代表例と言われています。

太田先生は、当時、帝室博物館におられ、日本学術振興会から援助を得まして国分寺伽藍の研究を進められました。それは武蔵だけではなくて、上野、常陸、甲斐、そのような国々の国分寺の研究をやられました。その中でも武蔵国分寺に対しては格別な思いを持って調査を行いました。図9に図面を掲げておきましたが、従来は考古学の立場でやっているけれども建築史的な立場でやらなければいけないのではないかということで作られたのがこの図面でございます。太田先生は寝殿造りの研究で有名ですが、先生の精密な調査によりまして、国分寺伽藍の状況がよく分かってきたということがこれで分かるかと思えます。

このほか、宮崎紘先生は国分寺の瓦の研究をされました。武蔵国分寺の郡名瓦を検討した結果、武蔵二郡

誌雜學古考

第三卷 第六十三期

目次	頁
武蔵国分寺復原考(上・中・下) 太田静六	28-5, 28-7, 28-10, 1938-昭和13年
石村亮司『国分寺大観』 春嶺山莊刊	1937-昭和12年

會學古考

第三卷 第六十三期

(14)

武蔵国分寺復原考(上)

太田静六

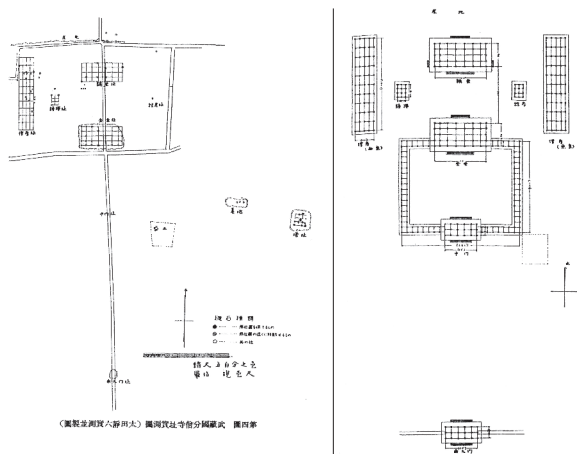


図9 太田静六「武蔵国分寺復原考」(上・中・下)『考古学雑誌』28-5、28-7、28-10、1938-昭和13年)

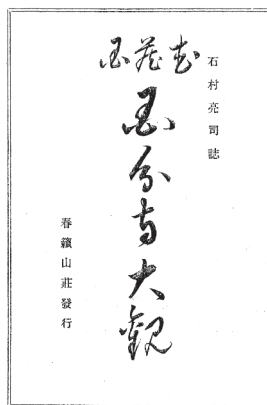
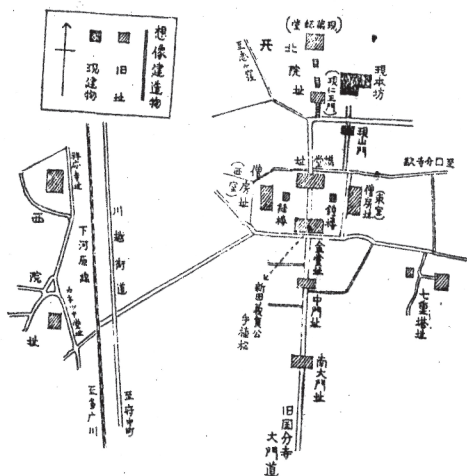


図10 石村亮司『国分寺大観』(1937-昭和12年 春嶺山莊刊)

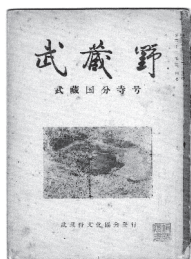


図 11
『武蔵野』(32-3・4「武蔵国分寺号」、1952—昭和27一年)

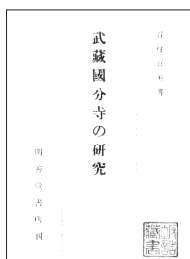


図 12
石村喜英『武蔵国分寺の研究』(1960—昭和35一年明善堂書店刊)

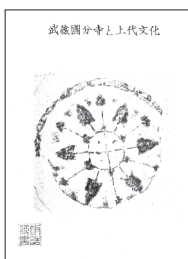


図 13
稲村担元編『武蔵国分寺と上代文化』(1959—昭和34一年国分寺市文化財保存館刊)

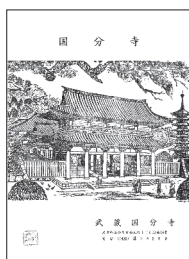


図 14
星野瑤子執筆『武蔵国分寺』(1968—昭和43一年星野亮勝刊)

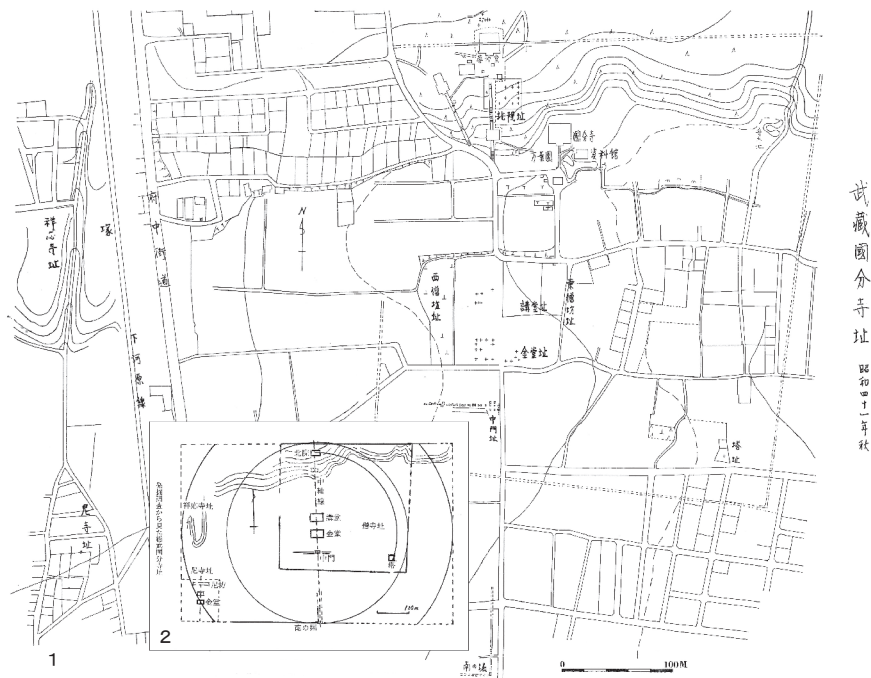


図 15 武蔵国分寺付近実測図・武蔵国分寺址略図

- 1 滝口 宏『武蔵国分寺図譜』(1966—昭和41一年)
- 2 滝口 宏「発掘調査から見た総武蔵国分寺址」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』13 1967—昭和42一年)

の中二〇郡の名の瓦しかない、新羅郡の瓦がないということから、武蔵国分寺の建立年代を具体的に提唱した方です。天平宝字二年（七五八）には、武蔵国分寺が完成していたのだ。だから、新羅郡の瓦がないという画期的な研究をおやりになった方でございます。

そのほか、文部省におりました鎌谷木三次さん^{かまやぎさん}、全国の国分寺を歩きました堀井三友さん^{ほりいみとも}、国分寺市の方々にはおなじみの宇野信四郎先生^{うののぶしろう}。宇野先生は、大量の瓦を蒐集された方で有名です。その瓦の研究に對しまして、発掘調査をして明らかしようと実施したのが、石田茂作先生です。先ほどお話したように、石田先生は日本で初めて国分寺跡を発掘調査によって明らかにしようという意図を持ち、遠江国分寺の調査を行ったわけですが、この石田先生が初めて武蔵国分寺跡を日本考古学協会の仕事として発掘され、今の我々に続く大きな成果をもたらしておられます。

この石田先生とともに調査したのは内藤政恒先生^{ないとうまさつね}であり、そして滝口、大川清先生^{おおかわきよし}でした。滝口先生は武蔵国分寺跡が破壊に瀕したときに率先して調査を行います。特に昭和三九年（一九六四）から昭和四六年

（一九七二）に至るまで、調査団の中心として調査を行いました。そのお手伝いをしたお一人が大川先生で、瓦の研究、武蔵国分寺の研究で有名な先生ですが、この大川先生もこの滝口先生に協力して調査をしました。

それから甲野勇先生^{こうのいさむ}。甲野先生は縄文時代を研究した人ですが、武蔵国分寺の丘陵の上、先ほどお話ししました現在薬師堂が建っております台地の上、西のほうへ二〇〇メートルぐらい行ったところで竪穴住居を初めて発掘しました（写真2）。国分寺の遺跡と密接な関係のある竪穴住居です。当時、国立高校におりました松井新^{まついしん}一先生^{いち}などが協力して発掘調査をしました。その一連の調査が、現在、国分寺市教育委員会で行っているものにつながるわけです。こういうような人々が遺跡の調査を行いました。

ところが、このような遺跡の調査を基にして、保存をしなければいけないということで中心になって協力いたしました方々がおりました。星野亮勝先生^{ほしのりょうしょう}は国分寺の先代のご住職でございます。星野先生は日本考古学協会の発掘のときにも率先協力していただきまして、国分寺の本堂に泊まらせていただいて調査した記憶がござい

ます。まさに、国分寺の保存に率先協力をされた先生です。その星野先生のご子息が、現在のご住職の亮雅先生りやうがです。写真を見ていただきますと、故人の先生方は四角。亮雅先生は今日もいらつしやっていますが、お元気でいらつしやいますから丸になっております。亮雅先生も国分寺市文化財保護審議会の委員として大いに協力していただいた先生です。

それから、國學院大學の大場磐雄先生おおばいわおも国分寺跡を破壊から守ろうと、くめぎくにお 桐國男先生とご一緒になって国分寺を守る会を結成して努力をしました。こういう方々の努力によりまして、国分寺の遺跡は現在に至っているということを私どもは頭に据えていく必要があるのではないかと思います。

これ以外にも多くの方々が協力してございましたが、このような先生方の長年に渡る努力によりまして、指定一〇〇年を迎えた今日の国分寺があるということです。国分寺は、国分寺僧寺、尼寺が立派な歴史公園として整備され現在進んでおります。また、お隣の府中市におきましては、武蔵国府の国庁の跡も分かりました。それに関連する遺跡も整備されております。これと同時に東山

道武蔵路が発掘されました。この遺跡も本来なくなるところを皆さんの尽力によりまして現在のような形で保存されている。国分寺の僧寺と尼寺、府中の国衙の跡、そして東山道。これは三位一体の関係で今後も調査研究が続くと思います。これらの保存と整備につきましては、国分寺市と府中市の教育委員会が調査を続けておりますので、今後ともさらに研究されるのではないかと期待されています。

最後に「付けたり」で「国分寺の行方」と書いておきました。それが、国分僧寺の北、現在薬師堂の南に中院、今、北院遺跡と呼んでいます遺構です。その中院は南斜面にある遺跡は一体何だろうかとか古来の謎になっております。なぜ中院とかといえますと、法隆寺の大菩薩藏経の奥書に承和一四年（八四七）国分寺の中院の僧の最安が一切経を写したという史料が残っているのです。そこでその中院という言葉が使われてきたのです。私はこの中院の遺跡は写経所ではないかと思っております。この時代は写経が大量にされたのですが、最安は中院僧と書いてあります。その後、経生、お経を写した人は沙弥と書いてあります。組織的に写経が行われていたとい

うことで、この中院は写経所の機能を持っていたと私は考えています。

それから、注意する必要があるかと思われますのは、恋ヶ窪廃寺です。その寺は僧寺の薬師堂の東北六キロメートルにあります。左に尼寺がありますが、伝祥応寺跡と言われているところです。そこから北東約七キロメートル、東山道の東、そこから二五〇メートルくらいのところでは、この恋ヶ窪廃寺は何だろうかということです、これも古来問題になっていた場所でございます。私は、これは国分寺の付属の阿蘭若あらんじやであろうと思います。そこは僧侶が修行する場所として村落を離れたところでした。現在、国分寺の遺跡では伽藍を中心とした研究が中心です。アーランジャの調査はやられておりませんが、武蔵国分寺でこのアーランジャは、恋ヶ窪廃寺跡と考えています。

また、尼寺の北方に伝祥応寺跡があります。この祥応寺が享保十一年（一七二六）に、現在、本多の祥応寺に移ったと記録が残っております。祥応寺の「祥」という字は「勝」という字を書いたのではないかと思うのです。「勝」と書きまして、勝応寺。勝応というのは、阿弥陀の

別称なのです。阿弥陀如来のことを勝応というのです。これは、平安時代の終わりから鎌倉時代にできました「覚禅抄」に阿弥陀仏だと書いてあります。恐らく、「しようおうじ」という読み方がそのまま残ったのでしょう。

この祥応寺は、以前、江戸の深川にありました真言宗の寺だったのが黄檗宗おうばくしゅうに変わります。「しよう」の字もその頃変わったのではないかと思います。祥応寺の近くに有名な鉄の阿弥陀像がありました（図16・17）。この鉄仏は現在府中の善明寺にあります阿弥陀仏の坐像です。この阿弥陀は高さが一七二センチメートルあります。現在、国分寺薬師堂の薬師は、一九一・五センチメートル。この阿弥陀像は祥応寺にあったのではないかと伝承があります。阿弥陀ですから、国分尼寺の北にあってもおかしくない。阿弥陀は、奈良時代から尼寺に阿弥陀を祀れという記事がありますから、阿弥陀が西の院におられ、東を守る薬師仏が僧寺の北の薬師堂に祀られているのは不思議ではないわけです。こういうことを考えてみますと、どうもこの祥応寺は、かつては阿弥陀寺と呼んだのではないかなとも思われます。

図15は滝口先生が苦勞して復元された伽藍図です。こ



写真2 国分寺址北方台地上 発掘の竪穴住居跡
甲野 勇『武蔵野を掘る』(1960—昭和35—年 雄山閣刊)



図16 植田孟緋『武蔵名勝図会』
(1836—天保7—年)



図17 斎藤鶴磯『武蔵野話』(1815—文化12—年)

これは発掘調査を一部やったときの図です。滝口先生なりに苦勞してお作りになった最初の伽藍図です。重田定一さん、そして東京府の報告に對しまして、滝口先生は新しい立場からこういう図をお作りになったと思います。

それから、現在、国分寺市教育委員会が調査しております薬師堂の北側に当たる場所、かつてここに保育園がありました。その保育園が撤去され、そこに公園を作ろうという話があり、現在調査しています（図18・写真3）。そうしましたら、予想どおり竪穴住居がここに存在することが明確になりました。これは、大正一一年に指定されたとき、この範囲まで指定しなければいけないとされた場所に当たるわけです。そこで竪穴住居が出てきた。

武蔵の国分寺は現在、資料館が建てられておりますが、博物館ができていれぱと思います。現在、国分寺址の瓦は東京国立博物館、そして、有名な平塚運一コレクションがあります、その資料は島根県にっています。それから、もう一つ有名なのは住田正一先生のコレクション。これは国分寺市に寄託していただいています。太田先生の資料は国分寺市に寄附していただきました。これは重要な資料です。太田先生が地上調査と併せて瓦にも

いろいろと意を尽くされたことが、よく分かるのです。

こういうことから考えますと、その先輩の方々が調べました瓦の資料はどこにあるか。私が調べた範囲でも一〇か所以上にあります。奈良の国立博物館に内藤政恒先生と原田良雄先生はらだよしおの資料が入っております。石田先生が奈良国立博物館の館長をおやりになっていた関係で、東京国立博物館には武蔵国の瓦がたくさんあるので、奈良にあつてもいいという先生のお話もあり、奈良国立博物館に入っているのです。

そういう瓦が今、どこにどういふのがあるかということとを武蔵国分寺の今後の研究のテーマにして専門の方々は調べられるといいと思います。ただ、これらの瓦はほとんど私的に発掘された瓦です。自由に掘られた。一番掘られたところが金堂の東、塔の南、塔の東。この三か所は大体掘った。明治時代に根岸武香ねぎしぶかうが発掘されました。それ以降、戦後に至るまでの近くは大発掘が行われました。発掘された痕跡というもののというのが今でも残っております。どこからどういふ瓦が出たかというところがよく分からないです。かつて、大川先生は、どこからどういふ瓦が出たかを調べようと追跡調査をしました。



図18 武蔵国分寺跡第780次調査地位位置図

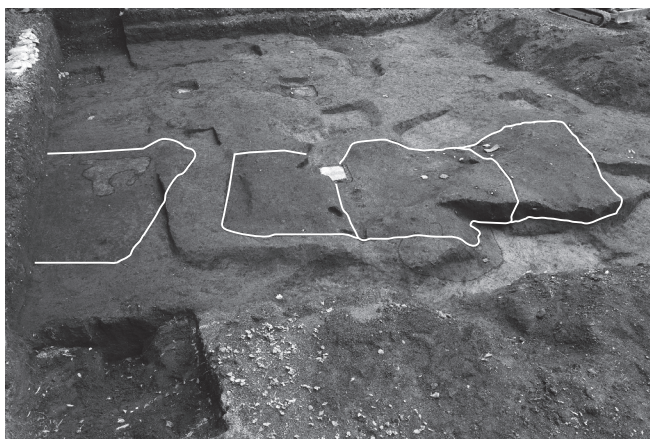


写真3 武蔵国分寺跡第780次調査 竪穴建物跡検出状況

多くの人と一緒に国分寺の御本堂をお借りした研究会の席上で、かんかんがくがく、この瓦がどこから出たかということを比定しようとしたことがあるのです。秩父

おりどいちろう

郡の瓦と荏原郡の瓦。この二つは徹底的に織戸市郎さんが調査して、こちら辺が出たのだなということを推定されたこともありすけど、ほかの郡のことはよく分からない。瓦は府中の大國魂神社にもあるのです。なぜかとい

いますと、この国分寺の瓦のコレクターとして有名な本多章吉さんが、当時の高等学校の先生でありました大

さわたりもりあつ

國魂神社の宮司の猿渡盛厚先生にレポート代わりに提出しているのです。ですから、大國魂神社には国分寺の

瓦があるのです。国分寺の瓦が混じっています。

そういうことで、いろいろな方々のコレクションというものがありますが、それらの瓦はどこからどういう状態で出たか分かりません。武蔵国分寺の塔の南側を滝口

先生と一緒に掘ったことがあります。東側も掘りました。出てきた瓦はみんな二次的に埋められたものです。文字

の書いていない瓦は埋めています。それが大量に埋まっている場所がありまして、それは重要だからどうにかしようということを行ったのが大川先生です。早稲田大学

に運びまして瓦の分析をされましたが、よく分からんぞとおっしゃっていたのを記憶しております。

こういうことから考えますと、武蔵国分寺の瓦は、江戸時代以来膨大な数量が残っております。それらの瓦を基に今後研究を続けていく。それらを収蔵する施設として武蔵国分寺跡資料館があります。これも今とは別な形で大きな博物館ができ、先ほど井澤市長がお話になりましたとおり、武蔵国分寺は全国で一番広いので、それにふさわしい立派な博物館を作っていただきたい。そのような博物館を基に今後調査研究が進んでいくだろうと思います。今まで多くの方々の尽力によりまして一〇〇年間続けられました調査、そして研究が、今後、それらの先輩の方々の意向を踏まえて、今後とも発展することを希望したいと思います。

私は国分寺市に住んで、五〇年になります。武蔵国分寺の調査専任の人が全くなかった国分寺市、そしてお隣の府中市においても、専門の調査官が配置されまして調査研究がやられるようになった。滝口先生を中心とする人々のご尽力の賜物です。また、歴代の市長さん、そして行政の方々、教育委員会の方々の尽力によってここ

まで来たのだらうと思います。これらの方々の努力を無
にすることなく、今後本格的な国分寺研究が始まる。こ
れから一〇〇年先が大事だと市長さんはおっしゃって
いました。まさにこれからの一〇〇年に、武蔵国分寺の研
究はどのように進展していくか、大変楽しみにしている
わけです。

限られた時間で申し訳ございません。一部省略しまし
たが、私の国分寺に対する思い、そしてこの滝口先生、
石田先生はじめ、皆さんが協力した研究を今後とも続け
ていただきたいと願っています。

さかづめ ひでいち 立正大学特別榮譽教授

【開催情報】

武蔵国分寺跡史跡指定一〇〇周年記念事業記念
講演会

演 題…武蔵国分寺跡によせる心

日 時…令和四年一〇月二二日（土）

会 場…国分寺市立いずみホールAホール



講演会会場風景

■講演会の記録■

国分寺の鉄道 ～東西、南北を結ぶ鉄路 そして新幹線～

奥原 哲志

はじめに

奥原 本日はご来場いただきまして誠にありがとうございます。
ごいます。鉄道博物館で学芸員をしております奥原と申します。私、最初は中央線沿線にあります新宿区立新宿歴史博物館で学芸員をしておりまして、主に地域の歴史を担当していました。新宿は、江戸の頃までは宿場があるくらいで、東京の中心ではありませんでした。それが鉄道ができたことによって、東京の中でも代表的な繁華街と言われるようになっていきました。

そういう鉄道がもたらすまちの変化というのでしょうか、そういったことに関心がございまして、いろいろやっているうちになぜか鉄道の深みにはまってしまいました。現在は、埼玉県の大宮にあります鉄道博物館で学芸員として働かせていただいております。

今日は、国分寺の鉄道について話をしてほしいというご依頼がありました。特に、なぜ国分寺に駅ができたのか。また、その後いろいろな鉄道路線や関連する施設ができてきますが、それがなぜなのかという話をしてほしいという依頼でした。いろいろ考えましたが、実は結構解けないところもありまして、逆にその辺は皆さんのほうが地元の歴史には詳しいと思いますので、私の話をいろいろと考えるきっかけにしてみたらいいかなと思っています。

ということ、まず一枚目。図1は何だかお分かりになりますか。これは明治時代の国分寺駅の様子を描いた絵です。『風俗画報』という雑誌がありまして、その表紙ですね。桜が描かれています。これは小金井堤の桜です。武蔵野、多摩地区の中でも小金井の桜は名所だったのですが、これ、もともとは国分寺が最寄りでした。

武蔵小金井の駅ができるのは大正の末なので、国分寺駅のほうが先にできていました。花見の季節は図1のように非常ににぎわったそうです。

それから図2の写真。ご年配の方はお分かりではないかと思うのですが、いかがですか。

来場者 下河原線。

奥原 さすがですね。国分寺駅の中央線のホームの南側にポツンとホームがありました。下河原線という中央線の支線ですけど、その電車を撮った写真です。実は今の国分寺駅は、この下河原線のある意味遺産みたいな



図1 『小金井名所図会』表紙 1906年
鉄道博物館所蔵



図2 国分寺の下河原線ホーム 1965年10月 撮影：巴川亨則

ところがあります。その話はこの後、おいおいしていきたいと思います。

Ⅰ. 東西を結ぶ鉄路

1. 中央線

まずは東西、南北に分けて話をしていきます。最初に国分寺に鉄道ができるのは東西方向の路線です。それが今の中央線(正式名称は「中央本線」。東京～高尾間は「中央線」と通称する場合が多い)です。中央線ができる前、多摩地域には近代的な交通機関はありませんでした。陸上交通としては、歩く、馬を使う、あるいは荷車、そういったものしか移動の手段がなかったのです。明治一三年(一八八〇)頃には甲州街道で乗合馬車の営業が始まっていたのですが、当時はもう雨が降ればぬかるむような状態ですので、これも輸送力としては大したことはありませんでした。それともう一つは船です。玉川上水。今も市の北のほうを流れていますけれども、そこを使つた舟運ですね。明治の初めには舟で人や荷物を運ぶということをしていました。ただ、玉川上水というのは水道ですよ。上水道のための水路ですので、そこで舟を使うと水を汚してしまうということで、すぐに廃止になってい

ます。

江戸時代から、主に甲州街道を使って、甲州(現山梨県)のほうから物資の輸送が行われていました。明治時代になると、横浜方面へ当時の輸出品の生糸などを運ぶであるとか、いろいろな輸送の需要が増えてくるわけです。そうすると、それまでの移動手段では全く足りないということで、近代的な交通機関が必要になってきます。

最初に考えられたのは「甲武馬車鉄道」という馬車鉄道です。馬車鉄道というのはもう日本にありませんけれど、当時としては比較的輸送力のある交通手段でした。要するに、レールを敷いて、馬が引くということですね。それをまずつくろうという計画が立てられます。このときは、甲州系の実業家だった岩田作兵衛という人が計画を立てました。初めの頃は玉川上水の堤を使って、新宿から羽村、そして青梅へ向かうルートを考えていました。ただ、当時、多摩の中では八王子が大きな都市ですので、そちらの方向へルートを変えていきます。その次は、蒸気鉄道。蒸気機関車を動力とした鉄道にしようということに計画が変わっていきます。

もう一つ、甲武馬車鉄道のほかに武甲鉄道という計画

もありました。これは多摩地区の名望家、地域の有力者が計画したもので、最終的にはその両者が一緒になって甲武鉄道という会社をつくります。会社の名前が、甲武の甲は甲州の甲、甲斐国の甲の字ですね。それから、武は武蔵国の武ですよ。名前がまさに表しています。が、地元、多摩地区の資本、それから甲州系の資本、それが合同した形です。

さらに、横浜へ行くか東京をめざすかという話が出てきます。そこでまた武蔵鉄道という計画も出てくるのですが、これは八王子から横浜の方へ向かう路線をつくらうというものでした。一時期、多摩地区は神奈川県に含まれていた時期もありました。ですから、やはり経済的な交流もあり、東京へ向かうよりも横浜、当時の開港場、貿易港ですけれども、そちらと結ぶという動きもあったのです。しかし、やはり首都東京へ向かうほうが現実的だということと、まずは放射状の鉄道をつくることを優先するとう当時の国の方針もありまして、最終的には東京へ向かう計画を立てていた甲武鉄道が免許を得ています。鉄道事業に関しては、国が認可をするという形になります。「私がつくりたいから勝手につくります」と

いうのは許されていませんでした。

2. 甲武鉄道による建設・開業

この後、甲武鉄道という会社が路線をつくっていくこととなります。最初から国がつくったわけではなく、いろいろな人が出資をした上で鉄道会社をつくって、この鉄道がつくられたというのが一つの特徴ですね。初めは、新宿から八王子の間を結ぶという計画でした。新宿までは、日本鉄道という私鉄の会社が今の山手線の西側部分をつくっておりまして、品川から赤羽の間が開通していました。八王子から西はのちに国が鉄道路線をつくることになったため、その間を結ぶ鉄道ということになりました。

今の中央線もそうですけれど、新宿から立川の間は、ほぼ一直線で結ばれています。これもいろいろな話がありますが、多分つくる側の論理というのが最優先だったのだと思います。その当時、今の中央線のルートはあまり集落のない場所でした。それから地形的にも平坦な場所が多いので、鉄道を建設するには非常につくりやすい

場所だったのです。あと、つくる側の論理でいうと、一直線に線路を敷けば最短距離でつくることができますよね。そうすると建設費が安く済むわけです。恐らくはそういうところが最優先で、このルートが決められたのではないかと思います。

今までよく言われていたのが、初めは甲州街道沿いに鉄道を敷こうとしたけれど、当時の宿場町が反対したと。宿場がさびれるとか、火事が起きるとかいろいろ理由で反対したので、諦めて何もないう武蔵野台地に一直線の線路を敷いたと言われていたのですが、実は裏づけになる史料はありません。この時、明治二〇年代に入っていますので、最初の鉄道ができてから一五年くらい経っています。鉄道ができることによる経済的な効果は知られていた時期です。ですので、その時期に正面切って反対をするということは、あまりなかったのではないかと。むしろ、この頃になると、条件闘争というのでしょうか。ここを通してくれとかここは通さないでほしいとか、そういう話は他でも多くありました。逆に真つ向切って反対している動きというのは少なくなっていました。それよりも、誘致活動、うちのほうへ鉄道を通してくれ

という話ですね。そちらのほうが多かったようです。また、そもそも、当時甲州街道沿いに鉄道をつくるという計画はありませんでした。

以前に調べた方がいて、どうも昭和の初め頃、学校の副読本で、そういった説が開始したようです。それもちゃんとした根拠があつてそういう話をしたわけでもなさそう。最近では、甲州街道沿いの関係者が反対したという説は成り立たないと言われてきています。ただ、なぜそういう話が出てきたのかというのは、考えなければいけないのではないかと思います。今のところ分かっていることは、甲州街道沿いを検討したという形跡はないということ。それからつくる側の論理を最優先で建設したルートが、今の中央線ルートではないかということです。それで、実際に開業するのは明治三二年（一八九九）ですね。このときは新宿から立川の間で開業しています。先ほどこちよとお見せしたように、小金井桜の開花時期に合わせて開業させました。多摩川の鉄橋の工事に時間がかかったのだ、その四か月後に立川と八王子の間が開通して、ようやく全通となっています。今年（二〇二四年）でちょうど開業して一三五年になります。



(『鉄道院文書 甲武鉄道一』) 1888年 鉄道博物館所蔵

鉄道博物館で持っている資料の中に、この甲武鉄道の許認可に関する書類をつづった簿冊があります。図3はその中に収められている計画路線図です。計画段階で現地を測量して、それを基にしてつくった実測図です。新宿からずっとカーブして、西を向いて中野、次が境。これは現在の武蔵境です。それから国分寺、立川まで行つて、そこからぐつとまたカーブして、多摩川を渡つて八王子へ行くというルートでつくられています。この直線区間が約二五キロです。日本の鉄道で言うと二番目に長い直線区間ということになります。

開業したとき、最初は中間の駅は中野、境(武蔵境)、国分寺、立川の四駅でした。運転本数は一日四往復の旅客列車が走っていました。時間としては、新宿から八王子の間は一時一分四秒くらいで走っています。最初は営業を日本鉄道に委託していました。その後しばらくしてから甲武鉄道が自分で運営する形に変わっています。

この講演の打合せをしたときに、なぜ国分寺に駅が置かれたのかについて話をしてほしいとご依頼がありましたが、これは結論から言うとうっかりません。いつ、どこに駅をつくったという記録は出てきますが、なぜそこに

駅を置いたかということは、当時の史料を見てもまず書いていないのです。ただ、何でかなと思って考えたときに、ある程度の距離ごとに駅を置いていったということが考えられます。開業したときは、当然単線でした。複線ではないので、列車が行き違いをしようとすると、駅でしか行き違いができません。ですから、ある程度の距離ごとに駅を設置しないと、複数の上下の列車を走らせることができないわけです。やはり駅が途中で必要になったというのが、要因の一つにあると思います。



図3 甲武鉄道計画路線図

距離で調べてみると、最初は中野から境（武蔵境）の間は一キロで、結構距離があります。その二年後に荻窪ができますので、そうすると中野から荻窪まで四キロ、荻窪から境まで七キロくらいです。その後、武蔵境から国分寺までが五・七キロ。国分寺から立川までが六・一キロくらいでした。当時、蒸気機関車が客車や貨車を引いていたのですが、当時の鉄道は大体五、六キロごとに駅を置いていました。最初の鉄道が開業した新橋と横浜の間は二九キロあります。その間に最初は駅を四つつくっています。ですので、駅間で言うところ、五キロから六キロくらいで一駅ずつ設置しているのですね。甲武鉄道も、その当時の感覚で言うところセオリーどおりに駅間の距離をとって駅を置いていったという感じがします。

もう一つは、縦方向の主要な道路と交差する地点に駅を置いたのかなという感じはします。また、今の線路の位置より北の方に振ろうとすると、今度は妙正寺川などの川筋がいくつかあって、その地形に干渉してきてしまいます。逆に南側に振ろうとすると、国分寺崖線がありますよね。多摩川に向けて低地になるところです。それに当たります。なるべくアップダウンがない状態で線

路を敷こうとすると、多分このルートが一番、当たりがない場所と言うのでしょうか。そういう場所だったのだろうと思います。

「なぜ」という話になると、説明ができない状況ではありますが、多分そういう技術的な話であるとか、沿線の地理的な話、そういったことをいろいろ考えてこのルートにした。そこから駅の位置を決めたのではないかと思います。だから、国分寺の駅は、偶然と言ってしまう過ぎですけど、そういう形で駅が置かれたのかなと思います。しかし、後々これがものすごく意味を持つてくるのですね。やはり駅ができる、他の鉄道路線が接続したり、駅周辺にいろいろな施設が置かれたりするきっかけになっていきます。ですから、最初に国分寺に駅が置かれたということが、後々の国分寺と鉄道の関わりを考えるうえで、大きな意味を持つことになります。

図3の国分寺付近をアップにしたものが図4です。集落などはあまり描かれていませんが、よく見ると、当時の村落の名前が入っています。このポチポチとあるのはどうも緑地のように、黄土色になっているところは地形に凹凸がある場所を示しているようです。路線は本当に

真つすぐですね。定規を当てて一本線を引いたかのように見えます。もう一つ言うと、国が建設業務を代行してつくったのですが、当時は国の力が強く、問答無用に近い状態で線路を敷いていったようです。「おまえら、言うことを聞け」くらいの感じですよ。だからこそ、こ

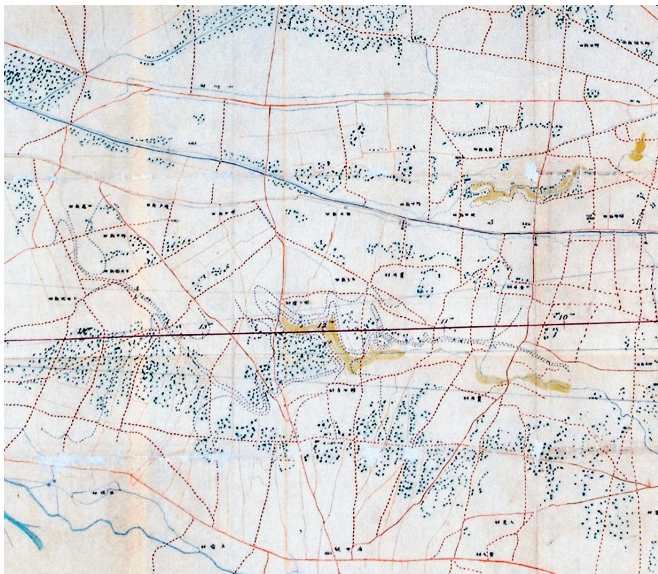


図4 甲武鉄道計画路線図(『鉄道院文書 甲武鉄道一』)部分



図5 甲武鉄道営業開始並二発車時刻改正廣告 1889年

鉄道博物館所蔵

ういう直線の線路が敷けたのでしよう。

あとは、ほかの路線でもそうですけれど、例えば人がたくさんいる場所、集落がある場所とか、もともと都市だった場所とかを経由しようという考えが

明治時代の鉄道にはあまりありません。それよりはつくる側の論理で、ここを通したほうがうまく線路が敷けるという場所を選んでおり、まちの中心から外れた場所に駅があるとか、そういったところが結構多いのです。多分その最たる例が中央線なのではないかと思えます。

図5は、甲武鉄道が開業したときの広告です。文字ばかりで見づらいですが、各駅の旅客列車の時刻表が載っ

ています。国分寺から出る列車は、上り下りともに午前中に二本、午後に二本となっています。最初はこの状態から始まったということですね。広告では沿線の名所も紹介しています。一番最初に紹介しているのは、小金井桜です。やはり桜が一番の名所だったということです。それから、名所旧跡として国分寺の紹介もあります。

図6は、甲武鉄道が開業したときの錦絵です。新宿駅から列車が走っていった、立川、八王子へと向かいます。国分寺はちょうど真ん中あたりにあります。やはりこの中でも強調しているのが小金井の桜。それから多摩川。これはアユ漁とか川遊びだと思っています。あとは高尾山ですね。何を売りにしようとしていたのが、この錦絵を見ると分かります。

先ほどお見せした図1の雑誌も同じです。表紙に「小金井名所図会」と書かれています。これは小金井の桜だけで一冊特集しているのですね。その最寄りの駅として国分寺が紹介されています。この当時は花見をするときに仮装するのがやったそうです。それでいろいろな格好をしている人が描かれていて、駅員さんが困らされています。このうち、注目していただきたいのが、ホーム



図6 錦絵 蒸氣車往復繁榮之図 1889年 鉄道博物館所蔵



図8 甲武鐵道乗車券 1902年
鉄道博物館所蔵



図7 甲武鐵道一等乗車券 1892年
鉄道博物館所蔵

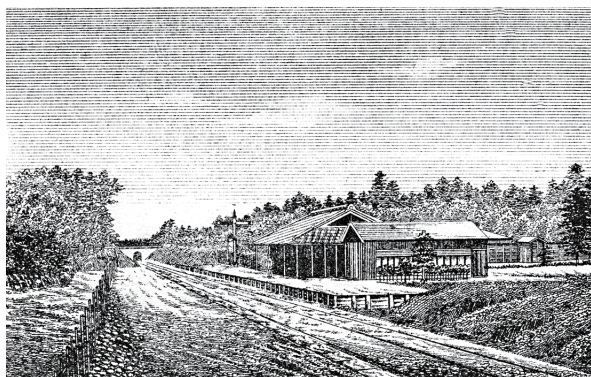


図9 國分寺停車場(『甲武鐵道茂与利名所案内』1889年) 鉄道博物館所蔵

に沿って列車が停まっていますよね。今の位置関係で言う、西武国分寺線のホームの位置です。そこを最初は甲武鉄道、中央線が使っていたということが分かります。

図7・図8は当時の乗車券です。関係者に配っていたパスで、これにはかぶとのイラストがあります。甲武鉄道は、武田氏を意識しているようです。かぶとのイラストの前立ての飾りのところに、「甲」の字を六個丸く並べています。甲が六で「甲武」という語呂合わせなのですが、これをいろいろな場所で使っています。ちょっと遊び心があつたようですね。

開業したときには今でいうガイドブックがつくられまして、図9はその中の挿し絵です。こちらが国分寺の駅です。どうでしょう。今と全然違いますね。北口の方に接してホームがあります。これが甲武鉄道の上り列車のホームです。反対側にもう一ヶ所、相対式という向かい合った形でホームがありまして、こちらは下りのホームです。先ほどお話ししたとおり、今の西武国分寺線が停まっているホームがもともと甲武鉄道が使っていたスペースです。今日、私は西国分寺から中央線の上り列車に乗ってきて、その時に前を見ていたのですけれど、今の中央

線は国分寺の駅に入るときに少し南に線路を振っていますよね。曲がらずにそのまま真っすぐ行けば、本来はこへ着きます。もともとは直線の状態で線路を敷いていて、こへ着くという形だったのです。今でもこういった名残があるのだということがよく分かります。

3. その後の中央線

甲武鉄道は始め新宿から西へ向かつてつくられますが、その後都心へ向かつて路線を延ばしてきました。結構早い時期に少しずつ、都心に近い方向へ向けて線路を敷いていくのです。この辺が他の放射状の路線とはちよつと違うところですね。実は、新宿から今の東京駅の間は踏切が一つもありません。明治時代からです。これはかなりすごいことで、要するに道路と鉄道を全て立体交差させていたのです。やはり、踏切ができると道路側の交通が制限されるわけです。それを避けるために、明治時代の半ばには既に踏切ゼロの路線をつくっていました。そういつたところの考え方は非常に先進的な鉄道だったのだと思います。この路線は、大正時代に東

京駅まで延びます。ほかの路線に比べると早い時期に都心部まで到達していました。これが結果的に、中央線沿線に早い時期から居住者が増えたり、駅の利用が増えたりということの大きな要因の一つになっていきます。

もう一つ、路面電車以外の鉄道で、最初に電車の運転を始めたのもこの甲武鉄道でした。明治三七年（一九〇四）、日露戦争の頃、今は飯田橋という駅がありますが、その東側に置かれた飯田町から中野の間で電車の運転を始めます。今、東京はどこでも電車が走っていますが、当時の主流は蒸気鉄道です。蒸気機関車が客車、貨車を引くスタイルでした。その場合、終点に着くと機関車のつけ替えをしなければいけないわけです。だから、折り返しの運転をしようとすると手間と時間がかかります。また、SLに乗られた方はお分りかかと思いますが、電車に比べると加速が遅いのです。トップスピードになるのにどうしても時間がかかるので、運転間隔を詰めるのが難しいのです。それに対して電車は、極端に言えば、終点に着いて運転士さんが反対側の運転台に行けばもう発車ができるわけです。折り返しが簡単にできるということ。また、加速・減速の性能が高いので、列車の運転

間隔、何分おきに走るかというのを詰めることができまう。電車にはこういった特徴があるので、利用者の多いところ、都市部の鉄道としては非常に適しています。甲武鉄道では、それを二〇世紀の初めにはもう始めていたということですね。やはり非常に先進的な会社だったと思います。さらに、そういう電車が走るとなると、都市内での経済活動、あるいは人の動きが活発になりますので、鉄道が都市活動を支えるインフラとして非常に有効に使われることになります。そのきっかけをつくったのが、この甲武鉄道ではないかと思っています。

その後、明治三九年に鉄道国有法という法律ができたことで、甲武鉄道は国に買収されます。いわゆる国鉄中央本線に変わりますけれど、この甲武鉄道の電車が今のJRの電車のご先祖様になったのです。ですから、早い段階で甲武鉄道が都心部まで直通したこと、電車の運転開始が非常に早かったこと、それが中央線の発展の大きな要因になったと言えるかと思っています。

図10は、今の水道橋辺りを写した絵はがきです。明治の末くらいですね。今の外堀にかかる橋の上を東京鉄道（のちの東京市電）の路面電車が走っています。その上を、



図 10 水道橋付近を行く中央線の電車と東京鉄道の電車 1908 年 鉄道博物館所蔵

立体交差する形で甲武鉄道国有化後の、今の中央線の電車が走っている様子が分かります。これ、何が違うと思いますか。路面電車は、人や荷車、自動車、そういったものと一緒に走っています。例えば、道路信号があればそれで止まらなければいけません。ですから、スピードが出せないのです。それに対して、中央線の電車は専用の軌道敷を持っています。そうすると、いろいろな支障物を気にすることなく走ることができます。ですから、スピードも出せる。ほかの利用者に影響されずに走ることができるといことですね。このように、実は路面電車と専用の軌道敷を持つ鉄道というのは、かなり違いがあります。

図11の電車は、実は今、一両だけ残っておりまして、私どもの博物館に展示されています。二八両つくられましたが、車体が小さかったので、大正時代になると地方の私鉄へ売られていきます。電気品を全部外し、客車として売られていった先が、長野県の信濃鉄道(現大糸線)、その後松本電鉄(現アルピコ交通)へ移ります。鉄道博物館ができるときに、松本電鉄で引退後も保存されていた車両を譲っていただきました。今は客車の状態ですけ

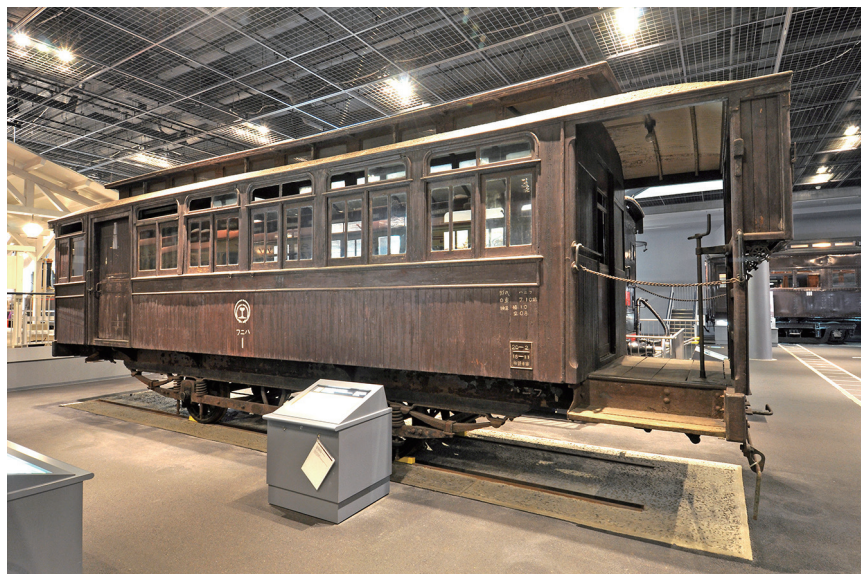


図 11 鉄道博物館に展示中の甲武電車（ハニフ 1） 鉄道博物館所蔵

れど、電車の第一号という存在でして、それを今、鉄道博物館で保存させていただいています。

先ほどお話したとおり、甲武鉄道は国に買収されます。それによって中央本線の一部になり、一体的に列車の運行することになります。八王子までの間の鉄道ということではなくて、東京から山梨県、それから長野県、その先を結ぶ幹線鉄道の一部として位置づけられました。その後、今から一〇〇年くらい前に関東大震災という大きな地震があり、都心部が火災でかなり燃えてしまいました。それによって、それまで東京の市内、街なかに住んでいた人たちが郊外へ移住をする。それに加えて地方から出てきた人たちも郊外に住むようになり、今言う中野区や杉並区、その辺りの人口がものすごく増えていきます。どうしてそこが選ばれたのかというと、やはり東京まで電車で直通できるというのが非常に有利だったのだと思います。利用者がどんどん増えてくるので、輸送力を増やさなければいけなくなり、震災の前、大正一年（一九二二）頃には既に国分寺まで電化されていました。

電車が走るようになり、明治の末から複線化が進めら

れ、上り列車と下り列車にそれぞれ専用の線路ができません。昭和の初めには高尾、そのころは浅川という駅名でしたけれど、そこまで電化されました。先ほどお話したとおり、電化されると列車の運転回数も増えますので、かなり早い時期に便利な状態になっていたわけです。これによって、さらに沿線に人がたくさん住むようになりました。ほかの周辺路線はどちらかと言うと戦後になってから住む人が増えていくのですが、中央線は大正の末、昭和の初め頃から、沿線の市街化が進んでいったということが言えます。

もう一つは、よく中央線文化と言いますが、駅ごとで独自性というのでしょうか。街の色というのがつくられていったのもこの頃からだと思います。なぜそうなったかというのは結構難しいのですが、例えば私鉄。東急や小田急などいろいろありますけれど、そういうところは私鉄の資本で、鉄道を敷くだけでなく沿線に宅地の分譲をしたり、行楽地やデパートをつくったり、その会社の色というか、特色のある開発をしています。一方、中央線の場合は、国の鉄道だったものですから、国鉄がそういうまちづくりに関わることはありませんでした。



図 12 武蔵境付近の一直線の線路 昭和初期

鉄道博物館所蔵

た。ですから、成り行き任せというと言葉が悪いですが、多様性というのでしょうか、そういうものが出てきます。私鉄の会社による均質な開発ではなくて、それぞれがてんでばらばらに発展していったら、それぞれの独自性がありましたと、そういうことではないかと思います。そうやって独自の文化が育まれていったようです。

図12の写真は、武蔵境付近で撮られたと思われます。御覧のとおり本当に一直線ですね。明治時代のことを知っている方にお話を聞くと、中野の駅から西を見る

と武蔵境まで見えたというのです。「本当か」という感じもしますが、それくらい見えたそうです。本当に真つすぐなのですよ。今は結構曲がっ

で見えているのは、昭和四〇年代に高架の複々線にしたときに、工事の都合で線路を北へ振ったり、南へ振ったり、場所によっていろいろな振り方をしたので、少しくねくねしているように見えるのですが、もともとはこういう状態だったということです。

図13は国立駅舎の写真です。この場合は、後でお話しますけれども、堤康次郎という方が国立学園都市と名づけて、宅地分譲をしています。そのときに駅を新たに



図13 国立 昭和初期 鉄道博物館所蔵

つくりまして、この駅舎を寄贈しました。非常におしゃれな駅舎ですよ。高架線の工事をするとときに支障するということですが、一旦撤去したのですが、今また駅前に復元されています。



図14 浅川(現・高尾) 1928年 鉄道博物館所蔵

まちの象徴として人々に親しまれた駅舎です。

図14が浅川の駅舎。今の高尾です。この駅舎も建て替えの話が出てきているようですが、もともとは新宿御苑で大正天皇の葬儀が行われた

時につくられたものです。新宿御苑から多摩御陵まで霊柩列車で柩を運んだのですが、そのときに中央線の新宿御苑沿いに仮駅舎がつけられました。その駅舎を葬儀が終わった後に移築したのが、この高尾の駅舎です。高尾に移築されたのは、多摩御陵が近いということもあったのだと思います。このように、やはり中央線は駅ごとに色があるのがよく分かります。

II. 南北を結ぶ鉄路

1. 川越鉄道、多摩湖鉄道

(現・西武鉄道国分寺線、多摩湖線)

今度は南北を結ぶ鉄路についてお話したいと思います。

国分寺に甲武鉄道（中央線）ができた次に開通した鉄道は、川越鉄道という私設鉄道でした。今の西武国分寺線、新宿線に当たります。甲武鉄道の主要な株主と、沿線の有力者が出資をしてつくった会社でした。当時、川越は埼玉県で一番人口が多い都市です。また、新河岸川という川がありますが、川越はその舟運の拠点だったのです。川越鉄道は、甲武鉄道の路線と川越を結ぼうということで行かれた鉄道です。そうになると、どこかで甲武鉄道、中央線から分かれて路線をつくることになりました。当時の駅は境、国分寺、立川で、そのどこから分かれて線路を敷くことになりましたが、やはり建設費を抑えたいという思惑がありました。そのためには、最短距離で行ける場所、地形の制約がない場所が望ましく、また途中で所沢、入間川（現狭山市）といった場所を通る

ことを考えると、国分寺から北へ向かうのが一番合理的でした。そういう理由で国分寺が選ばれたのだと思います。やはり、最初に甲武鉄道の駅が国分寺に置かれたことが、こういうところでものを言ってくるわけですね。

川越鉄道の開業は明治二十七年（一八九四）です。甲武鉄道ができた五年後に、国分寺から最初は久米川まで、その翌年には川越までつながっています。

路線の建設も、実際には甲武鉄道が受託して行ないました。川越鉄道は、甲武鉄道の実質的な子会社だったのです。経営も比較的安定していました。ただ、後に今の東武東上線や武蔵野鉄道（現西武池袋線）など、川越や所沢から直に東京へ向かう路線ができてくると、だんだん収益が落ちてきます。それに対抗しようということで、東京の中心へ向けて何とか路線を延ばそうと、今の西武新宿線がつけられることになりました。

会社としては何回も変わっていき、最終的には旧西武鉄道、主に今の西武新宿線を運行する会社になりました。昭和二年（一九二七）に高田馬場と東村山の間が開業します。これによって高田馬場から東村山、所沢を経由して川越に向かうルートがメインの路線に変わっていきま

す。そのため、国分寺から東村山の間は、西武鉄道の一支線という扱いになりました。

先ほど大正十一年（一九二二）に中央線が国分寺まで電化したという話をしましたが、川越鉄道が西武になった後も、国分寺―東村山間は蒸気機関車が客車・貨車を引いて走っていました。本線は電化して電車を走らせているのに、こちらは古いままだったということです。当時、国分寺―東村山間は西武鉄道の一支線として運行していましたので、ここを便利にすると国分寺の駅から中央線、他の会社の路線にお客さんが流れてしまいます。それを避けたかったためではないかと言われています。

あと、先ほどこのホームが甲武鉄道の上りホームだったという話をしましたが、普通だったら一番いい場所ですよ。ホームの横が駅の出入り口ですから。ほかの会社の路線が一番いい場所を使うというのは、普通はないですよ。ここに来ているというのは、やはり甲武鉄道と資本的につながりがあって、子会社扱いだったので、わざわざ甲武鉄道の線路を南側に移動させて、場所を空けてまでここに列車を発着させるようにしたのかなと思います。また、ある時期までは、ホームの番号

も国分寺線が一番線になっていたり、中間改札も、西武の国分寺線と国鉄の間にはなかったそうです。多分もととの川越鉄道と甲武鉄道の関係を反映していたのだと思います。

次に、今の西武多摩湖線のお話をします。これはもと多摩湖鉄道という会社でした。いわゆる西武グループをつくり上げた堤康次郎という方が、初めて鉄道事業に関わったのがこの多摩湖鉄道という会社でした。例えば、東急で言う五島慶太という人が実質的な創業者ですけれども、この時期の鉄道事業は、要はベンチャー事業なのです。だから、もう海千山千のいろいろな人が入ってきて、切った張ったの買取合戦をしていくのですが、その中でもあらゆる手を使って西武グループをつくっていったのが、この堤康次郎という人物です。もとはデベロッパー、住宅開発とか不動産事業とか別荘開発とか、そういったところから始まった人です。だから、最初から鉄道事業をメインにしていたわけではありません。自分が開発した住宅地の足として鉄道が必要だということで、鉄道事業に関わり始めたという、そういう人です。

堤康次郎は、まず国分寺大学都市という土地の開発を始めます。今の行政区分で言うところ小平市です。小平学園

とも言いますね。これが独特のやり方で、まちづくりの中心に、大学や高等学校など、高等教育機関を誘致し、それを中心にして住宅地開発を行う。学園都市と言いますが、そういった形でまちづくりをしていきました。先ほど国立駅の写真をお見せしましたが、国立も堤が開発をしています。今、国立には一橋大学がありますよね。そういう大学を誘致しながら、まちづくりの中心に据えました。国分寺大学都市の開発をする時も、高等教育機関を誘致しようとはしますが、なかなかうまくいきません。結局鉄道のほうが先で、昭和三年に国分寺―萩山間が開業、同四年に萩山―本小平間が開業しています。初めは、一両の電車が رفتり来たりしているだけで、周りもまだ住宅ができていない状態でした。その後、昭和八年に東京商科大学の予科、今の一橋大学が小平に移転しました。それ以降、学生を運ぶ、あるいはその住宅地に住んでいる人を運ぶことをメインにした路線になりました。商科大学予科の開校後は、学生が集中してパンクしている状態でした。一両しかないので乗れないということが

よくあったらしく、酔っ払った学生が本社のガラスをたたき割ったなんて話もあるそうです。

ただ、思ったほど宅地が売れなかったものですから、やり方を変えて、今の村山貯水池に注目します。もともと、あの場所は丘陵地帯でしたが、東京の上水道を整備する過程で、貯水池がつけられました。その周りは景色がいい場所なので、これは行楽地として売り込めるぞということになり、行楽輸送をメインにしようということになっていきます。そのために、昭和に入ってから村山貯水池まで各社が路線を延ばしていきました。今は多摩湖・狭山湖と言いますが、このネーミングを使いだしたのも多摩湖鉄道だったようです。

図15は、村山貯水池・山口貯水池の周辺路線図です。今は全部西武の路線になっていますが、御覧のとおり当時は三つの会社が入り乱れていました。多摩湖鉄道、旧西武鉄道、武蔵野鉄道はそれぞれ別会社でしたので、三つ巴で旅客の争奪戦を繰り広げていきます。駅名もころころ変わって、何が何だかよく分からない状況で、「村山貯水池」、「村山貯水前」、「村山貯水池際」と、もうどれがどれだという感じがですね。道に迷った人に聞か

図16は、戦前につくられた沿線案内図です。それぞれ



(新宿歴史博物館編『特急電車と沿線風景』2001年)



の私鉄が自社の沿線の魅力をアピールするために、絵入りの非常にきれいな路線図をつくっていました。これは旧西武鉄道のもので、今の地図は地形に正確に、客観的につくりますが、沿線案内図では自分の紹介したいものだけを取り上げています。ですので、一番大きく描かれているのは村山貯水池、山口貯水池です。これが一番売り込みたい場所なので、一番大きく描いています。一方で、ライバル会社は一切出てきません。本当は多摩湖鉄道と武蔵野鉄道の路線がなければいけないのですけれど、それは一切無視されています。

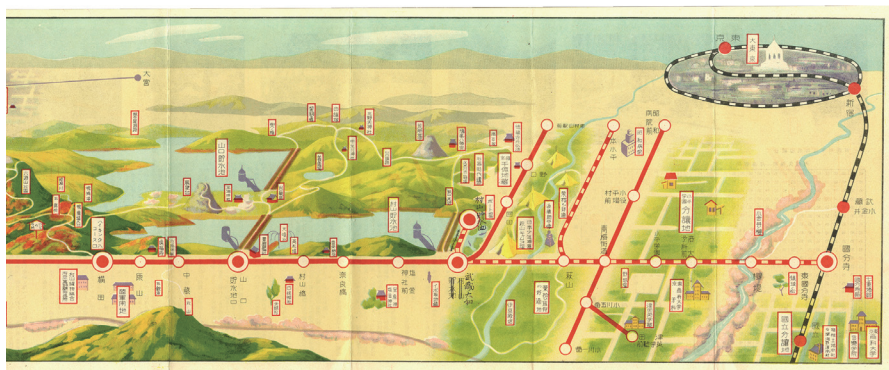
図17は多摩湖鉄道の沿線案内図です。こちらは多摩湖鉄道の路線だけが描かれています。赤い実線はバス路線です。また、これも村山貯水池、山口貯水池が一番大きく描かれている。それから、住宅分譲地。これらが一番強調したい場所ということですね。当然、この図にも旧西武鉄道は一切描かれていません。要するに主観で描いている地図なのです。このように、沿線案内図を見ると、当時の多摩湖鉄道が何を売り込みたかったのか、旧西武鉄道が何を売り込みたかったのかというのが非常によく分かります。こういったところが沿線案内図の面白いところ



図16 西武電車沿線案内 1937～38年頃 鉄道博物館所蔵

ところです。

多摩湖鉄道・旧西武鉄道・武蔵野鉄道のその後についてお話しておきます。最終的には、堤康次郎が武蔵野



鉄道の社長になり、多摩湖鉄道を武蔵野鉄道に合併し、さらに昭和二〇年に旧西武鉄道も合併します。そのとき、合併された側の社員が劣等感を持たないようにということで、会社名に西武を入れます。ただ、最初は西武農業鉄道という不思議な名前の会社になりました。日本中に鉄道会社はありますが、鉄道会

社に農業をつけたのはこれだけです。この時、食糧増産という会社も一緒に合併したので、西武農業鉄道という名前にしました。しかし、この「農業」という字は一年で外してしまいまして、結局、今の西武鉄道になったのです。

2. 下河原線

最初にお話した下河原線、これは南に向かう路線です。下河原線と言いますけれども、あくまでこれは通称です。もともとは多摩川の砂利を採取するための専用線で、東京砂利鉄道という私鉄でした。明治の末につくられた、人は運ばない、砂利だけを運ぶための鉄道です。大正時代に入ってからそれを国鉄が買収し、中央線の支線となります。当時ちょうど東京から上野の間の高架線をつくっている時期でした。そこで必要な建設資材や、バラストという線路に敷いてある砂利、そういったものを採取したり運搬したりする。そのための路線として買収した路線です。それが下河原線と呼ばれていました。

初めはそういった目的の路線だったのですが、だん

戦前は競馬の開催日だけの運行だったそうです。こうして、貨物だけではなく今度はギャンブラーを運ぶという、

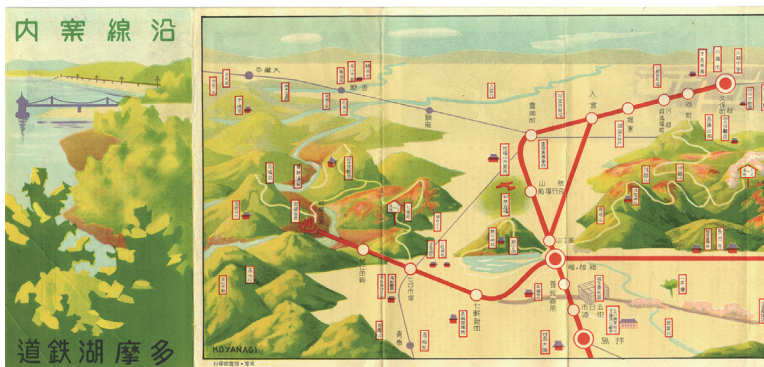


図 17 多摩湖線沿線案内 1937 年頃 鉄道博物館所蔵

だんいろいろな使途が入ってきました。東京競馬場が昭和八年（一九三三）に府中に移転してきました、競馬の観戦客を運ぶということとで、今の北府中の辺りから東へ分岐して東京競馬場前という駅をつくり、その区間の電化もして、電車を走らせるようになりました。ただ、

そういう役目も担うようになります。

さらに今度は、沿線にいろいろな工場が立地し始めます。今はトラックによる道路輸送で、製品や材料を運んでいます。今はトラックによる道路輸送で、製品や材料を運んでいます。が、当時は大量の荷物を運ぶとなると鉄道が一番便利でした。このため、下河原線からそれぞれの工場へ向かう引き込み線がつけられていきます。日本製鋼所府中工場や東京芝浦電気、これは今の東芝です。それから陸軍の燃料廠、府中刑務所にも引き込み線があり、そういった工場の原材料や製品の運搬もするようになります。戦時中は、競馬自体が開催されなくなり、旅客営業は休止していましたが、例えば東芝が自分の工場まで工員を運ぶといったことをしていました。これには一般の方は乗れなかったそうです。

戦後になると競馬が再開しますので、国分寺と東京競馬場前間で旅客営業を再開します。最初は競馬の開催日だけでしたが、途中から毎日運転になります。しかし、あまり長くは続きませんで、二十数年で廃止になります。これは、武蔵野線がつくられることになり、そちらに用地を譲って廃止されることになったためです。

このように、下河原線はその時々で使われ方がいろいろ

ろ変わっていききました。非常に異質な性格の路線だと思っています。これも国分寺から建設された理由は、競馬場へ向かうとすれば国分寺から分岐して向かうのが一番便利だったためだと思います。やはり駅があつたからですよ。駅があつたからこそ、国分寺から分岐していったのです。

一方、貨物輸送するために、駅の構内には多くの貨物用の側線をつくります。そのために、駅の用地を広げています。その用地が後になって、ホームを増やしたり、あるいは駅ビルをつくつたりという形で活用されています。つまり、今の国分寺駅はある意味、下河原線の遺産によって成り立っているといつてもいいのではないかと思います。

図18は国鉄の内部資料で、線路縦断面図、平面図が一緒に書かれています。上が平面図、下が縦断面図と言って、地形を縦に割つたものです。線路のアップダウンがどういうふうになっているかを示しています。これで見ると、南へ向かうにつれて少しずつ登っているのが分かりますね。上の平面図を見ると、国分寺から北府中信号場に向かいます。これは現在の北府中駅です。このとき

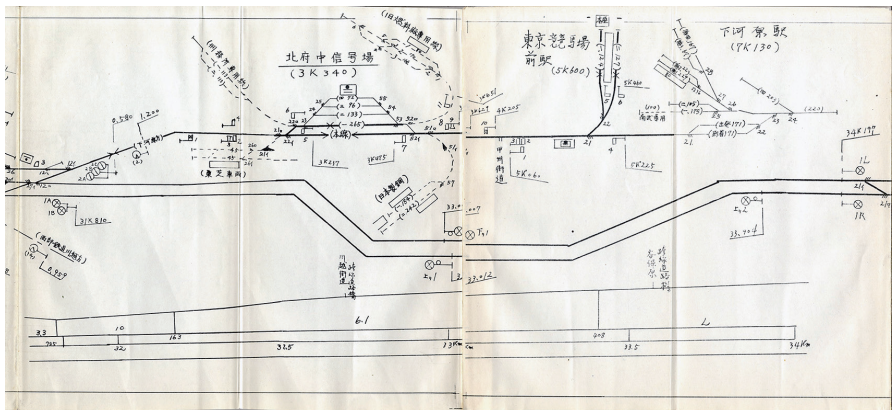


図 18 下河原線線路図 1953 年 『路線図 中央線 東京・甲府間』 鉄道博物館所蔵



図 19 下河原線で使用する 101 系
1961 年 8 月 撮影：巴川享則

んなことまでして
いたのか」という
感じがしますね。
その囚人専用の電
車について、当時
は一般の電車がも
のすごく混んでい
たのに、その電車
だけはあまり混ん
でなくてうらや

は信号場という、まだ駅になる前ですね。下河原駅へ向かう途中で分岐して東京競馬場前駅に向かう線路が記入されています。

さらに、先ほどお話した引き込み線、専用線と言いますけれど、これが東芝の工場へ向けて伸びています。その他に幾つもありまして、一番びつくりなのが、府中刑務所にも線路を引き込んだということですね。実は戦時中から戦後にかけて、囚人を国鉄の大井工場（現JR東日本東京総合車両センター）まで連れて行つて、働かせていたそうです。これはそのための線路です。「そ

ましかったという話が残っています。「うらやましいか、それ」という感じもありますが、そういった話からも、不思議な側線が敷かれていたことが分かります。

はじめに紹介した図2をもう一度見てみます。これは昭和四〇年頃の写真です。下河原線のホームで、茶色の旧型国電が一両で東京競馬場前との間を行ったり来たりしていました。後方に長い跨線橋があつて、左側に北口、右側に南口があります。私も子どもの頃、その頃はもう廃止されていたと思いますが、ホームがボツンと残っていたのを見た記憶があります。まさにそのホームの様子ですね。図19は国分寺駅の少し西側で撮られた写真です。電車が中央線に沿ってしばらく走っていった、西国分寺の手前で南へカーブしていくところです。競馬の開催日は東京から直通の電車が走ったり、三両、四両編成の電車も走っていました。一九七〇年代の下河原線国分寺駅の時刻表によると、大体三〇分に一本電車が走っていました。

図20は、東京競馬場前駅の写真です。武蔵野線ができることによって、東京競馬場前は廃止になります。これはそのときの様子です。こんな装飾をつけた電車が走っ

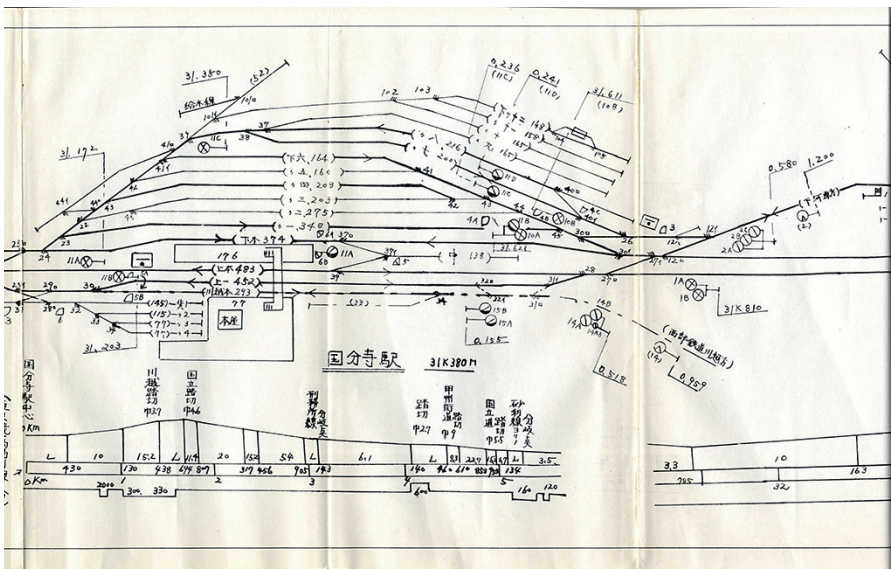


図 20 営業最終日の東京競馬場前
1973 年 3 月 31 日 鉄道博物館所蔵

トウェイとか、もつと長い駅名が普通にありますけれど、この当時としては一番長い駅名の駅でした。

図 21 は、国分寺駅付近の路線図です。左側が東京側、右側が立川側です。北口は「本屋」と記された部分です。もともと駅本屋という言い方をします。駅長室がある建物という意味です。ここに西武の国分寺線が来ています。一番いい場所は西武が使っていた。さらに駅本屋の上に島式のホームが一本あり、これを中央線が使っていました。その南側(図の上部)に、一二本線路があります。これは貨物用の側線です。この用地が後々駅の設備や駅ビルを拡張するときに役に立ちました。また、他にも行き

ていたということですね。ちなみに東京競馬場前という駅名は、当時国鉄の中では一番長かったそうです。今は高輪ゲートウェイです。



1953 年『路線図 中央線 東京・甲府間』鉄道博物館所蔵



図 22 国分寺駅構内 1987 年 8 月 撮影：巴川亨則

止まり式の貨物設備があったりします。下河原線だけではなく、西武国分寺線も貨物輸送をしていました。ここで国鉄への貨車の受け渡しをしていたので、これだけ広いスペースのある駅になったのだらうと思います。

図 22 は、JR になって直ぐの頃の国分寺駅の写真です。図 21 で言うところの線路がたくさんある場所ですね。この線路を全部外して、もう一本ホームをつくりました。これが今の中央線の下りホームになっています。これができた

ことで、快速電車と特別快速の接続がここできるところになったわけです。それでもまだ結構用地が残っていて、それが今では駅ビル、商業施設になっていきます。やはりこれだけの規模のス

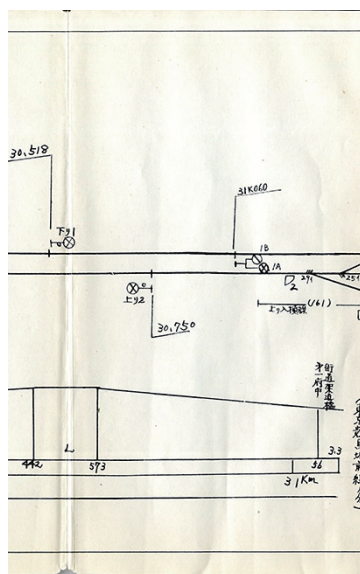


図 21 国分寺付近路線図

ペースがあるというのは、下河原線の遺産だと思っています。今はその跡地をいろいろな施設に転用している。こういう歴史があったからこそ、今の国分寺駅があるということではないかと思っています。

3. 武蔵野線

次は、武蔵野線。南北を結ぶ路線のひとつです。北へ向かう路線として西武の二線があり、南へ向かう路線として下河原線がありました。その下河原線と入れ替わる形で、この武蔵野線がつけられます。武蔵野線は昭和

四八年（一九七三）に開業していますが、計画は大正の末ぐらいにはもうありました。ただ、その当時は、必要も必要性もなかったもので、実現には至りませんでした。それが戦後になって、昭和三〇年代くらいから計画が練られるようになりました。

なぜそうなったかという点、やはり戦後になると東京の都市規模がどんどん大きくなっていったためです。東京の人口が一、〇〇〇万人を超えたのが昭和三七年度ですが、その頃は通勤・通学のための利用が増え、その対策として当時の国鉄が「通勤五方面作戦」というのを実施します。東海道本線、中央本線、東北本線、常磐線、総武本線を高架にして、さらに複々線にする。それまでは複線だったものを複々線にすることで輸送力をつけて、通勤輸送に対応しようとしたのです。

もう一つが、貨物輸送ですね。それまでは、今の湘南新宿ラインや埼京線が走っている線路、山手線の西側の区間ですけれども、そこが山手貨物線という貨物専用の路線が大正末期につくられていました。これが、東海道方面と、東北本線・常磐線・高崎線・上越線などの北へ向かう路線を結ぶ唯一の貨物用のルートだったのです。

ほぼ二四時間、一〇分おきくらいに貨物列車が走っていました。ものすごい数の貨物列車が走っていたので、同じ路線にもうそれ以上の列車を増やすことはできませんでした。

しかし、そういった貨物列車の多くは、東京を通過する列車でした。東京が終着の列車は、そのうちの四割くらいはなかったそうで、これらの列車は都心部を走らせる必要があります。ですので、東京から二〇キロから三〇キロ圏のところに新しく環状線、貨物輸送の新しいルートをつくって、それまで東京中心部を通過していた貨物列車はそちらへ通す。それで空いた分を旅客輸送にあてようという計画を立てました。

なぜ武蔵野線が西国分寺を通ったのかについてお話しします。当時の貨物輸送には操車場という施設がありました。各線が集まってくる地点に操車場をつくり、そこへ一旦貨車を集めて、それぞれ方面別の貨物列車を組成して、走らせるというやり方をしていました。東京地域には東海道本線の貨物線に新鶴見操車場という操車場がありました。それから、東北本線の太宮の南側に太宮操車場という操車場があり、この二つが東京地域では大きな

操車場として機能していました。その間を結ぶ新たな路線として、新鶴見操車場から南武線の少し南側を並行したルートで建設されました。その後、多摩川を渡ったところから大宮へ向かう際にどこを通るかということで目をつけたのが、先ほどの下河原線だったのです。要するに、もう線路がそこにあると。東側は、例えば府中刑務所があったり、後でお話する中央鉄道学園という施設があったり、西側には東芝の大きな工場があったりと、用地買収するのは難しかったと思うんですね。そうすると、もともとある線路用地を使えば買収する必要がないので、そこを通せばいいだろうということになったのだと思います。それで、中央線と交差するところに西国分寺の駅をつくった、国分寺ではなくて西国分寺を通ったということですね。

ついでの話になりますが、西国分寺の中央線のホームは、もとは両側にも線路を敷けるように設計していました。恐らく、西国分寺で快速と特快の接続をさせる計画だったのではないかと思います。結局それは国分寺でやることになったので、今のようなホームの脇にお店が並び形になったのだと思います。

武蔵野線の建設は、この時代になると国鉄が自らつくるのではなくて、日本鉄道建設公団という別組織が請け負っています。大体一〇〇キロ以上ですから、当時にすればかなり長い距離の路線です。これは貨物用ですので、非常に規格の高い路線を建設しました。線路等級は甲線という規格です。線路等級というのは、どれだけの重量の列車に線路が耐えることができるかという基準です。許容の軸重は一七トンとなっています。要するに重い列車でも走ることができるということです。貨物列車は全部で一、〇〇〇トンとか一、二〇〇トンという重量がありますので、その列車でも走行できるようにつくられています。また、最初から全線複線、電化もされています。あと、曲線半径、カーブですね。それもちょうど緩やかなカーブ。もう一つは勾配です。これは一〇パーミル(%)です。鉄道の勾配は千分率で表すのですが、一、〇〇〇メートル進んだときに一〇メートル上がるか下がるかということ。自動車だと何パーセントという勾配ですけど、鉄道の場合は、鉄の車輪と鉄のレールを使用しているため摩擦力が小さく、緩やかな勾配でないと貨物列車、特に重い貨物列車は走らせられません。ですので、

こういう緩やかな勾配にしています。

それから、停車場の有効長、駅で列車が停まれる長さですね。旅客輸送ですと、例えば今の中央線の通勤電車は二〇メートル車で、一〇両（本年三月からグリーン車導入により一二両化）ですので全長二〇〇メートルですよ。だから、ホームの長さは二〇〇メートルプラス一〇メートル、二一〇メートルくらいです。それに対して、西国分寺駅は有効長を六〇〇メートルとっておりま。貨物列車は旅客列車よりずっと長いので、それに対応できる長さになっています。あとは、踏切のない立体交差でつくっています。さらに、ロングレールやスラブ軌道を採用して、新幹線並みの規格でつくられている路線です。

武蔵野線は、計画当初は旅客輸送をする気がなかったようです。ただ、せっかく新規の路線をつくるので、旅客輸送もしようということになったのですが、その時にできるだけ省力化しようという試みがありました。初めから自動券売機や自動改札機などを導入しています。ほぼ五〇年前につくられましたが、当時としては非常に先進的な設備を持っていました。

最初は、山手貨物線から移ってきた貨物列車が五四本運転されていました。後に一四〇本になるので、ものすごい数ですよ。一方、旅客列車は本当におまけに近い感じで、昼間は四〇分に一本しか走っていませんでした。今では考えられませんが、最初はこれで始まったということですね。



図 23 開業前の府中本町 1973 年 鉄道博物館所蔵

図 23 は、武蔵野線が開業する前に、当時のスタッフが行った写真です。これは府中本町ですね。それから、図 24 も府中本町の駅の写真です。ホームなどがまだ出来上がっていない



鐵道博物館所藏

い状態なのがわかります。

図25は、当時の時刻表です。

やはり旅客列車

の本数は大分少

ないなというの

が分かります。

それから、時刻

表の右側に設備

の項目があり、

自動券売機や自

それを売りに

が、高速道路の

要するに立体

接続する方法をと

そこまででき

ましてほかの路線

うすると本線を

[illegible]

図 25 府中本町～新松戸間開業時の時刻表 1973 年 鉄道博物館所蔵



図 26 開業間もない西国分寺駅南口 1973 年 4 月
鉄道博物館所蔵

支障してしまうので、立体交差で分かれるようにして、スムーズに貨物列車を走らせることができるようにしています。ちょうど西国分寺付近には国立支線があり中央本線の国立方面へ出入りできます。それから、大宮支線、西浦和支線。これは東北本線に向かうルートです。それから、馬橋支線、北小金井支線。これは常磐線のほうへ行くルートです。そういった接続のとり方をして、貨物列車がスムーズに走ることができるようにしています。

当時としては非常に新しい考え方ですね。やはりゼロからつくったので、そういうことができるのでしょ。しかし、今はどちらかというと旅客輸送が増えて

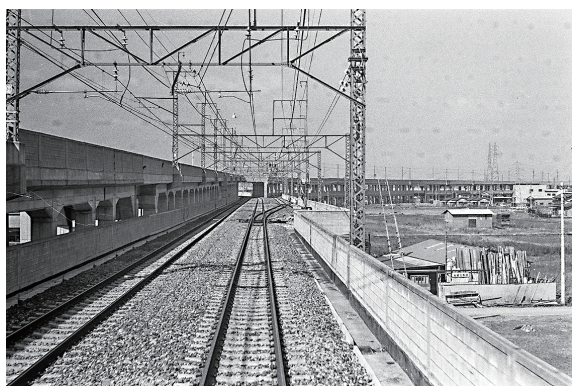


図 27 現在の武蔵浦和付近から見た本線と大宮支線(左)
1973 年 鉄道博物館所蔵

います。現在、一〇分に一本くらい旅客列車が走っています。今日も私は大宮から武蔵野線を経由してきましたが、車内はずっと立っている人がいる状態でした。やはりできた頃とは全然違って、旅客輸送が充実しているということですね。

図 26 はできた頃の西国分寺駅です。今の駅前には、いろいろな建物が建っているので大分変わっています。ただ、

駅の構造自体は今とあまり変わりません。次に、図 27 を見てみます。こちらは今の武蔵浦和駅付近の写真です。今は武蔵浦和で上に埼京線が

交差していますが、その辺りです。左側の太宮支線が、立体交差で中央の武蔵野線を乗り越して右側の太宮方面に向かう様子が分かります。武蔵野線は左側に曲がっていき、西国分寺方面に向かいます。ここを平面交差で横断して行こうとすると、武蔵野線の本線を支障してしまうわけですね。それを避けるために上をまたがせています。他線との連絡はすべてこういう形になっています。

Ⅲ．国分寺の鉄道関連施設

1. 鉄道技術研究所（現・鉄道総合技術研究所）

最後に、国分寺にある鉄道関連の施設についてお話をしたいと思います。一つは鉄道技術研究所。今は鉄道総合技術研究所と名乗っています。今の国分寺市光町にある大きな研究所です。これはもともと国鉄がつくった技術研究の機関です。明治の末に設けられ、鉄道に関する様々な研究、技術開発、あるいは調査、そういったことを行う施設でした。当初は浜松町にありましたが、規模が不十分なので拡張しようということになり、用地を探

しはじめました。三鷹付近と今の場所が候補になったそうですが、最終的には国分寺に用地を確保しています。ただ、このときは戦時中だったので、移転は実現しませんでした。戦後、昭和三〇年代に今の場所に移転して、鉄道技術研究所となります。

なぜこの場所が選ばれたのかというのは、よく分かりません。後でお話する中央鉄道学園もそうですが、恐らくは都心部から比較的近く、ある程度まとまった土地が確保できる場所を探していて、それに該当するのが今の場所だったのかなと思います。この研究所では、戦後は高速鉄道の研究に非常に力を入れていました。特に東海道新幹線の開業に当たっては、台車の研究や、高速運転のための研究をしていました。

なぜそういうことができたかというと、戦後に当時の航空技術者、海軍や陸軍で戦闘機の設計に携わっていた人たちを、国鉄が引き取ったからです。当時航空技術は最高水準のテクノロジーでしたが、戦争が終わると航空産業そのものが禁止され、それに携わっていた人たちが行き場を失ってしまいます。そのときに、優秀な技術者が散逸してしまうのはあまりにも惜しいということで、

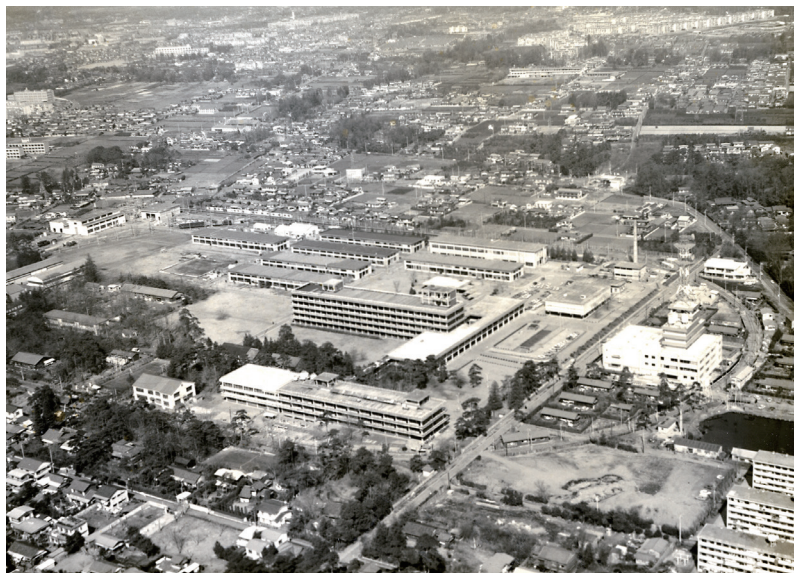


図 28 移転当時の鉄道技術研究所 1961 年頃 鉄道博物館所蔵

そういう人たちを引き取ったんですね。当時の国鉄の幹部は先を見る目があったのだと思います。そして、その技術者たちが新幹線の開発に際して力を発揮していきま。戦前にほかの分野で使われていた技術や、最新の技術なども取り入れて新幹線が開発されていくのですが、その舞台になったのがこの鉄道技術研究所だったのです。国鉄が分割民営化されるときに、財団法人に組織を改めまして、国鉄が行っていた研究開発を継承しました。今では、リニアモーターカーの開発などで中心的な役割を果たしています。

図 28 は、移転した当時の航空写真です。この建物自体は今も変わりませんが、非常に広い用地を確保しています。敷地内に周回の線路がありました。実際に列車を走らせることもできたそうです。次の図 29 はリニアモーターカーの写真です。約五〇年前、一九七二年の鉄道開業一〇〇年のときに、初めてリニアモーターカーが浮上走行する様子を公開しましたが、それをこの研究所の構内で行っています。これがそのときの写真ですね。この車両は今でも研究所に保存されています。図 30 も実験の写真です。これは新幹線用の高速台車の耐久試験をして

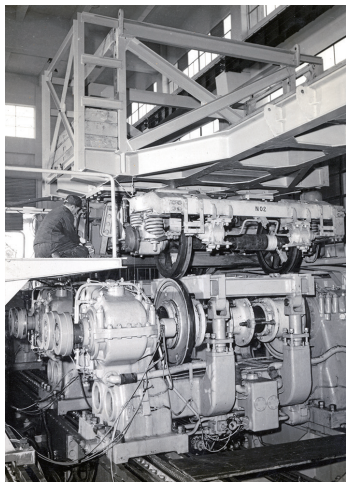


図 30 新幹線用高速台車試験
1960 年代 鉄道博物館所蔵



図 29 鉄道 100 年を記念して試験走行が
公開されたリニアモーターカー・ML100
1972 年 鉄道博物館所蔵

いるときの様子ですね。二〇〇キロでの高速運転というのはそれまで経験がなかったので、実際にいろいろなタイプの台車をこの試験台でテストして、実用できる台車はこれだというふうに絞り込んでいったそうです。

2. 中央鉄道学園

もう一つ、中央鉄道学園という、国鉄の内部の教育機関がありました。令和七年（二〇二五）一月に、国分寺市役所もこの跡地に移転するそうです。

鉄道はもともと外来の技術だったので、日本人技術者を養成しなければいけませんでした。そのため、鉄道が開業したときから、例えば測量、建築、電信など、それぞれの分野の職能教育をしていました。明治一〇年（一八七七）には工技生養成所という教育施設をつくっています。これは、外来の技術である鉄道の技術を、日本人が習得できるようにという目的でつくられた教育機関です。植民地などですと、鉄道の技術を現地の人に伝えず、宗主国が自分たちのものとして運営していたので、例えば機関車の助手はやらせても運転はさせないと

か、そういうやり方をしていました。日本の場合は、全ての分野の技術を自分たちでマスターできるようにしよう、早い時期から技術教育に力を入れていました。その結果、明治の末頃までには、全ての分野で技術的自立を成し遂げています。そうなるに当たって、この教育施設が非常に大きな役割を果たしたのです。

明治の末には、鉄道院職員中央教習所という教育施設をつくり、職員の教育をしていました。ここでは技術教育だけではなくて、いわゆる高等教育機関の役割も果たそうとします。その当時、鉄道に入ってくる人たちは、高等小学校卒とか中学校卒という人もたくさんいました。そういった人たちの中で優秀な人に教育を与えて、中学校卒、あるいは高等学校卒と同じ扱いをするということをしていました。さらに、高等文官試験という、戦前の上級公務員の試験に合格するような人たちも出たそうで、そういう内部での教育に非常に力を入れていました。

この施設は、戦前は東京駅の構内、その後は池袋駅の西口にありましたが、池袋の校地が戦災で大部分が焼失してしまいます。それを何とか充実させなければいけない

ということ、新たな校地を探しまして、国分寺が選ばれました。これも、戦時中に敷地は確保していたそうです。なぜ国分寺なのかというのはよく分からないのですが、やはり東京の中心部に比較的近い場所が良いということだったのでしょう。その中で、国分寺でまとまった土地が手に入ったので移転した。そういうことではないかと思います。

それから戦後になって、中央鉄道学園と名前を変えました。当時の国鉄の総裁は十河信二という方で、この方が実質的に新幹線を実現させた方なのですが、職員の教育にも、ものすごく力を入れていました。国鉄を世界一の鉄道に育てるためには、教育機関にも力を入れて充実させるのだと。一般の大学と同じレベルにすることを目指して、「国鉄大学」という言い方をしていました。時代によって、大学課程とか専門部とか、いろいろ名前が変わりますが、当時中卒や高卒で国鉄に入る方が多かったのです。そういった人たちを幹部として育てるために、大学課程をつくったのです。ここを出れば一般の大学卒と同等な扱いをするということで、単に技術教育をしていただけではなくて、国鉄の中の大学としての役

割を果たしていたということですね。

図31が中央鉄道学園の航空写真です。写真の上の方に西国分寺の駅ができていますので、武蔵野線が開業してから撮られたものです。右端の方にある線路が中央線。中央線と併走し、途中から左へカーブしていくのが下河原線の跡ですね。さらにここから引き込み線があつて、中央鉄道学園の用地内にも線路が敷かれていました。また、学園内には四〇〇メートルのトラックや野球場、テニスコートがあり、それから寮もあったそうです。面積は二二万平米もあり、非常に広い敷地を持つていました。これだけの用地を使つて、いろいろな教育を行つていたということですね。ここには今、高層住宅や公園、東京都立多摩図書館、東京都公文書館など、いろいろな施設が建っています。その敷地全部がこの中央鉄道学園だったわけです。

また、鉄道学園では、実物の車両を教習用の教材として使っていました。時期によつていろいろな車両が使われたのですが、図32の車両がその一つです。このカバのような形をした車両はEF55形という電気機関車で、戦前に流線形がブームになった頃につくられました。そ



図31 中央鉄道学園全景(『中央鉄道学園』1973年頃) 鉄道博物館所蔵



図 32 鉄道博物館に展示された EF55 形 1 号機

れでこういう丸っこい形をしています。この機関車が戦後、営業線で使われなくなってから、鉄道学園で教習用の教材として使われていました。その後いろいろな変遷を経まして、今は鉄道博物館で保存され、展示されています。

おわりに

では、最後に今日の話をまとめて終わりたいと思います。東西を結ぶ鉄路ということで、甲武鉄道、それから中央線がきわめて早い時期に開通していたということをお話しました。都心部までの直通、電化、複線化を、

今から九〇年ぐらい前には達成していました。それが影響して、非常に早い時期から沿線の市街化も進んでいったということです。また最初にお話したとおりで、国分寺に駅ができたのはなぜかというのは、分らない部分が多々あります。ただ、結果として、やはりこのときに国分寺の駅ができたということが後の発展、いろいろな施設ができたり、いろいろな路線が接続したりということに大きな影響を与えたということはあると思います。

南北に進む鉄路については、川越鉄道、多摩湖鉄道、下河原線のお話をしました。それぞれが個別の目的でつくられましたが、川越鉄道、多摩湖鉄道に関しては、現在は西武鉄道という一つの会社の路線として集約されています。下河原線は、武蔵野線に置き換わっていきましたが、国分寺の駅施設の拡張に大きな役割を果たしました。それから、武蔵野線は貨物の幹線としてつくられた路線というのが特徴です。それが現在になって、旅客輸送もかなり充実してきているということです。

あとは鉄道関連の施設ということで、鉄道技術研究所、それから中央鉄道学園がありました。これについて追加

でお話させていただくと、両方とも十河さんが総裁の時

代に移転・拡充されています。この方は戦後の一番国鉄が充実した時代に総裁を務めた方です。新幹線もそうですが、短期的な視野ではなくて、長い目で国鉄のあり方を考えていた方です。新幹線の建設は内外から大反対されましたが、それを押し切ってつくっている。新幹線がなかったら、今の日本の鉄道は、全く違う形になっていたと思います。それをこのときに実現させたことは、非常に大きな意味があったわけです。また、技術開発、人材の育成が大事だということで、研究所を拡張したり鉄道学園をつくったりしていますけれど、それが今に生きています。鉄道学園はなくなってしまうましたが、その跡地がいろいろな形で使われていることを考えると、やはりこの時代にそういった施設をつくったことには大きな意味があったのではないかと思います。

というわけで、いろいろ盛り込み過ぎてしまいましたけれど、これで私の話は終了とさせていただきます。最後までご清聴いただきありがとうございました。

【開催情報】

本多公民館・ふるさと文化財課・市史編さん担当連携歴史講座

演 題…国分寺の鉄道

（東西、南北を結ぶ鉄路 そして新幹線）

日 時…令和六年二月一七日（土）

会 場…国分寺市立本多公民館ホール

資料編さん事業がもたらすもの — 地域資料を守る、活かす —

西木 浩一

はじめに

西木と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、市史編さん事業をやることにどういう意味があるのかというお話ですけれども、自治体史の編さん自体は幾つかブームがあるのです。そのブームの流れと、今のトレンドとしてどういう課題があるのかということをお話したいと思います。

1. 自治体史編さん事業の歴史

一 時期区分と各時代の特徴・背景

I 明治後半～大正・昭和戦前期

最初に、自治体史編さん事業の歴史について整理します。戦前期、大正明治の後半から大正、昭和の初めぐら

いの時期に、当時は郡という行政区画がありました。例えばこの辺ですと北多摩郡になりますが、そういう郡史ですとか、その下のレベルの村史、町史というような編さん物が盛んに編集された時期がございます。その背景には、明治三二年（一八八九）に施行された市制・町村制という法律があります。この年は大日本帝国憲法が公布された年です。つまり、憲法体制を支える強力な自治体をつくっていかうということで町村合併が行われました。江戸時代以来の人々が暮らす自然な共同体であった村が、例えば国分寺ですと一〇か村あったのが一つの大きな国分寺村に合併しているわけですけれども、そういう生活の場であった共同体を相当数束ねる形で大きな村という団体がつくられています。

しかし、それでもなかなか財政的には厳しい。その矛盾が露呈したのが日露戦争の後です。かなり多くの戦費

を負担するということもあって、日露戦争の後に地方財政が破綻していきます。これを何とかしなければいけないと、内務官僚たちが中心になって地方改良運動というのを進めていくわけです。その一環として史跡を検証して郷土愛を育む、さらにそれを通して国民性を涵養する、^{かんよう}そういう発想で史跡保存運動や郷土史を書く運動が進められていきます。皆さんの地元にある、皆さんにとって宝物である武蔵国分寺跡、これが史跡指定されたのが大正十一年（一九二二）です。その前の大正八年に史蹟名



西木浩一氏

勝天然記念物保存法という法律ができていますが、これも大きくいうとこの地方改良運動を進める内務官僚の動きと連動しているものなのです。そういう背景の中で史跡指定が実現していきました。それと軌を一にするような形で、大正から昭和戦前期にかけてまず一つのブームが起こっております。

当時、どういう人が執筆したのかといえますと、多くはその郷土に実際に住まわれている郷土史家、あるいは郷土史団体の人々です。それがこの時期のトレンドであったのかなと思います。

そういう形で自治体史編さんは戦前に一回ブームを迎えます。ちょうど戦争の時期にかかって編集していたものが、戦後になって刊行された例も一部ありました。

Ⅱ 一九六〇年代後半～七〇年代

その後のブームが大体一九六〇年代の後半から七〇年代にかけて、これは地方自治法の下で自治というものが問われるようになっていて、自治意識が高まる中で、地域への理解を通じて、その地域の将来の発展を期している、そういう発想で地域の歴史を見直したという背景

を持っていたかと思えます。それから、この時期はやはり高度経済成長期でありますので、次第に江戸時代から連続するような伝統的な生活習俗が変わっていく。あるいは家族の変容も現れてくる時代であります。

担い手の問題でいうと、戦後はいわゆる地方史研究というのが大きなうねりとなって巻き起こります。地域の史料で地域の歴史を明らかにしていく、そういうのが地方史運動、史料保存運動のような形で高まりを見せていました。そういう中から育っていった研究者たちがこの時期の自治体史を担うようになっていく。研究者が監修し、執筆するという傾向が強まっています。ただ、この段階は二、三名の研究者でその地域の全体を書いていくという傾向があります。

Ⅲ 一九八〇年代～一九〇年代

その延長線上に一九八〇年代から九〇年代のブームが続きます。自治体なので、隣の自治体の本を出したらやはりうちも出さなければいけないという感じもあって、負けじとどこもやるという状況が続いていきます。高度経済成長により、地域がより深く構造的な変化を見せる

ようになったことも背景にあるかと思えます。

この時期になると、二、三人ではなくて研究者集団が、特に古代とか中世、近世とか、それぞれに研究者が配置されて、組織的に史料調査をして自治体史を出していくという傾向が強まっていくかと思えます。加えて、研究者が外から入って本を出すということだけでは、地域にとつてどういう意味があるのだ、という問いかけ、問い直しが深まってくる、そういう時期になるうかと思えます。

Ⅳ 二〇〇〇年代以降

二〇〇〇年代以降は、国分寺市もそうですけれども、戦後一回出した自治体史編さん事業から三〇年とか四〇年が経って、そろそろ前のがちよつと古くなっている。その後新しい史料も発見されている。それから、いわゆる現代編が前は書かれていなかった。やはりそれを追加しなければいけない。そういう発想で、いわば二巡目を刊行する自治体が増えてきております。特に現代編を追加するとか、短期集中で現代編だけ出して終わるというパターンもあるので、そういう自治体史が始

まっています。

加えて、この時期の大きな一つの特徴としては、その編さん事業を支える地域史料、地域史料については後でまたご説明しますけれども、家で古文書とかをずつと持つてこられた、そういう旧家がありますね。そうやって守ってきたいただいた地域史料を大切に生かしながら市史をつくる。一方では役所の公文書の中で歴史的なものについて調査して、市史編さんの近代や現代のところに生かしていく。その延長線上で、地域史料はやはり地域でちゃんと守ろう。あるいは公文書というものを役所でちゃんと管理しないと駄目だろうということ、いわゆる地域歴史館とか地域アーカイブズとか公文書館機能を持った施設につなげていこうという、そういう発想が現れてくるのが二〇〇〇年代以降だろうと思っております。

この時期になると歴史を踏まえたその地域の特性を明らかにして、市民と共有して地域の将来を展望する。その成果を自治の担い手である市民と共有するという理念がほぼ共通してうたわれるようになるかと思えます。ただ、理念としてうたうことと、それが本当に実現すること

とは必ずしも一致しないので、そこを本当に一致させていくためにどうするかというのが、これから始まる国分寺市史にとっても大きな課題であると思います。

二 北多摩地域の自治体史編さん

国全体の特徴として、今四期ぐらいに分けて自治体史編さんのブームがあったのだというお話をしました。その中で、この北多摩地域、国分寺の近所の地域でどんな具合に自治体史が編まれているのかを表1に示しました。これは今回専門員として国分寺市史にも加わっている、今、昭和女子大の三野行徳ゆきののりさんという研究者がまとめてくれた表になります。上の方の一九四〇年代、五〇年代ぐらいの武蔵野史とか、それから昭和町誌、拝島村誌、この辺りまでは先ほど言いました第一期の、戦前以来の郷土史研究というか、その流れを汲んだ叙述になっているかと思えます。武蔵野史というのは、武蔵野市の成蹊高校の先生で郷土史家であった藤原音松さんという方が書かれている著作であります。

それから、昭和町誌と拝島村誌は、やはり郷土史家で

表 1 北多摩における近世編編さんの概要

自治体名	自治体史名	編名	刊行年
武蔵野	武蔵野史	—	1948
昭和町	昭和町誌	—	1949
拝島村	拝島村誌	—	1951
小平町	小平町誌	—	1959
大和町	大和町史	—	1963
村山町	村山町史	—	1968
立川市	立川市史	上巻	1968
府中市	府中市史	上巻	1968
三鷹市	三鷹市史	—	1970
武蔵野市	武蔵野市史	—	1970
小金井市	小金井市誌	2 歴史編	1970
東村山市	東村山市史	—	1971
清瀬市	清瀬市史	—	1973
昭島市	昭島市史	—	1978
東久留米市	東久留米市史	—	1979
狛江市	狛江市史	—	1985
保谷市	保谷市史	通史編 2 古代・ 中世・近世	1988
国立市	国立市史	中巻	1989
国分寺市	国分寺市史	中巻	1990
調布市	調布市史	中巻 近世	1992
田無市	田無市史	第 3 巻 通史編	1995
東大和市	東大和市史	—	2000
東村山市	東村山市史	—	2002
武蔵村山市	武蔵村山市史	上巻 通史編	2002
小平市	小平市史	近世編	2012

* 2 度目の編さん

* 三野行徳「多摩の自治体史編さんと地域の歴史意識」
 (『関東近世史研究』第 81 号、2018 年)

ある山崎藤助さんという方と地元の郷土史家との著作でありまして、いわゆる一期を継承する良質な作品ということができると思います。

それから、昭和三十七年（一九五二）に小平町誌が出ていますけれども、これはお隣の小平市です。ここは典型

的な新田開発で出来上がった村であり町であるわけですが、その開発に関わった家の古文書を中心に、その家の方も大きく期待を寄せながら町誌が書かれてきました。これは地方史研究の、我々江戸時代の研究をしている者にとっては巨星といえますか、明治大学にお

られた木村礎さんという研究者、それから在野で明治高校の先生をしながら研究を続けられた伊藤好一さんという方で、地方史研究の第一人者です。このお二人が小平町誌を執筆して、後に新田村落論といわれるものをまとめ上げていく、そのきっかけとなった町誌です。このあたりから、いわゆる研究者が関わって地域の歴史を明らかにしていくという、そういう自治体史が始まっていくわけであります。

その後、一九六〇年代後半から七〇年代、先ほどお話ししたような背景と組織をもって各自治体で市史あるいは町史というのが出されていきます。その一環として、国分寺市は少し遅い平成二年（一九九〇）に前回の市史の中巻を、先ほど市長からもお話がありました、三〇年ぐらい前の市史というのがこの段階で出されております。

それから、二〇〇〇年代に入りますと、表1で網かけしているところ、ここが二度目の編さんを始めます。東大和、東村山、武蔵村山、それから小平という形で新たな市史が出されてきていて、そして国分寺がいよいよ始まると、そういう位置づけになります。

三 『国分寺市史』一九九〇年版

そんな中で、私は江戸時代が専門ですので、ここでは江戸時代に限って言及したいと思いますけれども、結論から言うと同回の国分寺市史はなかなかいい市史なのです。今回、あと一〇年かけて私たちは新たな市史をつくりますけれども、そうしたら新しいのに入れ替えるという、そういうものではないのです。この市史はずっと生き続けるいい内容を持っていると思っています。特に武蔵野新田開発、これはこの地域にとってはとても重要な、まさにこの地域をつくってきた歴史です。この新田開発研究に新しい史料をもちまして、周辺地域に対して新田開発の強いイメージを与えていった。そういう画期となる大切な叙述がなされております。

それから、二〇〇〇年に入っただけから、いわゆる生活史が注目されるようになるのです。村に生きた、町に生きた人々のライフサイクルを明らかにしようという、生活のひだみたいなどころにスポットを当てて、そういう歴史研究というのが志されていくようになる。これはなかなか史料的に難しいところはあるのですけれど

も、そういう中で、前回の国分寺市史はライフサイクル論的などころ、特に女性を取り上げたり、そういう先駆的な叙述がなされております。これはぜひ継承して、新しい市史でも発展させていかなければいけないところかなと思っています。

それから、国分寺を含めた多摩地域には俳諧はいかいを中心にしたいわゆる在村文化があり、在村文化人というのがたくさんいて、彼らが在村文化人同士、あるいは江戸の文化人とネットワークを形成している。一昔前の村落史というとなんとなく暗い、つらい農民像みたいところがあったわけですが、この文化的なつながりというのは物すごいわけでありまして、特に国分寺には宝雪庵ほうせつあん可尊そんという中心人物がおりました。この可尊に注目した^は在村文化論が大変豊かに叙述されている。これが前回の市史であります。

というわけで、決して研究史的に古くなっていないですし、優れた内容を持っている。これからもその内容は生きていく。そういう市史であります。残念なところを言うと、一つは通史編だけが出て、資料編が刊行されなかったということです。ですから、今、市史編さん室

の事務局の皆さんが前回の通史で使ったバックデータ、どの史料を使ってこういう叙述をしているのかという情報をばばまとめ上げてくれました。これは我々がこれから市史編さんしていく上ではとても重要な仕事でありまして、組織的に随分早くに実現してくれたなどありがたいと思っていますのですけれども、そのバックデータが通史編を読んだだけでは分からない。だから、市民の皆さんが通史編を読んで面白いと思つて、さらに自分たちの地域の歴史をもっと知りたい、あるいはグループで学習していきたいというときの手がかりがつかめないという、それが残念な面でありました。

もう一つは、先ほど言いましたような民間所在史料、古文書を大切に持ち続けてきてくださった旧家の皆さん、そういう家の調査にも入りまして、目録も作つてそこへアクセスしたのですけれども、その史料の保存とか活用というところにつなげるまでには至らなかつたということがあります。基礎自治体において、地域の史料を地域で大事にしないといけないという発想が、研究者の間にも市民の方にも共有されるようになるのは、二〇〇〇年代に入つたぐらいか、もう少し後だったかも

しれないです。平成二年（一九九〇）刊行の段階ではちよつとそこまでは行かなかつた。目録を作るところまでで止まつてしまったという面があります。

それから、前回の市史は昭和三九年（一九六四）の市制施行の前までで叙述が終わつております。その結果、国分寺市が所蔵している公文書は使わなくても何とか間に合つた。本当はそうではないと思うのですけれども、そこまではなかなか行けなかつた面があるのかなと思います。今回は市制施行後で一冊編みますので、これは公文書も使わないとこの地域の歴史は描けないということになつてくるかと思ひます。そういう限界を持ちながらも、通史としての叙述はとても優れているというのが前回の国分寺市史でありました。

2. 自治体史編さんの新たな潮流

一 災害レスキュー活動と 歴史資料ネットワークの発想

さあ、それでは新しい国分寺市史の課題はという前に、少しほかの自治体で取り組まれている先駆的な動き、そ

ういうものを幾つかご紹介した上でこれからの市史の課題を考えていきたいと思います。

この間、一つ大きな動きとして、平成七年（一九九五）一月に発生した阪神・淡路大震災があります。この震災が起きたことで、地域資料を災害から守る体制づくりや、災害が発生したときに救出活動をどう行ふかということが課題になりました。この地域資料レスキュー活動をきっかけとして、後に神戸大学に歴史資料ネットワークという組織ができます。

それから、災害に関する資料そのものをどう保全していくか。例えば東日本大震災のときは壁新聞みたいなものが作られて、災害をリアルに伝える大切な資料として残さなければいけないという発想が生まれました。さらに、これは不幸なことですけど、その後も各地で水害や地震があり、かなり深刻な被害が相次いでいったわけですが、その地域を中心に資料を保全するネットワークができていき、資料の救出活動をする。被害を受けた自治体は、まずは生活の復旧が優先されますので、しばらくは資料保全なんていうことで動けないわけですから、ネットワークがいろいろなところに増えていって、そこか

らボランティアで入っていくような体制がだんだんとつ
くられていくようになりました。

その中で、災害が起きてから動いたのではもう遅い。
つまり、地域資料はどこにあるのかをまず平時から把握
しておかないと、何か起こったときに動けるものではな
いということが一つ共通認識になっていきます。



講演会場のようす

もう一つは、歴史研究者が地域資料だと思っているも
のと、実際に地域で生きている、その資料を守ってきて
くださっている方との間で、何が大切な資料なのかとい
う意識が意外とずれていることが発見されています。で
すから、日常的なつながりをつくって、そういうものを
持たれているのかを把握して、こんなものと思っ
ているのが実は大事なのですよ、そういうコミュニケーション、
関係性を日頃から構築していくことの必要性が、
ネットワークの活動を通して広く共有されるようになって
きています。自治体史を編さんするときに、こうした
積極的な動き、動向、意識というものは踏まえないとい
けないと思います。

歴史資料ネットワークという団体は、平成二十七年に「地
域歴史遺産の保存・継承に向けての神戸宣言」を掲げま
した。この「地域歴史遺産」というのは、個々の家で持
たれている地域資料を、地域の住民との関係性の中で位
置づけ、地域の住民がその保存に関わり、将来的にその
活用を図っていく、地域に開かれていくものにするとい
うことです。地域資料は、もしかするとその家にとつて
はもうお荷物であるかもしれない。もうゴミとして捨て

たかったかもしれないけど、それは大切な地域資料であり、そこにさらに地域のひととの関係性が構築されると、これは地域歴史遺産に高まるのだろう。そういう発想です。地域資料を地域歴史遺産に昇華させる、そういう取り組みが自覚的に行われるようになっていきます。

国分寺市の皆さんは、実はこういう経験を既にされているわけです。武蔵国分寺跡というのは先ほど言いましたように大正期に国の史跡に指定されるわけですから、あれは基本的に畑です。民有地です。その中に礎石が頭を出している場所や、瓦が何となく集められている場所があるという状況だったわけです。だから、そのままにしていたらピンチだったと思います。あのような形で整備されたのは、そこでまず史跡指定がされて、それに多くの研究者が注目すると同時に、市民の方たちがそんな大切なものなのかという認識を持って守り続けてきた。そして、それを利用する。今、ボランティアガイドとして関わったり、いろいろな形で皆さんがあつた武蔵国分寺跡を中心としたネットワークを構築されている。本当は大切な歴史資料だけれども、畑の中の礎石でしかなかったものを、地域歴史遺産に高めたのは、やはり市民

の皆様ネットワークなのです。武蔵国分寺以降の歴史についても、それと同じようなことをこの国分寺という地域の中でつくっていききたい。とても豊かな歴史資料がたくさんあるので、資料のレスキュー活動から始まった地域歴史遺産という発想に学びながら、ぜひそういうものをこの国分寺市でもつくり上げていきたい。そのように考えております。

二 住民が参画する事例

それから、住民が参画する事例というのがあります。市民の皆さんにも参加していただいてと言わない自治体はないのです。市史を編むときに必ずそう言います。だけれども、大したことはしてもらわないのです。結局最終的には外、もちろん地元に住んでいる人もいるかもしれないけれども、研究者が来て、手慣れたつくり方で編集していくというのが一般的なわけですが、何年か前に地域史惣寄合（そうよりあひ）という研究会に参加しまして、すごい自治体に出会いました。兵庫県の香寺町（こうでらちょう）という町で、今は姫路市に編入されて姫路市香寺町になっています。当時

姫路に編入される直前ぐらいに、この香寺町史の「村の記憶」地域編というのが出されます。このほかに歴史編というのがあって、そこらは研究者が中心になって資料編・通史編を作るのですけれども、それに先行して「村の記憶」というのを作りました。これは香寺に住む人たちが、その一つ上の世代のかつてを知る人々に聞き取りをして、特に水利関係を詳細にヒアリングして再現する。そういう叙述を中心に「村の記憶」という自治体史を自分たちで一冊刊行しているのです。

そのリーダーの方の個人的な資質や魅力ももちろん大きいと思うのですが、香寺町というところはかなり大規模な開発が進んでいまして、大開発というのは一気にどこかと全く地域と切れた人が入ってくるわけですよ。そういう意味では、国分寺なんかよりもはるかにドラスティックに人の入替えが進行している場所なのです。しかし、実はこういう聞き取りをして地域の歴史を明らかにしようとするメンバーのかなりの部分が新住民の方、外から入ってきた方でした。自分たちが新たに住まう場所は一体どういう歴史を持っていたところなのかということで、各地でこういう住民の方を調査に巻き

込むような事例が幾つか生まれていますけれども、こうした活動に参加するのは、意外と昔からいる人だけではないのです。新しく入ってきた方は、これから何十年とそこに住んでいく。もしかすると、ここが自分たちの故郷になるかもしれない。そういう人に地域の歴史を知りたいという意識があるのだろうと思うのです。そういった意味では、この香寺町の事例というのは、大規模開発に伴う新住民と旧住民の交流の機会というか融合の機会というか、そういう場にもなっているということを強く感じました。

それから、先ほどの阪神・淡路大震災の後に生まれた神戸大学の組織が、神戸大学大学院人文科学研究科地域連携センターというところに組織的につながっていきまして、ここはこういう自治体史とかをサポートする体制ができています。大変羨ましい限りでありまして、研究者のサポート体制の下で、住民の方たちのそういう活動が一層促進されていくという、いい循環が香寺町の事例などでは進んでいるのかなと思います。

もう一つはもう少し古い時代に始まった事例なのですが、ただみまち福島の只見町という雪深いところ。福

その他		(原稿用紙の用紙、または原稿用紙の複製) 
著作名		
作 者		
材 料		
制作年数		
展示人(個人)		
学 号		
展 覧 場 所		
備 考		

島県と新潟県との県境の山間の地域であります。ここは平成二年（一九九〇）から町史編さん事業を始めまして、その一環として民具調査を開始しました。確かに民具が豊かにいっぱいあるところなのかもしれないです。昔こんなのがあったという、多くの家で持たれている民具が相当あったのだと思うのですけれども、このときに多くの町民が参加して清掃や補修、計測、撮影、カード採録をしました。写真1はモッコという運搬具ですけど、そ

支援していきます。それから、東京の武蔵野芸術大学の学生さんが、これは絵を描く専門家でありますので、スケッチ等の記録要員として加わりました。

3. 新しい国分寺市史編さん事業の目的

自治体史編さんの歴史、それから新しい自治体史編さん事業の先進的な事例、こういうことを踏まえた上で、市制六〇年を記念して始まる国分寺市史、この編さん事業が何を指していくのかについて、五点ほどポイントをお話しします。

一 自治体史編さんの究極の目的

最初に「自治体史編さんの究極の目的」。それは人と地域資料の関係を築いて、さらに永続的に継続させていくこと。ここにあると思います。我々は本を出すということで国分寺市に雇われています。ですから、当然出す本については責任を持ちますし、学問的な水準も担保したいし、市民の方でできるだけ読んでいただけるものを作り出したい。いい本を出したいと当然思いますけれども、自治体史編さんというのは本を出すプロセスこそが問われるのだらうと考えています。

先ほど幾つか事例をお話ししてきましたけれども、地

域の中に存在している多様な歴史的資料、その存在と価値にまず気づいていただくことが大事だろうと思います。お宅で持たれている記念写真とか家族写真、そういうものもきちつと位置づけていくと貴重な歴史資料である。後ろに写っているところはもう今は失われている風景かもしれないです。いわゆる古文書が大事というのは皆さん分かるかと思うのですけれども、それだけではなくてかなりいろいろなものが地域資料として生かせる。そういうものが比較的身近にも存在している。そこに気づいていただくための我々の活動というか、働きかけや情報発信をしていかなければいけないと思います。史料を記録し保存し、それを開いていく、そういう経験がこの自治体史編さん事業のプロセスで多くの市民の方と共有できるいいかなと思っています。

それから、地域の公文書館みたいな地域資料館の中で全国的に有名なものが、兵庫県尼崎市にある「あまがさきアーカイブズ」です。こは刊行した自治体史を読みながらさらに深めていくという活動をもう何年も継続されています。ですから、一〇年後に本が出揃ったとして、そこが終わりではないのです。それを地域の皆さんと

もにさらに読み進めていく、読み解いていく。さらにその基になっている古文書も学んでいくとか、いろいろなことが考えられると思いますけれども、自治体史の刊行後にも意味を持つことが大事だろうと思います。

人と地域資料の関係云々というのは、先ほども申し上げたように、地域資料を地域歴史遺産あるいは地域歴史文化遺産に昇華させる営みであります。ぜひ武蔵国分寺跡に関わる皆さんが共有されている経験をほかの分野、ほかの時代にも広げていきたいと考えております。

二 幅広い市民の参画

それを実現するためには、やはり幅広い市民の皆さんの参画というのが不可欠になってきます。最初に市民協力員というのを募集して、既に応募していただいた方に少しずつ活動を始めていただいております。ちょうど一二月の頭にお隣で新しい市役所のお目見えの会が開かれるわけですけど、そこでこの地域の歴史を眺めるパネル展を開催することになっています。そのパネルの作成を市民協力員の皆さんに分担してお願いしたところで

す。そういう形で、市民の方自身が地域の歴史を学びながら、ほかの市民に対して働きかけていただく。そういう活動が早速始まっております。

それから今日、本格的な講演会は初めてになると思いますが、この後も市史編さん室主催の講演会等が予定されております。既にこの年度の中でも幾つか準備されております。また、いわゆる講演会や講座だけでなく、いろいろな面白い企画も来年度以降でできいくと思います。が、そういうのにぜひ多くの方に参加していただきたいと思っています。

この間も国分寺市が市民の方から寄贈を受けた民具を幾つか拝見しました。民具を使って、例えば民具の修復とか清掃を小学生とかに見ていただくような取組はほかの自治体なんかでも結構あるのです。しかし、そういう五〇年代から六〇年代ぐらいまで使われていた民具や、かつて六〇年代に三種の神器といわれていたような生活用具も、今の小さいお子さんにとっては、使い方が分からないというのは意外とあるのではないでしょうか。思いつきなのですけども、そういったものを活用しながら、世代間でいろいろな対話をしていくような体験、ワ

ークシヨップなども面白いかなと思います。

それから、これはやってみたいのですけれども、例えば昭和三九年（一九六四）、市制施行の年に絞つてもいいと思うのですが、遊び場マップ。国分寺の古い住宅地図などを使いながら、かつてこういう広場でこういう遊びをしていた。恐らく六〇年代と九〇年代、それと二〇二〇年代で全然違つてきていると思うのです。遊びそのものが変質しているとも思いますし、私が昭和三十六年生まれで今六三歳、もうじき六四歳になりますが、その頃に一〇歳ぐらいの方だったら遊び場のことを多分記憶されていると思うのです。七〇代もまだまだちゃんと昔のことを十分語つていただけだと思うのです。最近のことは忘れていてもその頃のことはすごく鮮明かもしれない。そんなものを何年頃、何年頃というので作つていくと、この地域の変遷とか、家族の移り変わりとか、そんなことが浮かび上がるのではないでしょうか。こういう遊びっぽいワークシヨップみたいな試みがあれば、多くの方に参加していただけるのではないかなとも思います。これは全く市史編さんの皆さんと相談せずに言っていますので、ごめんなさい。ぜひそういう面白い企画を

つくつていければと思います。

三 民間所在地域資料と公文書を 市民共有の知的財産に

それから、三番目の柱です。民間所在地域資料と公文書を市民共有の知的資源にするということであります。これは「家」で守られてきた価値ある史料群を寄贈してくださいということではないです。でも、地域としてサポートする体制はつくつていかないといけないだろうということでもあります。

江戸の町は、本当に役人の数が少ないのです。町奉行がいて、与力・同心なんて何十人規模です。それであの一〇〇万都市を、そのうちの町人は五〇万としても、まかな賄えるはずがない。それは村についてもそうです。代官とかその手代は物凄く少ないわけです。それなのに何で支配が回つていたかというと、村とか町という共同体に多くを依存するわけです。村について言うと、村請制という言葉が、これは教科書にも出てくるのでしょうか。例えば年貢の徴収なども、村に任せてしまうわけです。村の名主を中心にそういう機能を請け負つていく。そうい

う超小さな政府でありましたので、結果として支配に関わる文書、当時の公文書というものが名主さんの「家」という私の家の中に残っているわけです。

ですから、今でいう戸籍とか、土地台帳みたいなもの、当然公の機関にあると我々は考えますけれども、江戸時代のものはどこかの代官所に所蔵されているのではなくて、名主さんの家の中に、何々家文書という中に公的な資料があるわけです。もちろん個々の家なので、家の小遣い帳みたいな史料とか、家の農事暦、何月にどうやるみたいな、そういう私の家の経営に関する文書と、公的な性格を持った公文書的なものが一つの家の中に混在する形で残っている。これが江戸時代の特徴です。これは大名家についてもそうです。大名という家の文書として持たれていますので、戦後、農地改革ですとか華族制度の廃止という中で、家の経営というものが不安定になると公的な文書も含めて売り払われたり捨てられたりというところが戦後かなり多くあったわけですが、そういう中で何とか持ち続けてきてくださった貴重な家文書というのが、この地域の中にもたくさん存在しているわけであります。これを守り続けてきてくださった営みに

まずは感謝とリスペクトをしないといけないと思いますけれども、日常的な保存へのサポート体制や関係性をつくっていくことが必要であらうかと思っています。

それから、一方、公文書です。国分寺市役所が持っている公文書。国分寺の前身の村は明治四三年（一九一〇）に火災で村役場が焼けておりまして、だから明治初年からの歴史的公文書は、原則そこでなくなってしまうのです。これはちよつと残念なところです。ただ、四三年以降の村役場の文書、それから昭和一五年（一九四〇）以降の町役場の公文書。これはもしかするとまだ持たれているかもしれない。それから、市制施行前後の公文書。こうしたものを、量はそんなに多くはないかもしれないけど持たれているのかなと思います。

今、国分寺市は公文書管理条例をつくられていないので、公文書管理条例で規定されていると思います。規則だからいいかげんということではないです。ただ、規則というのは市役所の中のルールですね。条例というのは住民の皆様とのお約束。ここは公開というところまで持っていたときにはちよつと意味が変わってくるわけですが、当面管理条例の中で長期保存や永年保存という形

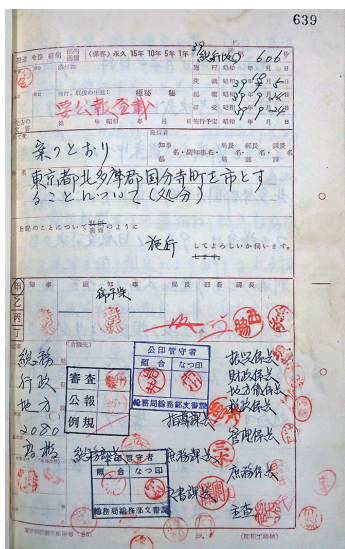
で重要な公文書をずっと持たれていると思います。長期保存とか永年保存というのは捨ててはいけないということですので、ずっとたまり続けていくのです。今、多くの都内の自治体も、どんどん長期保存、永年保存という規定の中で文書がたまって、もう場所がない。それから、たまるだけで整理されていないから、実は何だかよく分からない。数年前にアンケート調査をしたのですけれども、そういう状況、悩みを抱えている自治体がかなり多いのです。

国分寺市は何うところによると、長期保存文書の内容を把握するための試みを始められているようです。これはとても大事なことだと思います。その試みと市史編さんの事業とをどこかでうまく具合に結び、関係性をつくって、市史編さん事業を支える重要な史料として公文書の活用を始めていきたいと思っています。

公文書というのは役所の人間のためのものを役所の中のルールで管理していたわけですが、公文書管理法という法律ができたことで初めて、公文書は国民共有の知的資源であると位置づけられました。公文書とは住民のものなのだということを宣言したわけです。

これは法律ですから、当然対象となるのは国の機関であります。公文書管理法の第三四条には、「地方公共団体は、この法律の趣旨にのっとり、その保有する文書の適正な管理に関して必要な施策を策定し、及びこれを実施するよう努めなければならない」という努力目標が掲げられています。努力目標というのは多くの場合無視されるわけですけれども、こういうタイミングで市史編さん事業が始まって、国分寺市もこの長期保存文書を何とかしなくてはいけないという認識に立っておられるようですので、いい形で市民に公文書が開かれる、そういう先進的な自治体の仲間にならば国分寺市も入っていただきたいなと願ってやみません。

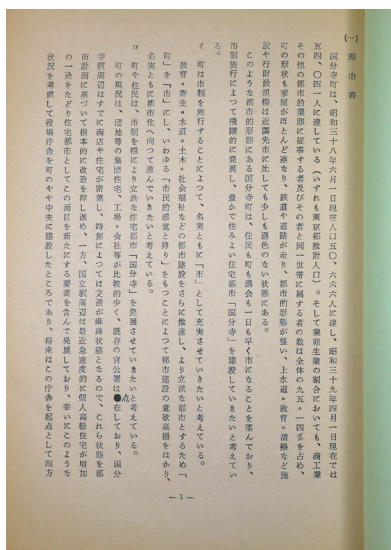
公文書が整理されている、公開体制ができていたとはどういうことを考えてみたいと思います。左の写真は東京都公文書館に所蔵されている「東京都北多摩郡国分寺町を市とすることについて」という公文書です。国分寺市のスタートとなる、つまり市のアイデンティティを語る公文書です。公文書館があつて、公文書が整理されていて、公開体制が整っていれば、すぐにアクセスできるわけです。その体制がない場合、これを情報公開で対



『東京府北多摩郡国分寺町を市とすることについて (処分)』 東京都公文書館所蔵

応せざるを得ない状態となり、これがすぐ出るかどうかも分かりません。整理が今、始まりつつあるので、古い公文書がちゃんと目録化されているかどうか分からないですけれども、今後こういう形で整備して、自治体の歴史を語る公文書というものがぱっと出せる状態にする。住民の皆さんのアクセシビリティを確保する。公文書が整理され公開体制が整備されているというのはそういうことなわけであります。

この公文書を見ていただくと、国分寺町から東京都の方に市になりますよという申請が上がってきて、理由書



『国分寺町を市とする処分申請書 (案)』
「理由書」 東京都公文書館所蔵

とかいろいろな書類が添付されています。これは、国分寺町は市になる要件を満たしていますよという根拠をまとめた一冊の公文書なのです。「国分寺町を市とする処分申請書」というのがタイトルです。昭和三十九年に、市になる前です。国分寺町が作っています。まず、理由書、どういう経緯で市になる申請をするのか。それから、町議会で議決しましたよということが書かれて、それから町の現況表、これは人口その他を一表にしているものです。さらに、市名及び市名選定理由、市役所をどこに置いているか。それから住民感情。市は手を挙げている

けど住民は本当に賛成しているのかというようなことを書くわけです。

市となるための要件というのが、まず地方自治法、それから東京都の条例、市制施行協議基準、その他基準を満たしているかということ、人口とか市街地の戸数の割合とか、都市的な業態、職業構成であるか、そういうものを調べ上げています。どういう官公署がありますか、高校はありますか、文化施設はありますか、それから住民一人当たりのいわば担税能力、税金をちゃんと払えますか、銀行はありますか、劇場や病院はありますかということを全部書き上げていく。

昭和三十九年当時の国分寺市の全てがこの一冊に書かれ

目次	次
第一 序 (経緯の概要を略す)	一
第二 市制の経緯および市制施行の経緯	六
第三 市制施行の経緯および市制施行の経緯	七
第四 市制施行の経緯および市制施行の経緯	一五
第五 市制施行の経緯および市制施行の経緯	一七
第六 市制施行の経緯および市制施行の経緯	一九
第七 市制施行の経緯および市制施行の経緯	二〇
第八 市制施行の経緯および市制施行の経緯	二〇
第九 市制施行の経緯および市制施行の経緯	二六
第十 市制施行の経緯および市制施行の経緯	四七
第十一 市制施行の経緯および市制施行の経緯	七四
第十二 市制施行の経緯および市制施行の経緯	九三

『国分寺町を市とする処分申請書(案)』
目次 東京都公文書館所蔵

ている大変な資料ですね。このような公文書も見られます、地域資料も見られますという施設がもしできていけば、これは本当に地域の住民の皆さんにとって大切な拠点になるのではないかと思います。国分寺市には、まだ公文書館はありません。それから武蔵国分寺跡については資料館がありますけれども、やや老朽化が目立ちます。また武蔵国分寺以降の地域資料を閲覧したり展示を見たりする場というのが現状ない。この何もない状況というのを、私はプラスに考えています。やはり本当に地域の皆さんがこれは必要だと求められたときには、地域資料館というのか、地域アーカイブズというのか、この柱である武蔵国分寺跡に関するものも含めて、複合的施設、住民が自らの住む地域を学べる拠点ができたらすばらしいなと思っております。

四 地域の核となる場へのアプローチ

それから、地域の核となる場へのアプローチということで、特に学校や保育園、企業といったところにはきちんとアプローチしていきたいと思います。学校について

は、東京都立教育研究所というところが都内の小学校にどのような歴史資料があるかを調べ上げたものがございす。例えば国分寺の第二小学校が明治六年（一八七三）にできた里仁^{りじん}学校ですね。ここは明治、大正、昭和の学校沿革史という、貴重な歴史資料を持たれています。それから、昭和期の児童出欠席簿、成績考査簿みたいなものが残っています。これは見られるもの、見られないものがあるかと思いますが、第一小学校、第二小学校、第三小学校には戦前期、大正とか明治以来の公文書がある。まずこういうところにきちんと調査に入りたいと思います。

それから、学校には例えば周年誌などを編集したときの写真などいろいろな資料が集められているのです。これは公文書そのものではありません。だから、どこがどう扱うかというのが学校資料は難しいところがあります。が、とてもかけがえのない地域資料です。そういった資料を大事に持っていて、もう場所がないという場合もありますし、淡泊に捨ててしまう学校もあるのですが、ここは大切に調査していきたいと思います。

それから、保育園。私も子どもが生まれたときに、育

児と保育運動に邁進した時期が一〇年ぐらいありました。保育園というのは面白くて、これはもう基本子どもと親と先生たちのつながりなのだけど、やはり地域に参み出ていくような地域コミュニティの核なのです。その六〇年代、七〇年代、八〇年代の変化を見ていくと、家族の社会史というのがそこから見えてくると思います。ですから保育園にもぜひアクセスしたい。そういう地域の核となるところは、なかなかうまく入れていない自治体史が多いと思うのですが、大切なのは市民の方に介在していただくことだと思います。学校のOBの方とか、その保育園で活躍した方とか保育士さんだとかに仲介していただいて、入っていければと思います。

それから、国分寺は「こくべじ」ということで今、農業関係で頑張っている若い方もたくさんいらっしゃいます。こういう方と一世代前の農業経営をしていた方、今は農業をやめたけれどもこの地域で頑張っていた方との交流みたいところからも、いろいろな情報が得られるのではないかと思います。

五 教育現場との連携

最後に五番目、教育現場との連携です。これは私が端で見ていて、国分寺市は市長部局の組織と教育委員会とがすぐ風通しがいいというか、市史をめぐるても一体になって活動されているので、ここはすぐ安心していきます。意外と連携が難しい、自治体史編さんの話も聞くのですけれども。やはり教職員の方と、特に社会科の先生方とワークシヨップをするとか、生徒さんたちが参加するようなワークシヨップ、それから編さんに関わっているスタッフや専門員が出向いていろいろなお話をしていただくとか、いろいろな形態が考えられると思います。教育現場との連携のない自治体史編さんは、もうこれからの時代あり得ないと考えております。

以上、大変雑駁にいろいろ並べてしまいましたけれども、これで私の話を終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。

にしき こういち

東京都公文書館課長代理
近世・近現代部会長

【開催情報】

市制施行60周年記念 東京都公文書館・もとまち
公民館・市史編さん室連携歴史講座

演 題…資料編さんがもたらすもの

―地域資料を守る、活かす―

日 時…令和六年一〇月二六日（土）
会 場…東京都公文書館研修室

■ 座談会の記録 ■

地域の歴史を学ぶこと

(出席者) 西木 浩一・富山 謙一・武藤 功・福山 智美

(司会) 宮澤 歩美

1. 地域の歴史との関わり

司会 本日は、新たな国分寺市史編さんに市民協力員としてご参加いただいている武藤功さんと福山智美さん、国分寺市教育委員会の前教育委員の富山謙一さん、そして近世・近現代部会長の西木浩一さんの四名をお招きいたしまして、「地域で歴史を学ぶこと」をテーマに対談をお願いいたしました。皆様、どうぞよろしくお願ひいたします。

では、早速対談に入っていきたいと思います。国分寺市は、皆様ご存じのとおり、武蔵国分寺がありますし、歴史が非常に色濃く残るまちです。歴史公園があったり、史跡、歴史関係のイベント、ボランティアの活動も盛んに行われております。市民の方々が地域の歴史に触れる

機会が多いというのが、この国分寺市の特徴であると思います。そこで、まず史跡ガイドとして活動をされております武藤功さんにお話をいただければと思います。武藤さんお願いします。

武藤 ご紹介いただきました、市民協力員の武藤と申します。よろしく願ひします。今ご紹介があった史跡ガイドと市史についてお話をしたいと思います。今回三つぐらい考えてきました。史跡ガイドのご紹介と、あと私の個人的なお話になってしまのですが、私と国分寺の歴史についてのお話、あと最後に市史編さんにどのようなことを望むかということをお話ししたいと思います。

最初に史跡ガイドについてご紹介したいと思います。正式名称は国分寺市史跡ガイドボランティアということ

になっています。この中で、皆さん武蔵国分寺跡へ行かれたことがない方はいますか。皆さん行かれたことがありますよね。武蔵国分寺跡の特徴として、七重塔跡が遠くて離れている。尼寺も離れている。史跡の駅おたカフエのところへ行っても、塔跡に行くのはちよつと大変なのです。迷子になって行けなかったりとか、尼寺へ行つたことがない人はたくさんいると思うのです。でも、史跡ガイドに連れていってもらうと、塔跡にも尼寺にも行けます。そうすると尼寺で版築はんちくも見られます。もういいことだらけなので、史跡ガイドを活用していただきたいと思っています。

史跡ガイドには、二つの利用法がありまして、予約便と待機便があります。予約便は、大人数、例えば一〇人ぐらいで行くときに、電話して予約するとガイドがついてくれるという至れり尽くせりのものです。待機便は大体三日に一日ぐらいしかやっていないのですが、一〇時から一時と一時から二時ぐらいの間なのですが、ふらつと来られた方でも、主に武蔵国分寺跡資料館の中が多いのですけれども、お話をしてくれます。資料館に行かれたときはぜひとも史跡の駅長さんに史跡ガイドあり

ますかと聞いてもらつて、ガイドを受けてください。とても役に立ちます。

資料館に入ってもパネルや説明がたくさんあつて、各展示室のつながりとか、どういう目的でこの資料があるのかとか、この資料があるおかげで何が分かったのかというのは分かりづらいのですけれども、ガイドさんがいるとそこら辺説明してくれるので、とても分かりやすいと思います。ぜひとも史跡ガイドをご利用ください。

二つ目に、個人的な話なのですが、私も国分寺の歴史についてお話ししたいと思います。国分寺市には国分寺市ふるさと文化財愛護ボランティアという活動があつて、史跡ガイドとか調査とか普及等の分野があり、今はやっていないのですが、私は以前に調査分野をやっていました。国分寺市の古文書にインデックスをつける作業をやったことがありました。ほんとうに古文書は大変でした。明治時代だと文法は今に近いのですが、いろいろな方のくせ字があるので大変でした。古文書を読んでいると、私も国分寺生まれ国分寺育ちなので、知っている農家さんとかいるわけです。あそこのおじいちゃんのおじいちゃんぐらいの人の名前が出てきて、そういつ



武藤 功氏

(近世・近現代部会市民協力員)

た古文書を目にするとすぐ歴史が身近に感じられました。

また、国分寺市では令和六年度から「国分寺学」というのを推進しています、先日「国分寺学」の授業をやってくれたということで第二小学校に行ったのです。そうしたら、廊下に二小の歴史がずらっとパネル展示してありまして、最初に「里仁」と書いてある額がありました。第二小学校は里仁学舎というのが始まりなので、それを見たときに、ああすごいな、歴史というのは今でも息づいているなど感じました。あと、校長室へ行くと校長室に歴代校長先生の額があるのです。そうすると、初代の

校長とか市史に出てきているような方がいらつしやるので、そこもまたすぐ身近なものだなと感じました。

もう一つ、第三小学校のことを言いましたか。以前「国分寺学」の話で行ったときにも、第三小学校はもともと国分寺小学校という名前になったかもしれないのだよという話をしたりとか、あと三小の北側には貫井村分水が流れていて、南側には国分寺村分水がある。分水に囲まれた、本当に水に囲まれた学校なのだよと言うと、子どもたちがまた目をきらきら輝かせていました。来月、新しい市庁舎でパネル展示をするのですが、そのときにも小学校が出てきます。先ほど申し上げたように、里仁というのは二小につながるところで、第一小学校の前身は最勝学舎といました。もともと明治時代に文部省のほうから学校をつくりなさいと言われてたくさん学校ができてしまったのです。その反動でおおざっぱに言いますと、大正時代になると一村一校ぐらいにしなければ。国分寺小学校という名前の小学校、正確に言うと国分尋常高等小学校というのですけれども、それを大体市の中心、今でいう第一中学校の辺りにつくったのです。でも、あまり東のほうは遠いから、今のお寺さんのところにあ

った最勝学舎を第一分教場とした。西のほうも遠いので里仁学舎があつたところを第二分教場にして、その名前が残つて一小、二小となつて、三小は国分寺小学校でもよかつたのだけれども三にしたと。ということ、たまたま三なのだよという話をする子どもたちはえらい喜んでいました。

三つ目も私の個人的な話なのですが、私は現在、観光協会のお手伝いもしているので、観光協会についても歴史を調べてみました。実は一般社団法人こくぶんじ観光まちづくり協会ができたのは昨年なのですけれども、その前の国分寺市観光協会という名前だった観光協会は、昭和五四年（一九七九）、今から四五五年ぐらい前にできたそうです。その当時の文書は意外に残っていました、市役所内にあるのですが、目的が観光の振興。それはそうだと。あと、事業として幾つかあるのですけれども、史跡や文化財の保存もやっていたそうなのです。医王山最勝院国分寺の関係者に聞いたところ、境内に国分寺町観光協会と書いてあるベンチがあつたらしくて、だとすると国分寺町の時代からあつたのかなと。そうするともう六〇年以上昔なのかなとも思ったりしました。

このように私にとって国分寺の歴史というのはすごく身近なものなのです。皆さんかかると思うのですけれども、国分寺の歴史を身近なものと感じられるというのは私にとってはすごく幸せなことだし、皆さんもきっと幸せだなと思われるかと思います。できたら私だけではなくて国分寺の市民の方、多くの方が国分寺の歴史をより自分のものと感じていただけるのが一番いいのかなとも思いました。

ちよつと長くなつてしまいましたが、私が新しい国分寺市史に望むことをお話ししたいと思います。二つあるのですけれども、まず一つは、武蔵国分寺跡という有名な史跡もあるので、在野の研究者の方が結構いると思うのです。市史というやはり大学の先生、偉い方々が書かれると思うのですが、できたらそういう在野の方々とも仲よくして、そういった観点も持ちながらやっていただけるといいかなと思いました。

二つ目は、私が史跡ガイドをやっていて何に注意してお客さんに、市民の方にお話ししているかということ、お客さんの立場にたつて歴史を説明したい。国分寺跡に関しては、身近なものとして。例えば埋蔵文化財に携わる

方々は日々発掘しているわけです。発掘されたものは歴史的事実として研究者にとつては結構ぞくぞくする楽しいものですが、一般市民の方にとつては「何じゃそれは」みたいなことが多いと思うのです。それを市民の方に興味深く楽しく面白く説明できたらいいなと。その観点でいうと、市史には事実だけではなくてストーリー的なものも入れてもらえるといいのかなと思っています。前回の市史ができてから時間が経っていますので、新しい事実もたくさん分かっているとしますし、あと多摩地区の、例えば江戸時代の研究も進んでいると思いますので、そこら辺も昔と違う観点で書けるのかなと。そういった期待を市史には持っています。

司会 武藤さんありがとうございます。史跡ガイドやこくぶんじ観光まちづくり協会の歴史など、幅広い、大変国分寺愛にあふれるお話をいただきました。国分寺には武藤さんのような生まれも育ちも国分寺という方がたくさんいらっしゃいますが、反対に最近引っ越してこられた新住民の方もたくさんいらっしゃいます。福山智美さんも国分寺に引っ越してこられた新住民の一人です。福山さんは国分寺の歴史にご興味をお持ちで、武藤

さんと同様に協力員として市史編さん事業にもご協力をいただいております。ぜひ、新しい住民の一人として福山さんにもお話をさせていただければと思います。国分寺のまちや市の歴史、史跡等についてどのような印象をお持ちでしょうか。

福山 市民協力員の福山と申します。一〇年ぐらい前に国分寺に引っ越してきました。国分寺がどのようなところか全く分からなくて引っ越してきたのですが、引っ越してきたら武蔵国分寺ですとか、東山道武蔵路ですとか、お鷹の道ですとか、歴史を感じる場所や史跡などが身近にたくさんあるなというのを感じていました。自分



福山 智美 氏
(近世・近現代部会市民協力員)

の子どもが小学生のときに学校の行事で史跡巡りというボランティアとして参加したことがありました。子どもたちに付き添って一緒に史跡を巡ったことが地域の歴史に興味を持つきっかけになりました。この近くに武蔵国分寺跡資料館があるので、そこで子どもたちと一緒に資料を見て、お話を聞いて、国分寺というのはいいところだなと感じました。

それから、国分寺では歴史を知ることができるイベントを多くやっているように思います。今回お話するにあたって少し調べたのですが、今日から始まっているのですが、武蔵国分寺跡資料館のほうで謎解きビンゴというイベントをやっていて、小学生とか中学生以下だとクイズに正解するとプレゼントをいただけるというのがあるので、行ってみたいなと思いました。

私がいろいろなイベントに参加して感じたことは、国分寺という地域は、当時の人々の誇りで、自慢の場所だったのではないかと想像し、国分寺がより好きになりました。歴史を知って思いをはせ、普段の生活では考えもしなかった世界に触れ、日々の喧噪けんそうからいったん頭をリセットできる感じもあって歴史を知るとは自分に

って新鮮でした。と同時に当時の人たちが大事に残してきた史跡や歴史を未来に伝えるお手伝いを少しでもできたらと感じるようになりました。

これからも国分寺の歴史に興味を持って学んでいこうと思っています。

司会 福山さんありがとうございました。

2. 教育現場と市史の編さん

司会 教育現場との連携が非常に大事だということを西木さんのご講演でお話していただき、先ほどの武藤さんのお話にも「国分寺学」がありました。「国分寺学」は、地域に親しみ、地域に学び、地域を考え、地域に貢献することを目的とした学習で、今年度から開始されました。子どもたちが国分寺市の歴史や文化について学び、考える機会というのにも増えていると思います。こういった「国分寺学」ですとか教育現場の中に、史料編さんや市史編さんの成果をどのように還元していくかというのは重要な課題であると思います。そういった点について、前教育委員の富山さんに教育現場の観点からご意見をいただ

ければと思います。

富山 それでは、小学校、中学校で地域の歴史学習をどんなふうに扱っているかお話ししたいと思います。まず、小学校一年生、ぴかぴかのランドセルを背負った子どもたち。一年生の授業には生活科というのがあるのですが、その中でもう既に国分寺の歴史に触れていきます。ただ、まだ一年生ですであらましといいますが、自分と学校の間にどんなものがあるのか、それを見て気づいたところを発表し合う、その程度です。

本格的に社会科学を勉強するのは小学校三年生です。三年生には『わたしたちの国分寺』という副読本があります。これは大人が読んでも楽しいですよ、本当に。子ども

6 国分寺市をもっと深く知るために

歴史のまち 国分寺

国分寺市は、日本列島の中でも、古くから人々が住み歴史のあるまちのひとつです。今から約1250年前には「武蔵国分寺」というお寺が建てられ、その名前が市名のものになっています。1997年（平成9年）、きちょうな赤米のいねが国分寺市の標で見つかりました。「武蔵国分寺種赤米」とよばれ、2015年（平成27年）にはふたたびさいばいが始められました。この赤米は給食などで天平メニューとして取り入れられたり、市内の小学生がだっくこく体験をしたり、多くの人に知ってもらえるようにくふうしています。

武蔵国分寺跡は、1922年（大正11年）に国指定史跡に指定され、2022年（令和4年）に指定100周年をむかえました。



▲標の武蔵国分寺のイメージ



100周年記念
教育推進マップ



▲天平メニュー 国分寺ごはん



▲史跡武蔵国分寺跡



▲七重塔跡



▲日本多摩住宅長瀬門

「歴史のまち 国分寺」
（社会科副読本『わたしたちの国分寺』）

もたちはこの本を基にしながら勉強をしていきます。具体的に言いますと、資料編に「玉川上水と国分寺」という項目があり、崖線上の人が住めなかったところに用水が通って村ができたということを学んでいくのです。また、飢饉が起きて、多くの人が亡くなってしまふ。そのときに、川崎平右衛門が活躍した。それを調べてみようとなります。さらに最後のまとめのところの「国分寺市をもっと深く知るために」、「歴史のまち 国分寺」という項目で国分寺ができた頃の様子や理由を勉強します。それだけではなくて、「科学のまち 国分寺」で、実は宇宙開発の始まったまちなのだとか、新幹線が生まれたまちなのだよということを学習します。小学校三年生ですので、まだ国分寺のあらましというか概要というかとば口ですよ。子どもたちはそれを意識づけられています。

国分寺がすごいのは、先ほど司会からもあったのですが、「国分寺学」を小学校、中学校、九年間を通して勉強するのです。地域の歴史的な事象というのを「国分寺学」を通して学んでいきます。中学生の終わる頃には、日本の教科書には大仏建立や国分寺の建立、それから新

田開発、玉川上水、そして先ほどの宇宙開発、新幹線、そういったことが全ての歴史の教科書にきちんと載っています。ですから、国分寺の子どもたちは小学校一年生の段階から日本の歴史の重要な部分を自分で歩いて見て触って、その実感を基にしながら九年間を通して自分形成を行っていくという、非常に恵まれた環境にあるところで勉強をしているということが言えると思います。

そういう中で、学校ではどんな子どもたちを育てたいのかなということを話したいと思うのですが、やはり国分寺の歴史を知ることを通して国分寺はこういうまちなのだ、こういう歴史があり、世界に誇る文化があるという実感、そして、そういうところに親しんで、愛着を持



富山 謙一 氏
(国分寺市教育委員会前教育委員)

って、そこで生活していることに誇りを持つ。そういう子どもに育ってほしいなと学校では考えています。そして、そういう子どもたちはきつと国分寺を大事にするだろう。子どもたちがこのすばらしい国分寺の担い手に育ってくれるだろう、そういう思いが学校にはあります。

先行き不透明なこの時代にいろいろなことがあると思います。国分寺はこんなにすてきなまちなのだ。そこで生活し学習、勉強してきたのだ。そういう思いはどんなつらいことがあってもたくましく生きる力、背中を押してくれる力になると思っ、この地域の歴史学習を進めているわけです。

次に、市史編さんに期待することですが、やはり専門的な知識をきちんと入れた市史というのは子どもたちには大変難しいです。また、歴史の勉強は苦手だということ子どもにもいます。なぜと聞くと、覚えることがいっぱいあるからという声があります。そこで、現場の先生は難しいことを一から覚えさせるよりも、子どもの気づきとか思いとか、あるいは何で、どうして国分寺をつくったの、そんな疑問や知的好奇心、そういうものを大事にして指導を進めています。そういった現場の先生の思いを受け

止めた、いわゆる子ども版というのでしょうか、子どもにも分かる、子どもが興味関心を持てる。そして、なぜ、どうしてという知的好奇心を持てるような市史が求められているのではないのでしょうか。

例えば今ここにこんな資料があります。一ページ開きますと、『江戸名所図会』というのが載っています。江戸時代の名勝が図絵になっているこれです。さあ、これを見て気づいたことを挙げてみよう。えっ、畑だよ。畑の上に大きい岩があるよ。それをわざわざ見に来ている人がいるのだね、なんていうことが、子どもたちに見つけさせると出てくると思います。学習としては、ではここで見学している、訪ねてきた人と土地の人が何か話をしているよね。もしこの尋ねてきた人がこんな大きい礎石の上にどんな建物があったの、何で造ったのと質問したら、君はどう答えると子どもに発問してみてもいいかがでしょうか。子どものときからこの国分寺の建立については詔から始まっているいろいろな勉強をしていますよね。そうすると、子どもの中にある考えがまとまって、そして人に伝えようという気持ちが出てくるのではないのでしょうか。そんな工夫がどこかでされていて、子ども

自身が自ら発見する。自ら問いを出す。そしてそれをまとめて、人に伝えていく。そんな配慮が編さんの中にあっていいのかな。そんなことを期待しています。

司会 富山さん、市史編さんの課題をご提示いただき

まして、ありがとうございます。ご紹介いただきました社会科副読本の『わたしたちの国分寺』については、市史編さん室も今年度から一緒になって編さんを進めておりますので、今いただいたお話を盛り込めるようにしていきたいと思います。

それでは、今までのお話を受けて西木さんにお話をいただければと思います。よろしくお願いします。

西木 どうもありがとうございます。市民協力員に早速手を挙げていただいたお二人からお話をいただきまして、やはりこの地域のベテラン、地域をよく知り尽くしている方が入ってくださったというのもとても心強いですし、それから富山さんは新住民といってももう十何年いらつしやるのですね。でも、元々ここが生まれ故郷ではないという方にも加わっていたら、お子さんとともにいろいろな経験してその中というお話もありましたけれども、フィールドワークとか、やはりその場所を

見るというのが市史編さんのワークシヨップとかの中でもポイントになるのかな、大事になってくるのだろうかなと思いました。

私も駅と職場とたまに飲み屋ぐらいで、あまりよく国分寺の中を歩いていなくて、これからもっと自分自身もいろいろなところを見ながら、そういうワークシヨップ的なものや、見学会的なものを自分たちの調査と絡めながら実施して、自分たちも深めるし、そういう成果を皆さんに還元できるような機会を早い段階からつくつていきたいなと思いました。

それから、教育現場での取組ですけども、これは市史編さんの成果を子どもたちに分かりやすくするだけではなくて、子どもたちがこういう疑問を抱くだろうなということは、歴史学の課題でもあるのです。我々歴史研究者というのは、さも分かったような文章はいくらでも書けるのです。僅かしか資料はないのに、さもこうですよということはいくらでもテクニクでやるのですけど、素朴な疑問は意外と分かっているのです。だから、例えば新田開発や飢饉といったときに、幾つか媒介するものがないと子どもは多分理解できないですよ。飢饉

といったってそもそも何を食べていたのだろう。お米がなくなったのですか、豚肉がなくなったのですかとかという疑問から始まって、例えば芋とかがあったり、飢饉のときに備える食べ物があつたり、それすらもなくていいよ本当に亡くなる人もいる、そういう部分というのは、実は歴史学でそんなに分かっているのです。生活史の根幹みたいなところを素朴に聞かれると意外と分からないことだらけなのです。やはりそういう素朴な疑問、プリミティブにそもそもこれが分からないということの多くは、実は歴史学自身にとっても課題なのです。そういうことをともに学び合いながら、こちらから下ろすという発想ではなくて、酌み取っていきながら研究を進めていきたい。そういう関係性が築けたらいいかなとお話を伺って感じていました。

司会 西木さんありがとうございます。

むすびにかえて ―市史編さん事業の展望

司会 まだお時間がありますので、地域資料の掘り起こしというところでお話ができればと思うのですが、西

木さんから地域資料の掘り起こしは大変重要であるというお話がありました。今、市史編さん室でも、前回の市史編さんで見せていただいた古文書ですとか民具のほかに、新しい資料を探しているところです。西木さんのお話にもあったように、古文書や民具だけではなくて写真ですとか音声データ、映像ですとか、多種多様な歴史資料を探しています。もしこれは資料なのかなとか、こういうものがお家にあるのだけれどもということがあればぜひ市史編さん室までご一報いただければと思います。

それから、市民の方々への還元という意味でも講演会などを市史編さん室で企画をしているところです。市報でまた今後お知らせをいたしますが、一二月から三月に古文書、くずし字を読むという講座を企画しておりますし、一二月七日と来年一月一三日には歴史講演会を行います。一二月七日には、NHKの「日本人のおなまえっ!」にご出演されていた森岡浩先生のご講演、それから一月一三日には、同じくNHKの「チコちゃんに叱られる!」にご出演されている新谷尚紀先生の講演会が予定されております。多くの皆様にご参加いただければと思います。

それでは、最後に本日の講演や、今までのトークセッションを受けてご感想などをお一言ずついただいて終わりにしたいと思います。では、武藤さんお願いします。

武藤 繰り返しになりますが、史跡ガイドとして新しい市史に期待することを述べたいと思います。それは感動をプラスしてほしいという要望なのです。私、ふるさと文化財課には度々行くのですけど、文化財課の職員さんは日々発掘などを通して歴史的事実を発見しているのです。でもそれは学術的なもので、一般的な市民の方からしたらちよつと冷たかったり縁遠かったり、分かりづらいというものが多いのです。そういったものを市民の方がどうしたら理解してくれるか。利用される方と歴史的遺物を結びつけてあげるようなガイドを心がけているのです。なかなか難しいですけども、そういった中で、古い市史もとても参考になっています。古い市史はすごく厚いですから、あれを全部覚えたらもうガイドなんか完璧にできてしまうのですが、あれを見ていろいろ感じて、これをお客さんにどう伝えたらお客さんが感動してくれるかというのを私たちは常に考えています。ですので、市史は正確なものでなくてはいけけないので



意見交換をする参加者

難しいとは思いますが、感動できる部分が入った市史であってほしいなど。もしくは読んだ人が感動できる市史であってほしいなと思っています。新しい市史にはたくさんさんの大きな期待を持っています。本日はありがとうございました。

福山 今日みなさまのお話を聞いて、より一層国分寺の歴史に興味を持ちました。これからいろいろ学んでいきたいと思っています。本日はありがとうございました。

富山 もう一つ市史に期待することなのですが、子どもたちの考え、これが深まるとともに世界に広がっていくような、そういう役割を果たしてくれたらなという思いが私自身の中にあります。例えば新幹線を見たときに、昔々、明治の始めにはレールから枕木から全て一式を海外から輸入していました。そして、現在を見ると、イギリスで日本製の新幹線が走っているのだ。こういう学びの広がりにつながりですね。あるいは、大仏建立というのを見たときに、修学旅行に行けば奈良の東大寺で大仏を見ますね。総本山とのつながり、全国六八のまちなある国分寺とのつながりが見えてきます。

そのように地域の歴史を学んだときに、それが日本全

体、世界全体に広がっていて、互いに成長しているのだということが、子どもたちの気づきの中に深まっていて、広がっていったらいいな。簡単に言うとな国分寺の空を見たときに、日本とつながっている、世界とつながっているのだと。だから、例えば武蔵国分寺跡で出土した瓦のひとつに葡萄唐草模様のあしらわれた瓦がありますよね。同じ文様があしらわれたものは、奈良にもあるし、ギリシャのパルテノン神殿にもありますよね。そのように学んだことがつながって広がっていくということから、子どもの認識を深める、広める、そういうところを市史編さんに期待しています。

西木 ありがとうございます。とても期待されているので頑張らないといけないと思います。例えば玉川上水と水車の話でも、江戸時代には、水車で挽いた小麦を江戸の間屋を通して売っていました。しかし、近代以降になると江戸の周辺の間屋をすつ飛ばして横浜に持つていくとすることです、多摩の農民たちは。横浜に直接小麦とかを持ち込んでかなり大きな利益を得ようとして、江戸周辺の間屋たちと大変な戦いをするのですけれども、これは近代という新しい、世界とのつながりの中で起き

た変化が多摩地域にも出てきたものです。いろいろな豊かな視点というのが当然持てると思いますので、今おっしゃったようなことを意識しながらやりたいと思います。

それから、環境とか持続可能性みたいな発想というのは、三〇年前にはまだ萌芽的にしかなかった。それが教育現場の中でも当たり前のように今、入ってきていると思うのです。例えば開発から発展の過程の中で、獲得したものでなくてはなくて、失ったものもあるわけですよね。獲得したものと失ったものとのバランスとして現在があって、ではこの将来どうするのかということ。ちょうど私が扱う近世・近現代部会というのは、いつてみれば日本の伝統社会が形成されて、それが発展して変質していく。そして、もうぼぼぼ解体にある。そういう現代です。ただ発展だけではないし、発展してきたすばらしい側面と何か失ってきた側面と、両方捉えないといけない。そういうことも教育の現場とか、普通の生活者としてのいろいろな発想、そういうところから学びながら叙述していかないといけないのだらうなと強く感じています。そういう意味でも、我々が得た知識を教育現場に下ろす

という意識ではなくて、やはり一緒に考えながら、課題を突きつけられながら進んでいければいいかなと思います。ありがとうございます。

司会 それでは、これで「地域の歴史を学ぶこと」についてのトークセッションを終わりにしたいと思います。皆様、どうもありがとうございます。

(出席者) にしき こういち 東京都公文書館課長代理
近世・近現代部会長

とみやま けんいち 国分寺市教育委員会
前教育委員

むとう いさお 近世・近現代部会
市民協力員

ふくやま ともみ 近世・近現代部会
市民協力員

(司会) みやざわ あゆみ 市史編さん室職員

【開催情報】

市制施行60周年記念 東京都公文書館・もとまち
公民館・市史編さん室連携歴史講座

テーマ…地域の歴史を学ぶこと

日時…令和六年一〇月二六日(土)

場所…東京都公文書館研修室

市に関する歴史資料や情報を探しています

充実した市史を作るために、国分寺に関係のある資料や記憶・情報などを探しています。資料の閲覧・撮影・調査などにご協力いただける方、昔のお話を聞かせていただける方は、市史編さん室までご連絡ください。また、これは資料かな?と思った時もお連絡ください。

お問い合わせは市史編さん室まで。

○古文書・絵図・地図など

○市に勤務(在学)されていた時の資料

○市ゆかりの人物の資料や情報

○市内で撮影された写真・映像、音声記録

○市が登場する文学・芸術作品などの資料や情報

○自治会町内会・青年団・消防団などの記録や書類

○古いチラシ・パンフレット

○日記・手記、戦時中の体験記録など

○昔から地域で行っている行事などに関する記録



■ 研究ノート ■

国分寺市の畠山重忠伝承と無量山道成寺

—恋ヶ窪の地域説話をめぐって—

依田 亮一

はじめに

「姿見の池は、かつて付近の湧水や恋ヶ窪用水が流れ込み、清水を湛えていました。その名の由来は、鎌倉時代、恋ヶ窪が鎌倉街道の宿場町であった頃、遊女達が朝な夕なに自らの姿を映して見ていたという言い伝えによります。また、この池は「一葉松」の伝承の中にも登場します。源平争乱の頃、遊女の夙妻太夫と坂東武者で名将といわれた畠山重忠とが恋に落ちました。ところが、太夫に熱をあげるもう一人の男がいて、その男は重忠が平家との西国の戦で討ち死にしたと嘘をつき、あきらめさせようとしたが、深く悲しんだ太夫は姿見の池に身を投げてしまったと言い伝えられています」

これは昭和四十年代に一度埋没し、その後、平成十一年に再生整備した姿見の池緑地（西恋ヶ窪一丁目）の案内板に記された「恋ヶ窪」の地名発祥に関わる地域説話

である。メルヘンな気分をそえられる恋ヶ窪の地名は、ほかにも国府付近の窪地「国府が窪」の訛りという説や（吉田一九〇七・高橋一九三〇）、崖を意味するアイヌ語の峽「カイ」が「コイ」に訛って「恋」の字が宛てられ、後世に恋愛伝承が付加されたとする説（菊池一九六四・菊池二〇一四）、さらには年紀不詳『国分寺村古絵図』に「鯉ヶ窪」の表記があることから、水の豊富な土地で池に鯉がいたことに因むという説（関口一九七五）※一など、さまざまに語呂合わせ的な解釈が与えられている。

いうまでもなく、説話に登場する畠山重忠とは武蔵国男衾郡畠山郷（埼玉県深谷市）を本貫地とする武将で、治承四年（一一八〇）に平家追討を目指す源頼朝が伊豆で挙兵した際は敵方に与したが、後に臣従し、治承・寿永の乱での活躍を経て、鎌倉幕府草創期の有力御家人となった人物である。そして頼朝の没後は執権北条時政に

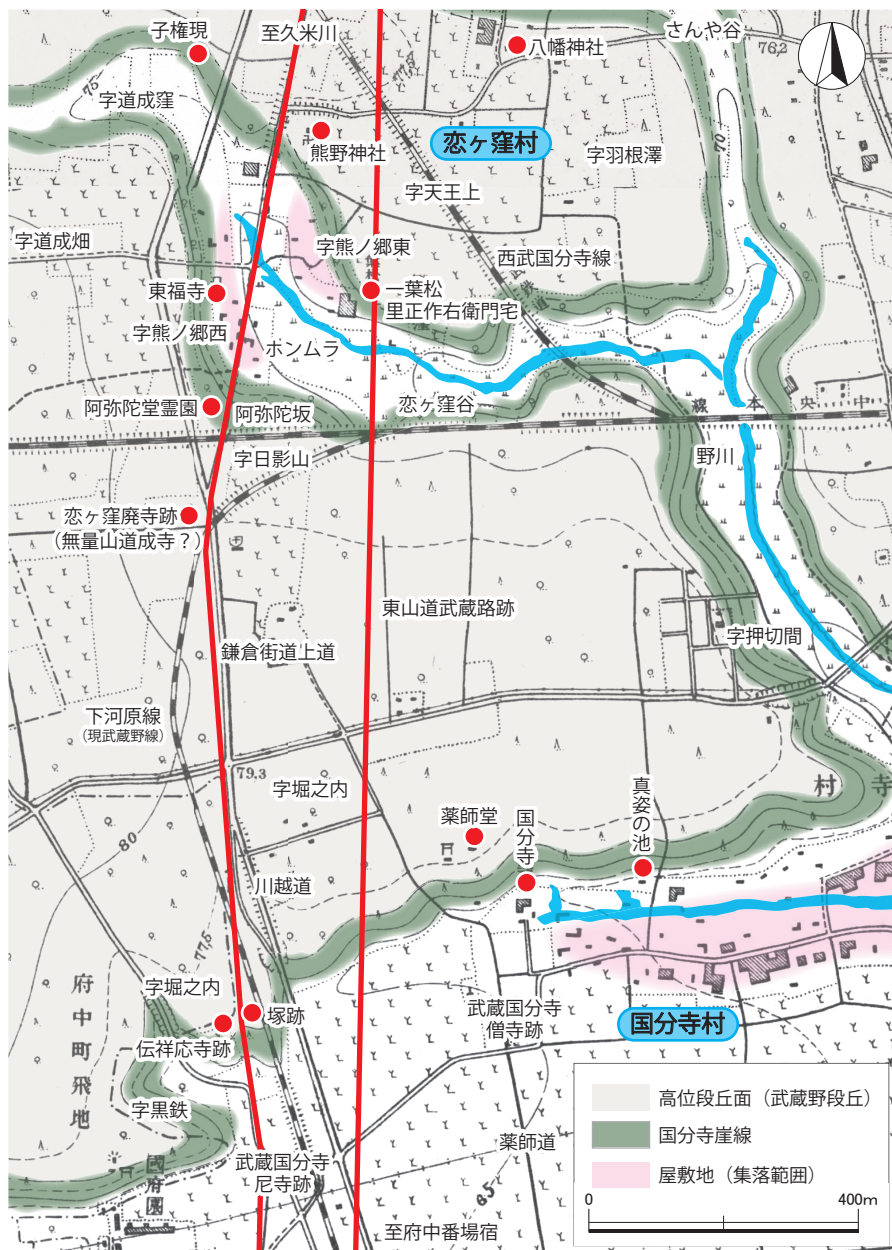
謀反の嫌疑をかけられ、元久二年（一二〇五）六月に都筑郡二俣川（神奈川県横浜市区）で一族ともに滅亡したが、存命中から武勇の誉れ高く、その清廉潔白な人柄から「坂東武士の鑑」とも称されている（清水二〇一八ほか）。

さて、この説話は『国分寺市史上巻』（以下、市史上巻と略す）の「第五章 中世における国分寺市域」で、柴辻俊夫氏が「第一節 鎌倉幕府の成立と武蔵」に「畠山重忠の伝承」を立項し、「いつ頃成立した伝承かはつきりしない」としながら「少なくとも江戸時代の中期には成立していた」と簡潔な紹介に留めているが（柴辻一九八六）、説話がどのような過程で形成され今日に伝えたのか、小稿では時系列を追って関連資料を提示しながら、遊女達が自らの姿を写した「姿見の池」や重忠と「夙妻太夫」の悲恋に因む「松」とは何であるのか、その後の研究や旧版市史刊行後に行われた発掘調査成果を踏まえながら再検討してみたい。
※一

一．地域の地勢と中世の恋ヶ窪

まず、近世・近代における恋ヶ窪地区の景観を踏まえ

ておこう。現在の国分寺市域は明治二三年（一八八九）に江戸時代の十箇村が合併して形成された。古多摩川が浸食した国分寺崖線沿いで、野川の源流域を含む国分寺村と恋ヶ窪村は中世以来の古村であるのに対し、村内に湧水地を取り込まない市域北部の八箇村は、玉川上水通水後まもなく享保年間（一七一六～三五）に開拓された新田村である。このうち恋ヶ窪村は現在の大字西恋ヶ窪・東恋ヶ窪一帯に該当し、高位の武蔵野段丘を開析する二つの小支谷（通称、恋ヶ窪谷・さんや谷と呼称）が入り組む、起伏の多い複雑な地形を呈している（図一）。近世の集落すなわち屋敷地は、東福寺付近の恋ヶ窪谷筋に広がる「ホンムラ」（小字熊ノ郷東・熊ノ郷西）を中心に、図一の範囲からは外れるが、現日立中央研究所の北側で延宝年間（一六七三～八〇）に開拓された古新田の「サンヤ」（小字山谷）、現孫の湯通り沿いで享保期に拓けたホンムラの持添新田である「シンデン」（小字本村附）の大きく三箇所に分かれる。ホンムラは水田を保有するものの、『新編武蔵風土記稿』に「陸田が多くして水田少し」とあるように村域は畑地と山林が卓越する景観で、また「家数凡二四軒、其内十七人古き百姓のよし



図一 近世恋ヶ窪村・国分寺村の旧景観と阿弥陀坂・無量山道成寺推定地

(昭和28年3月東京都建設局調製 1/3,000 地形図「国分寺」「国分寺北」を張り合わせし、彩色・加筆)

にて、検地の時毎戸屋敷地を免除せられ、併せて是が為に二段九歩の敷を除せらる」ことから、古来村に人々が定着した様子が窺える。

しかし、恋ヶ窪村に関する中世史料は極めて少ない。まず、鎌倉極楽寺の僧明空が流行宴曲を集めた歌謡集で、正安三年（一三〇一）頃の成立とされる『宴曲抄』に「善光寺修行」と題する鎌倉街道上道沿いの各所を詠んだ作品があり、その一つに恋ヶ窪が登場する。「……小山田の里にきにけらし。過こし方をへたつれば。霞の関と今ぞしる。おもひきや我につれなき人をこひ。かく程袖をぬらすべしとは。久米川の逢瀬をたどる苦しさ。武蔵野は限りもしらずはてもなし……」（塙保己一編 一九二五『続群書類従 第十九輯下 遊戯部・飲食部』平文社より）。「こいがくぼ」地名の初見資料でもある。

続いて、京都聖護院門跡の道興准后が文明一八年（一四八六）に京都を発ち、翌年三月まで北陸へ関東へ東北を巡った紀行文『廻國雜記』に「……此関をこえ過て恋が窪といへる所にて。朽ち果てぬ 名のみ残れり 恋がくほ今はたとうも 契りならずや ある人のもとにまかりてあそび侍りけるに。題を探て三十首歌よみ侍りけるに。深夜寒月。春秋にあかしなれぬる 心さし 深き霜夜の 月そしるらん 松雪夕深。

嵐さへ うつもれはてて 降る雪に 松のしるへも なき夕かな 思ふ戀言。さすか又 かくとはいえこそ 岩こすり 下に乱て わふとしらなん……」（塙保己一編 同書より）とある。十四〜五世紀の街道沿いに拓けた宿駅の一つ「恋が窪」は鎌倉武士らが善光寺参りする通過点で、室町時代に「恋」をモチーフに歌詠みが行われ、その象徴として「松」が暗示されていることに、ひとまず注目を払っておきたい。

なお、村内の古刹武野山東福寺（真言宗豊山派）は、本寺の府中妙光院が所蔵する元文四年（一七三九）の『門末代記』に歴代住職の名がみられ、開山は未分明ながら享禄元年（一五二八）の中興と記されているほか、同院所蔵『本覚列祖伝』で貞観元年（八五九）に妙光院が開山後、四百年を経て住職が隠居するために東福寺を建立したことを伝えるので、十三世紀半ばに開山された可能性はある（藤森他一九九五）。※三

二・近世地誌・紀行文にみる重忠伝承の形成

さて、柴辻氏が江戸時代中期には成立していたという重忠伝承は、現在、府中本町駅近くに佇む天台宗寺院の善明寺に祀られ、建長五年（一二五三）の年紀と造像関

係者名を陽刻した鉄造阿弥陀如来坐像（国指定重要文化財）とも深く関わっている。^{※四} 鉄仏は江戸時代後期に

は六所宮（大國魂神社）参道脇の鉄仏堂に祀られていたが、明治維新の神仏分離に伴い現在地へ移され、さらに古くは恋ヶ窪村もしくは国分寺村に所在したという由緒を持つている。本仏像の来歴を伝承に絡めて考察した小野一之氏の研究によれば、六所宮神主家に「享保の頃、国分寺村の黒鉄谷戸で発掘された」と伝承される鉄仏は、しばらく露座となっていた時期を経て、寛政七年（一七九五）の紀行文『武蔵野草』に鉄仏堂の存在があることから、天明期（一七八一―八九）までに六所宮へ移されたもので、元々は武蔵国分僧寺か尼寺、またはその関連堂舎に所在し、そこに恋ヶ窪の重忠伝説がすり込まれることになったという数奇な来歴を推測している（小野二〇一一）。以下、小野氏の先行研究に学びつつ、恋ヶ窪地区にフォーカスして重忠伝承の形成過程をみていきたい。^{※五}

まず、田澤義章が享保二一年（一七三六）に著した『武蔵野地名考』の「恋ヶ窪」項に次のような記述がある。「古へ京師よりみちのくに至るの往復の地なり、此駅に遊女などあり

し也、今は武蔵の中の家となり、恋がくぼ村なむ云、藤原の孝標女さらしなの日記に、遊びともきたりてなどかける、此ところなるべし、さらしなの日記事ながければ、こゝにもらしつ」。恋ヶ窪村は古くから往還の要地で、かつては遊女がいたことを伝える。そして平安時代の中頃に菅原孝標女が自身の回想録として著した『更級日記』をとりあげ、上総国司の任期を終えて帰京する父孝標に従って恋ヶ窪を訪れたとしているが、同日記中に恋ヶ窪の記述は存在しない。

続いて、寛政六年（一七九四）に古川古松軒著『四神地名録』『恋ヶ窪村』の項を掲げる。「村名珍しき称号也。初にいふことく古しへの古道にて、むかしは傾城数多有りてはんじやふの所にて、畠山重忠に愛せられし遊君自殺し、死せししるしの松有り。土人傾城が松と称す。いかにも年ふりし老樹にて、逆枝をうちて風ぞくよき松也。阿弥陀坂といふ所に草ぶきの阿弥陀堂有り。重忠彼傾城菩薩の為に、府中に今有る阿弥陀仏を安置せし旧地といふ也。うたがうふへきもなき実跡と思はれて、むかしを思ふ情ありし也。松のありし地に、古しへは無量山道成寺と号せし寺院の有りしよし。云ひ伝へのみにて今はなし。うつりかわるは世の流行にして、今は至而淋しき僻地也。恋が窪の地よりは古墓をほり出せし事ながら、いまいまとやらん土人いふて、本

の地中へほり埋しとの事也。けふも往來の傍らに応永年中の古墓有りしなり。今年まで凡四百余年なる年号也。珍しといふべし。ここで畠山重忠と遊女の悲恋説話が現れ、物語の象徴として「松（傾城の松）」の存在を強調する。また、今は府中六所宮にある阿弥陀仏は、重忠が遊女の菩提を弔うために造立し、元々は阿弥陀坂の阿弥陀堂に祀っていたもので、すでに廃寺となっていた道成寺の近くには傾城の松があつたことを伝えている。さらに地中から古墓が発見され、路傍に応永期の板碑が造立されていた様子も窺い知れる。

恋ヶ窪は、狂詩・狂歌・洒落本作者で著名な大田南畝の先祖所縁の地でもあつた。文化六年（一八〇九）の『調布日記』には恋ヶ窪村を訪ねた旅行記がある。「……これよりうしろの松の林をわけゆきて、川越の道にいでて恋が窪村にいたらんとす、此村は、予が先祖大田の名字のある所なれば、一しほなつかしくゆきゆきて道の左に榜示あり、もとの御代官早川八郎左衛門支配所、恋が窪村とあり、左の小高き所に寺あり、武蔵山東福寺といふ真言宗門のさし入に石の地藏尊むかひたてり、石坂をのぼりみれば宝篋印塔石あり、側に彼岸さくらを三四株うえ置たるが花ややひらけり、此所に石碑をたてて先祖の事をも記

しをかましと思ふもあらましごとくなるべし、右の小道に入りて小流をわたり、此村の里正某が家にいこふ、此家のうしろに牛頭天王の小祠あり、神木の松一葉の松なり、一むら竹のしげりたる中にくぼかなる所あり、これ古への北国街道なりとあるじいへり、傾城か松みんとて立ていでゆく、畑は瓜畑なりといふ、ゆきゆきて八幡の小社あり、傾城か松は大きな松なり、かたはらにも二本ばかり、それよりすこしちいさき木あり、畠山重忠の愛妓のしるしの松なりと云、又立歸る道の右に道場畑といふ所あり、又右の方に阿弥陀坂といふあり、この小高き所に草ぬきの阿弥陀堂あり、府中六社にある所の阿弥陀仏は此所にありしと云、四神地名録に松のありし地に、右は無量山道城寺と号せし寺院のありしよしをいへど左にてはあるまじ、此道場畑といへる所にありしなるべしと思はる、此阿弥陀堂も其境内にてありしなるべし、今は無住なり、青石の碑ありしが年号みえず、此地より古墓をほり出せし事ながら、いまいましとやらん土人いひてもとの地中へほり埋しとの事……なりと、地名録に見えたるもわか遠つおやの墓などもありしならんとしのばし……。名主家の屋敷には牛頭天王の祠と神木の「一葉の松」、そして竹藪の中に切通し状の古道跡（古代の東山道武蔵路跡）があり、「一葉の松」とは別に重忠縁の大樹「傾城の松」が八幡小社の脇に立

つ。その帰路では阿弥陀坂の草葺堂へ立ち寄り、松が立つ坂の上は無量山道成寺の跡地で、路傍に年紀不明の石碑がある光景を記録している。

同じく、十九世紀前半の地誌類を幾つかみておこう。

まず、文政六年（一八一三）の植田孟縉撰『武蔵名勝図会』は国分寺村に「姿見之池」の項を掲げ、「国分寺より僅かに東の方、村居の内にある小池なり。中に島ありて、弁財天の小祠あり。鳥居は村内往来道の端にあり。ここより池まで廿間程あり。この池を名付けて、小野小町姿見之池と号す。往古小町武蔵国まで来たりし頃は盛かりも過ぎければ、日毎に姿を水鏡にうつし見て、面影の変じけるをなげきけると云。弁財天は小町が精を祀るとぞ。西勝院に寺伝の説あり」と記し、現在の西元町地区に所在する「真姿の池湧水群」（東京都指定名勝）を「姿見の池」だとして紹介している。また、恋ヶ窪村は「往古の官道にて、府中へ出る駅次なり。いまは府中領と号し、府中より川越へ行く道なり。村の中程より少し南の方に当たたりて、往昔の駅舎の跡とて古瓦など多く畠中より掘りだすことあり。又云鎌倉の繁昌なるときは、ここに遊女町ありしと云。それゆえ、傾城松などと号するもあり」と概観し、『廻国雑記』に触れつつ次に掲げる名所旧跡を紹介する。

傾城松 久米川へ行く道の八幡窪とて、村鎮守八幡宮の傍らにあり。囲り一丈二尺許。又云この松は傾城町の界の松なりしと云。

一葉松 囲り五尺許。往古の親木は枯れて、根株二ツあり。右同村の村長の屋敷内にあり。古街道の傍なり。

古街道 道幅五、六間、府中より久米川道なり。右同村にあり。いまは村長が屋敷内にその跡あり。

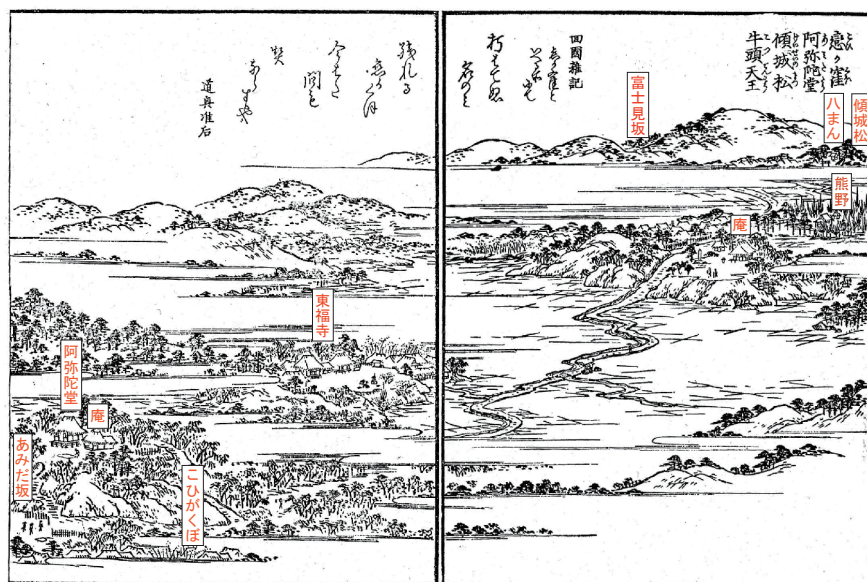
涎塚 右同村にあり。川越道の傍にして、国分寺村界なり。高さ七尺程。塚の謂われ不知。塚上に板石の古碑あり「応永九年

（二四〇二）壬午八月十五日、了圭禪尼」

傾城松と一葉松という二本の大樹が村のランドマークで、国分寺村境に応永九年の板碑と高さ二メートルほどの塚（涎塚）があり、古瓦が出土することを記している。

また、文政十一年（二八二八）の『新編武蔵風土記稿』の恋ヶ窪村の項では、八幡宮・彌陀堂・阿弥陀坂・恋ヶ窪・傾城が松を名所として紹介し、八幡宮脇の傾城の松を重忠と結びつける伝承は俗説であることや、高安寺の末寺である彌陀堂は、以前は無量山道成寺もしくは飯寺と号していた様子を伝える（注八参照）。

さらに、天保五年（一八三四）の『江戸名所図会』の恋ヶ窪村の項でも、長谷川雪旦の挿絵に『廻国雑記』の



図二 『江戸名所図絵』 恋ヶ窪・阿弥陀堂・傾成松・牛頭天王の挿絵（一部、文字を加筆）

道興准后の歌を添えて阿弥陀堂・傾成松・牛頭天王を名所として掲げ（図二）、阿弥陀坂について次のように記している。

阿弥陀坂 富士見塚より十三町あまりを隔てて、恋が窪村の地北へ向ひて下る坂を云ふ。この坂の左に傍ひたる岡に草案あり。土人阿弥陀堂と称す。木造の阿弥陀如来を本尊とす。延享四年鶴心と云ふ僧、この草庵の廃れたるを興す。土人云ふ、古への本尊は銅像にして、今府中六所宮の社地にあるものこれなりと。相伝ふ往古畠山庄司次郎重忠、この地恋が窪の駅舎にやどりし頃、寵愛せし遊君ありしが、重忠平家追討につきて西国へ出陣せらる。然るにその後、をこのものありて、重忠討死したる由いつはすかしたりしを実とし、かの遊君歎きのあまり終に自殺したりしを、後重忠聞きてあはれみ、かの遊君が節操を感じ、菩提の為にこの阿弥陀堂を建立し、鍬を以て弥陀如来の像を鑄て安置せしといふ。因みに云ふ、この地に道場畑と字する地あり。土人云ふ、むかしこの地に無量山道成寺と号する寺院ありし故に、しか唱ふるとぞ。しかるときは、この阿弥陀堂もその境内にありしものなるべき歟。又云ふ、今府中六所宮の社地にある所の、鍬像の弥陀仏は、重忠愛せし遊君の菩提の為造立する所の仏体なりといへども、その仏像の銘文年号等を考ふれば、重忠とは時世大いに違ひ、誤りなる

事明らかし。猶、六所の宮の条下をみるべし。

悲恋説話では遊女に横恋慕する別の男が登場し、男の虚言により遊女が自害する件が付加されている。また、阿弥陀堂の旧本尊は六所宮の鉄仏で、重忠が亡き遊女の菩提を弔うために造立したと流布されていたが、仏像の年号銘は重忠の生存年ではなく、伝承が誤りであることを指摘している。

これらの各種地誌・紀行文から、街道沿いの恋ヶ窪に嘗て遊女が集う宿場町があり、遊女と重忠の恋に纏わる説話の象徴として松や、六所宮の阿弥陀仏に因んで阿弥陀坂・阿弥陀堂の旧跡が観光名所として喧伝された様子がわかる。また、傾城松とは別に名主家の屋敷地にも一葉松と呼ばれる大樹があり、往来する人々にとつて恋ヶ窪は松を目印とする景勝地でもあった。ただし、遊女が自身の姿を映したという「姿見の池」や「夙妻太夫」は、この時期の資料には見られない。

※六

三、恋ヶ窪廃寺跡と無量山道成寺

近世中々後期の地誌・紀行文で各地の名所旧跡が注目されると、武蔵国分寺は大正十一年（一九二二）に国の

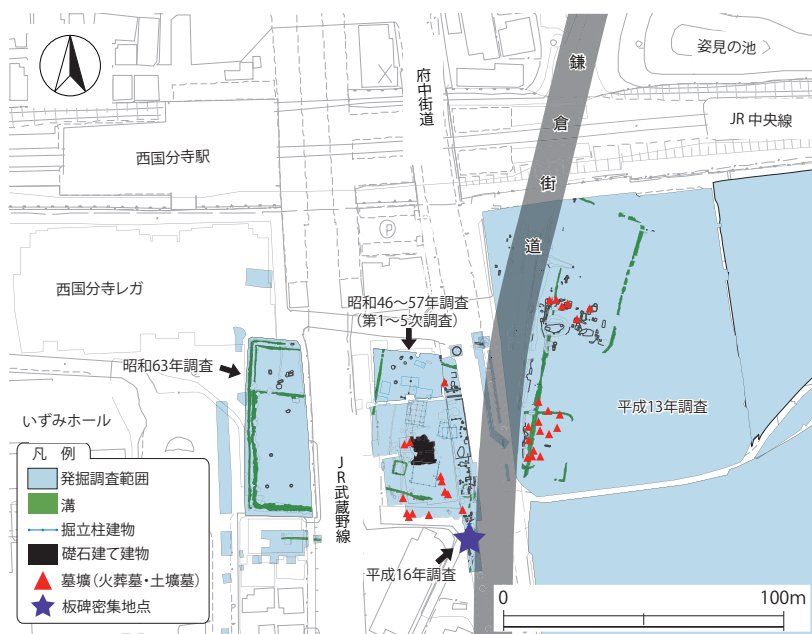
史跡指定を受けることになったが、その後、僧尼寺主要伽藍の範囲外にも幾つかの地点で礎石や古瓦が散布している状況が指摘された。その一つに石村喜英氏が「寺院国分寺の西北方約十町の国分寺字恋ヶ窪、阿弥陀坂西側の山中に若干みられる」という現在の西国分寺駅南側一帯に広がる雑木林があり（石村一九六〇）、武蔵野線と同駅の開業に向けて宅地開発の波が押し寄せたことから昭和四六く五七年に発掘調査が五回実施され、後に「恋ヶ窪廃寺跡」と命名される古代末々中世の寺院跡の存在が判明した。

遺跡は北側に恋ヶ窪谷を見下ろす標高約八十メートルの台地縁辺部に立地し（図一）、中央を南北方向に一本の道路跡が縦貫する。本道路跡は約一キロメートル南方で国分寺崖線を切通状に開削し、崖下は古代武蔵国分尼寺の中枢伽藍上に重畳して伸び、さらにその延長経路上で行った市内および府中市域の発掘調査では複数地点で幅約十メートルの硬質面と側溝が点々と見つかり、中世鎌倉街道上道の痕跡として捉えられている。対して北方は、近世恋ヶ窪村「ボンムラ」の中心を南北に突き抜け、東福寺の東側を走る現道は鎌倉街道を踏襲したものであ

る。なお、本遺跡と「ホンムラ」を繋ぐ区間は、明治二六年（一八九三）に開通した甲武鉄道線路軌道で大きく滅失しているが、当該範囲こそ『四神地名録』や『江戸名所図会』等で恋ヶ窪の名所として紹介された阿弥陀坂であり、中央線西国分寺駅上りホーム脇には現在もかうじて切通し状の景観を留めている。また、駅周辺の再開発事業に伴い平成十三年に行った発掘調査では阿弥陀坂の一部が箱堀状の道路跡として検出され、その後も恋ヶ窪廃寺跡の周辺一帯では平成十六年まで調査が続いている（図三）。このうち五次調査までの成果概要は有吉重蔵氏が市史上巻で触れ、発見された礎石建て建物一棟、掘立柱建物七棟、堀跡六条、墓壇（土壇墓・火葬墓）約四十基、方形周溝状遺構二基、その他多数の溝跡は、遺構の重複関係や主軸方位、出土遺物等から三時期の変遷過程があると扱っている（有吉一九八六）。要約すると、第一期（創建期）は礎石建て建物が該当し、その規模は東西九メートル、南北十、七メートル、高さ〇・三メートルの土壇上に建ち、礎石や根固め石を十箇所を確認した建物規模の詳細は不明ながら、出土した瓦は九世紀中頃～十世紀が主体を占めているという。第二期は鎌

倉街道に東面し、溝で区画した範囲の内側に複数の掘立柱建物群や方形周溝状遺構を配する再建寺院で、重複し合う遺構のうち主軸方位が揃うグループごとに新旧二時期に細分化でき、十三世紀末頃を中心に十一世紀中頃から十四世紀後半の年代を与えている。また、宗派は街道に東面する伽藍配置や恋ヶ窪村の鎮守熊野神社の存在から時宗系、もしくは方形周溝状遺構が禅宗の葬法に関連するものだとして禅宗系に想定した。そして第三期は区画溝が埋没し、第二期の建物は存続しつつ、土壇墓・火葬墓・火葬骨集中地点など墓壇を主体に板碑が造立された場へと変化し、十四世紀後半から十五世紀末の年代を充てている。

このうち第一期は武蔵国分寺と同範の軒先瓦を含むことから、礎石建て建物を『続日本紀』宝龜二年（七七二）十月己卯条に「……其東山駅路、従上野国新田駅、達下野足利駅、此便道也、而枉従上野国邑楽郡、経五箇駅、到武蔵国……」と記載された東山道武蔵路の五駅中の「某駅」に比定する説や（坂詰二〇〇七）、僧・尼の山林修行の場と考える説（有吉二〇一四）など、国分寺に関連する建物として評価される一方で、瓦の出土量自体が少



図三 恋ヶ窪廃寺跡と周辺の中世遺構群

なく、礎石の根固め用に国分寺瓦が運ばれてきた可能性もあるなど、礎石建て建物を瓦葺とみる見解そのものにも疑義があるという（有吉一九八六）。旧市史で触れられた遺跡の枢要部分にあたる三〇五次の調査報告書は未完のため現時点で詳細は不明と言わざるを得ないが、遺跡の変遷も第一期と第二期で継続性をもつのか、あるいは断絶するのは大きな問題である。また、既刊の市史や発掘調査報告書で紹介された恋ヶ窪廃寺跡出土の石碑のうち紀年銘を伴うものは二二枚を数え、嘉暦三年（一二三二）から明応四年（一四九五）までの年号を有しているが、^{※七}第二・三期ともに当該地は板碑造立の場であったことにもなり、三時期区分で捉える遺跡の評価自体も再検討の余地を残しているといえよう。さらに、発掘調査では十七〜十九世紀の陶磁器類が出土しているものの、『四神地名録』に「云ひ伝えのみにて今はなし」とあるように、十八世紀末時点では既に寺院は存在していなかったと思われるが、十五世紀末以降も存続していたかは定かではない。しかし、阿弥陀坂の上にある恋ヶ窪廃寺跡は、国分寺村との境界に近く、恋ヶ窪村域側に含まれるという地理的な条件を考えれば、文献にみえる

「無量山道成寺」である蓋然性は充分にあるといえるであらう。^{※八}

四、近代以降の重忠伝承のさらなる脚色化

重忠が最期を迎えた横浜の二俣川地域で、今日に通底する重忠像の形成過程を検討した阿諏訪青美氏によると、中世に成立した『平家物語』や『源平盛衰記』等に記された「鴨越の逆落とし」や「宇治川の先陣争い」の活躍譚を母胎としながら、源平合戦五百年忌に東大寺大仏殿建立の勧進興行を兼ねて創作された近松門左衛門の『出世景清』（貞享二年（一六八五）成立）がイメージの定着に最も影響力を及ぼした作品であるといい、さらに近代以降には明治十三年（一八八〇）の教育令改正で「修身」が重要視されて教科書に重忠が登場すると、豪勇・忠義・清廉潔白や教養の深さを象徴する「武士の鑑」としての重忠像が確立した（阿諏訪二〇二二）。そして、近世以降に流布した様々な重忠に纏わる伝承は、北限は北海道から南限は鹿児島県にいたるまで、四国・中国地方以外の地域で約二百箇所分布し、なかでも埼玉県が六五、東京都が三一、神奈川県が四三箇所を数え、

畠山氏の所領地であった武蔵国と幕府の置かれた相模国に全体の七割が集中している傾向が認められている（村松二〇一二）。

こうした一連の過程のなかで、大正五年（一九一六）に府中町青年会が発行した『武蔵国府名蹟誌』の「善明寺（府中町）」（国寶）阿弥陀佛の由来」項に、重忠と恋仲にあった遊女の名前がはじめて登場してくる。

「抑も善明寺境内に安置しある鐵佛阿弥陀如来、御胎内秘佛の小像は鑄造年月詳ならずと雖も大正四年を去ること凡そ七百五十年餘の古佛なり、今其の由来を尋ぬるに、疇昔秩父莊司次郎畠山重忠當地附近の戀が窪に數々遊びし折しも或時夙妻太夫の美貌衆人に勝れたるを憎からず思ひそめけり、彼の夙妻太夫また此の殿君なつかしと思ひなづみて果ては日毎に相見んことの叶す果報のうれしさを人知れずこそ一人笑みつつありしに生者必滅會者定離は世のならはせとは云ひながら、戀ひしたふ殿君は義経平家追討の一味に加はり関東武士の腕前見すべき時こそ来れど関西の方に出で向はんと一度立ち上りしが、夙妻太夫のことを顧みては必残らざるにあらず、せめては暫時の別れぞと一言を遺さんにはとて事の始終を聞かせければ、夙妻太夫聞くより早くも泣き伏しにけり、重忠言葉を改めて曰く、御身のいとしさ我ならで知る人なけ

ん、然れども我こたひ出陣せん事如何に諦めて時節の来るを待ち玉へと云ひければ、夙妻太夫ふり落る涙をぬぐひつつ、つれなき殿君の仰せかな、せめてのこと御情に御供のほどお許し玉へぞかしとて、今は狂乱の如くすがり嘆くを重忠おし有めつつ、我等が武運を祈り玉へとて鎧の袖を振り拂ひ、後れて人の笑罵にされまじと早くも馬に鞭をぞあてにける、取りのこされし彼の夙妻太夫は長き日の春もいつしか過ぎさりて思ひつづくる長き夜も秋もいつしか暮れにけりされど我戀ひしとふ殿君の悲しき便り聞かんよりは、絶えて久しき雁かねのうれしくもまた憂ひけるうき川竹の仇枕、茲に仇なる男あり、御身が戀ひつる重忠殿も武運拙かりけん響の頃はかなき討死遂げ玉ひきと誠やかに物語りしければ夙妻太夫身も世もあらず悲み嘆き、早此の上は黄泉の國まで殿君の御後一足に御駈け縋り参らせんものとして果敢なくも自害し果てたりけり、さる程に重忠役を終へて武運目出度立ち歸りけるにあはれ夙妻太夫は既に亡し矧んや我迹慕ひてはと聞てはいよいよ懐しく思ひ、夙妻太夫が菩提を吊はんとて阿弥陀佛の鉄像一基を鑄させ、一宇の堂を建立して無量山道成寺と名づけたるもの御胎内の秘佛即ち是れなり。因みに記す、畠山重忠は重能の子幼名氏王丸武蔵國の人なり畠山荘に居り畠山莊司二郎と稱す、天性寛大嘗て義仲を討ち平家を攻め功あつて誇らず人皆其の徳に伏す、元久二年

(二二〇五)不幸にして纔に遇ひ北條時政に圖られて戦死の後には彼の無量山道成寺も星移り物變りて世はいつしか頽れ、地も漸く寂れ行きて果てたりしかば彼の御胎内の鐵佛のみ風寒き日も黒鐵鏝くる夏の日も雨凌ぐべき笠もなく叢の中に山田守る案山子の如くなりしを後人妙蓮菩薩鑄師藤原助近なる者と相計り重忠が志を空しうせんことを深く憂ひ大勸進して一丈二尺の大鐵佛を建長五年(二二五三)二月十八日鑄道し重忠が建立せし小像を御胎内に納め後の世までの語り草のみならず右志す者の過去二親行嚴新發意乃至法界衆生平等利益奉鑄一丈二尺佛身也建長五年癸丑二月十八日丙寅彼岸初日』然るに何時の頃なりしか今は年月不詳なれども今の大國魂神社々に運び尊敬浅からざりしも明治維新の際神佛混淆廢され悲願山善明寺に奉移し境内佛堂として安置せらるること茲に四十六七年蓋し顧ふに一盛一衰は事物の免れざるところ昔日はその名も尊ぶとき金佛尊も今や其の名も知らざる人の多きに達しつつある折柄大正二年四月國寶に編入せられ漸く又世に知らるるに至れり。(府中市教育委員会一九九四)。

※九

その後、昭和五年(一九三〇)に発行された高橋源一郎著の『武蔵野歴史地理』では、「恋ヶ窪と傾城夙妻太

夫物語」の小見出しまで登場し、今日にも語り継がれている地域説話の完成形をみるようになった。

おわりに

都内の中野区周辺を舞台に、文明九年（一四七七）に在地武士の豊島氏と扇谷上杉家の家宰太田道灌が交戦した江子田原沼袋合戦や、永享十年（一四三八）の多宝山成願寺の開創に纏わる中野長者伝説等を題材にして、史実が伝説化する過程を考古学・文献史学・民俗学の成果をもとに検証した比田井克仁氏は、史実が正確に伝承される約一二五〜一四〇年後の第一段階から、伝承された史実が忘却され、違ったモチーフが加わり内容が変容する第二段階を経て、その後、史実は内包されているもののストーリー性を持つように発達して伝説化する約三五〇年後以降の第三段階という三つのステップを経て、現在に伝わる各地の地域説話が完成していくとした（比田井二〇〇六）。

恋ヶ窪廃寺跡は、発掘調査に基づく考古学的事実として十三〜十五世紀末まで存続したことは確実で、『四神地名録』には廃寺として無量山道成寺が登場するまでの

約三百年間は、比田井氏のいう伝承された史実が忘却された時期にあたる。しかし、巻末（注八）にも記すように同じ寛政期の典籍『寛政年鏡』には、高安寺の「末門葉寺中頭首十箇寺」として「恋窪邑半天山無量院今有」と現れるなど、実存していた可能性もある。遺跡の実態と関連資料との突き合わせには検討が及ばなかった課題もあり、これから始まる新しい市史編さん事業でさらなる調査・研究の進展に期待したい。

恋ヶ窪の畠山重忠伝承は、強き男性ヒーローと、か弱き女性ヒロインを主軸に据えた物語で、前近代の価値観が色濃く、現代社会に生きる私たちには多少なりとも違和感を覚える構成に映るかもしれない。しかし、恋ヶ窪には六所宮の鉄仏に重忠伝承が付加される前からも「恋」に纏わる地域説話があり、そこに重忠や傾城・葉の松、夙妻太夫や横恋慕する別の男、姿見の池といった脚色化が順次進んでいった。恋ヶ窪と重忠との関係性は不明ながら、内容自体に史実が反映されていなくとも、その伝承期間は優に数百年以上もの歳月におよんでいる。恋ヶ窪という地域の特性を考えると、説話そのものが貴重な歴史的遺産であることは紛れもない事実といえよう。

【謝辞】 本稿は、国分寺市教育委員会と東京経済大学が毎年共催にて実施している二〇二四年度第四二回市民大学講座「現代社会を考える二〇二四―地域と国際社会の変容―」（全八回）のうち、第六回「国分寺の畠山重忠伝承―恋ヶ窪の地名由来を考える―」（令和六年十一月十六日）の口頭発表資料をもとに文章化したものである。講座の開催にあたっては、同大学広報課、ならびに本市教育委員会社会教育課職員の御協力を得ました。末筆ではありますが、記して御礼を申し上げます。

【注】

- 一、『国分寺村古絵図』（国分寺所蔵絵図）は『市史中巻』二六一頁図四を参照。同絵図は年紀不詳ながら、延宝六年（一六七八）「屋敷御検地水帳」（『国分寺市史料集Ⅲ 三号文書』記載の名請人と絵図の屋敷地の配列が合致することから慶安（寛文初期）（一六四八～六五）の制作と推測されている（北原一九九〇）。
- 二、畠山重忠伝承は、ほかにも市史の左記の章節等で紹介されている（有吉一九八六）、（北原一九九〇）、（青木一九九〇）。
- 三、本覚山妙光院文書の翻刻資料は『史料集Ⅲ』に収載。『門末世代記』（二七二号文書）、『本覚列祖傳』（一七三号文書）。
- 四、現存鉄仏では最大規模の坐像で、像高は一・七メートル、重量は三八〇キログラムを測る。建長五年に念阿弥陀仏と明蓮が仏師の藤原助近へ依頼し、藤原姓の女性三人が彼岸初日に亡父母と行殿人々の供養を祈念し制作したことが左記の銘文から窺える。重忠が没した約五十年後に鑄造され、遊女の菩提を弔う目的で造立したという伝承内容は歴史的事実ではない（府中市二〇二〇）。

（衲衣左胸部）

大勧進念阿弥陀仏、明蓮、大工藤原助近、

右志者、為過去二親□行嚴新發意、乃至法界衆生平等利益、

奉鑄一丈二尺仏身也、

建長五年癸丑二月十六日丙寅彼岸初日

（衲衣左胸部）

藤原氏

藤原氏

藤原氏

五、『新編武蔵風土記稿』の国分寺村の小名黒鉄の項には「村の西に

あり、府中六所にある所の鉄像の弥陀は、昔此谷より掘出せしものなりといふ。此所の丘林を祥応寺跡と呼」と記載され、黒鉄を恋ヶ窪村の阿弥陀堂・無量山道成寺とは異なる鉄仏旧来地として紹介し、小野氏も国分寺村説を支持している。

なお、享保年間に開発された本多新田の菩提寺である祥応寺（黄壁示）は山号を黒金山と称し、開発人の所持地にあった檀那不在の貧寺を新田へ引寺したことが享保十一年（一七二六）六月の「国分寺祥応寺開発場二引寺仕度願書」にあり、その故地は「伝祥応寺跡」という現在の武蔵国分尼寺北方の台地上に比定されている（松尾一九九〇、図一）。

「国分寺祥応寺開発場二引寺仕度願書」

年恐口上書を以奉願上候

一 武州多摩郡国分寺村二從古来禅宗之小寺、深川海福寺末祥応寺与申貧寺、無檀中二而及大破二拙者地内二草庵体二而差置候所、幸此度願場之内地面少々割渡し開發仕候、依之右祥応寺開

発場江江移取立相續仕度奉願上候、勿論然上ハ只今迄之国分寺
村祥応寺、寺号寺地之儀ハ潰候様ニ可仕候、御慈悲を以願之通
引寺仕、寺用相勤候様ニ被仰付候ハ、難有可奉存候、以上

武州多摩郡国分寺村願人

享保十一年午六月

名主 儀石衛門 ⑩

同新田村与頭 仲右衛門 ⑩

同村 泰洲 ⑩

岩手藤左衛門様 御役所

—『国分寺市史料集Ⅱ』十七号〔本多良雄家文書〕

当該地では昭和四〇年と旧版市史刊行後の平成七年に発掘調査が行われ、切通し状に開削した鎌倉街道の西側に面して、北西南の三方を土塁で囲繞する礎石建て建物を検出し、一堂形式の中世寺院であることが判明した。調査報告書によると、土塁内整地土から十三〜五世紀末の土器・陶磁器や板碑が、表土からは十八〜二〇世紀の陶磁器類が出土し、「十六、七世紀のものが無く、「祥応寺」が十八世紀初頭には「大破」して無檀であった状況と合致する」と記されているが（福田一九九七）、板碑の造立を伴う建物跡が十五世紀末まで存続したことは確実である一方で、十七世紀の遺物が無いという事実は、すなわち当該地には享保年間当時、祥応寺と称する貧寺は存在していなかった可能性もあるといえるであろう。

その際、田中洋平氏が上野国高崎藩の地方役人大石久敬が記す『地方凡例録』に、近世寺院は創建時期によって「古跡」と「古跡並」に分類され、元禄以降、これら以外の新規寺院は建立が差し止められたことを示しつつ、元文五年（一七四〇）時点で正式な寺号を保

持していなかった常陸国真壁郡藤ヶ谷村の正行院が、「当村白水海跡、前々より御当山支配にて、古跡ニ紛れ御座なく候」（『関城町史料編一』「藤ヶ谷正行院願」）として願い出ることによって正式に寺号を得た経緯を紹介していることは、享保期の新田村における檀那寺の建立事情を考えるうえで、非常に示唆的である（田中二〇二五）。

それは、武蔵野新田の引寺事例を検討した小峰孝男氏も指摘するように、元禄五年（一六九二）の新寺建立の禁令発布後は幕府による寺院建立が厳しく統制されるなか、古跡・古跡並の寺院で潰れもしくは廃寺となったものの再興に関しては許可される場合があり（小峰二〇〇四）、たとえ有名無実であっても、再興した体裁を幕府に認許されれば引寺が成立することを意味しているからである。

また近年、前述の延宝六年国分寺村検地帳に記載のある小名「堀之内」が、明治二年（一八六九）の国分寺村絵図と照合すると、「伝祥応寺跡」付近に該当することが改めて判明した（依田二〇一八）。周知のとおり、「堀之内」は中世武士の居館跡に伝わる地名であり、「伝祥応寺跡」と伝承される遺跡の性格自体も今後検討を要する課題といえる。

六、このほか青木直己氏は、恋ヶ窪村の畠山重忠伝承、六所宮の阿弥陀仏、傾城松・葉松、道成寺、古墓の板碑に触れた近世地誌類に、『遊歴雜記』（文化十二年・釈木清著）、『武蔵野略遊記』（文政二年）、『四神社閑記』（文政七年・池田定常著）、『郊遊漫録』（斎藤幸孝著）、『武蔵演路』（屋代弘賢著）などを紹介している（青木一九九〇）。

七、嘉暦三年・明応四年銘の板碑は、ともに（滝口一九七二）文獻で属性情報を記した一覽表のみ掲載されているもので、前者は本多章吉氏所蔵資料、後者は昭和四十六年の恋ヶ窪廃寺跡第一次調査出

十資料であるが、今後の調査で資料の採拓・写真撮影が必要である。

八、阿弥陀堂と道成寺との関係については、明治三年「阿弥陀堂杉売松帳」（『史料集Ⅲ』一七〇号文書）に「元わ、半天山無量院蔵清寺申成、今ハあみたどつ申成」とあり、『調布日記』や『江戸名所図絵』からも道成寺境内に阿弥陀堂が含まれていた可能性がある。また、府中高安寺に伝わる典籍で、天正七年（一五七九）の『報恩録』には「当寺十利頭首市川山見性寺」の西之五院・東之五院に加えて、近門中に「恋窪無量院」を含む六箇寺を記しているほか、寛政八年（一七九六）の『寛政年鑑』にも高安寺の「末門葉寺中頭首十箇寺」として、恋窪邑半天山無量院と記載されている（『禅宗地方史調査会年報第二集』一九八〇年）。また『新編武蔵風土記稿』に「彌陀堂三間四面、村の南境にあり、府中高安寺持、木の坐像長二尺許、此堂昔は無量山道成寺とも云、或は飯寺とも云へるよし、いづれ寺の摩跡なるべし」とあるように、かつて道成寺（蔵清寺）は高安寺とは本末関係を持していた。北原進氏によると文政五年（一八二二）の底裏銘のある東福寺の位牌に、「恋窪邑阿弥陀堂は往古人王九十七代光明院御宇、足利尊氏公章創高安寺時、末山八十五箇寺建成、其十首の一而号半天山無量院、其後転派以高安四世為開山事跡歴然也、依人仏の日記焉、龍門山二十世天山事」とあることから、道成寺は文政四年頃に高安寺の末門から転じて、東福寺の管理下に移ったことを推測している（北原一九九〇）。

なお、明治六年（一八七三）『数目調書』（『史料集Ⅰ』三四号文書）は「旧跡傾城ノ松」の由緒に触れ、元弘三年（一二三三）の分梅河原合戦において「此夜の悪害に、相州勢国分寺をはじめ、当地の道城寺を焼たるよし、此時恋ヶ窪の町屋も類焼し」たことを伝える。

九、この時、鉄造阿弥陀如来坐像の造年銘と重忠の生存年と不整合であることを解消するため、同じ善明寺に伝わる像高一メートルの鉄造阿弥陀如来立像を坐像の胎内仏であると称し、立像に重忠伝承を付加している。そして、坐像の附として重要文化財に指定されている（小野二〇一一）。

【参考文献】

青木直己 一九九〇 「第十一章 農村の文化 第四節 国分寺を訪れた人々」『国分寺市史 中巻』国分寺市（八四五～八六一頁）

阿諏訪青美 二〇二二 「横浜・二俣川地域にみる畠山重忠イメージの創生」『横浜市歴史博物館編『書物学』二〇 追憶のサムライ中世武士のイメージとリアル』勉誠出版

有古重蔵 一九八六 「第五章 中世における国分寺市域 第五節 国分寺市域における中世遺跡」『国分寺市史 上巻』国分寺市（七四九～七七七頁）

有古重蔵 二〇一四 「国分寺と都市計画」『季刊考古学 第二一九号 特集王権擁護の寺・国分寺』雄山閣

石村喜英 一九六〇 「第三章 遺跡の研究 一、遺跡の概況」『武蔵国分寺の研究』明善堂（八九～九〇頁）

小野一之 二〇一一 「鉄仏の来歴と畠山重忠の伝説」『府中市郷土の森博物館紀要』第二四号

北原 進 一九九〇 「第三章 村と本百姓 第二節 村々の景観」『国分寺市史 中巻』国分寺市（二八一～二八九頁）

菊池山哉 一九六四 『府中市史料集』三 府中市史編纂委員会

菊池 功 二〇一四 『東京の地名地形と語源をたずねて』河出書房

新社

- 国分寺市教育委員会 一九八一 『国分寺市史料集Ⅰ 村落状況・支配関係文書』
- 国分寺市教育委員会 一九八二 『国分寺市史料集Ⅱ 武蔵野新田開発関係文書・川崎平右衛門関係文書』
- 国分寺市教育委員会 一九八三 『国分寺市史料集Ⅲ 寺社・信仰・文芸関係文書』
- 小峰孝男 二〇〇二 『享保期武蔵野新田における離檀と引寺』『東村山市史研究』第二号 東京都東村山市
- 坂詰秀一 二〇〇七 『万葉集』と東山道武蔵路』『立正大学人文科学研究所年報』別冊一六（後、二〇一六『考古渉獵抄（私の考古遍歴三）』ニュー・サイエンス社に再録）
- 柴辻俊六 一九八六 『第五章 中世における国分寺市域第一節 鎌倉幕府の成立と武蔵』『国分寺市史上巻』国分寺市（六二六～六七頁）
- 清水 亮 二〇一八 『中世武士 畠山重忠 秩父平氏の嫡流』歴史文化ライブラリー四七七 吉川弘文館
- 関口雄基臣 一九七五 『国分寺』松岡六郎・吉田格編『多摩の歴史 3 国分寺市・国立市・小平市・武蔵村山市』武蔵野郷土史刊行会（後、氏子青年部発行『恋ヶ窪の歴史』に収載）
- 滝口 宏 一九七二 『恋ヶ窪堂址調査報告』泉町廃寺址遺跡調査会
- 高橋源一郎 一九三〇 『武蔵野歴史地理』第三冊（一九七二年に有峰書店より再刊）
- 田中洋平 二〇二五 『住職たちの経営戦略 近世寺院の苦しい財布事情』歴史文化ライブラリー一六四 吉川弘文館
- 比田井克仁 二〇〇六 『伝説と史実のはざま―郷土史と考古学―』

雄山閣

- 藤森裕治・田中 斉・大嶋一人 一九九五 『信仰』『国分寺市の民俗 五―本多新田・恋ヶ窪村の民俗』国分寺市教育委員会
- 府中市 二〇二〇 『新府中市史中世資料編』
- 府中市教育委員会 一九九四 『武蔵国府名蹟誌』府中市郷土資料集 十六
- 福田信夫 一九九七 『武蔵国分尼寺跡Ⅳ―平成七年度発掘調査概報』国分寺市教育委員会
- 松尾公就 一九九〇 『第二章 享保改革と武蔵野新田の開発 第二節 武蔵野の開発』『国分寺市史中巻』国分寺市（七二丁～八三頁）
- 村松 篤 二〇二二 『全国に及ぶ重忠伝承』埼玉県立嵐山史跡の博物館・葛飾区郷土と天文の博物館編『秩父平氏の盛衰 畠山重忠と葛西清重』勉誠出版
- 吉田東伍 一九〇七 『大日本地名辞書 第六巻 坂東』富山房
- 依田亮一 二〇一八 『武蔵国分寺跡第七一八・七二三次調査』『平成二八年度国分寺市埋蔵文化財調査概報』国分寺市教育委員会

よだ りょういち

ふるさと文化財課長
兼市史編さん室長

■ 講座 ■

人口の変化に見る国分寺市の移り変わり

―昭和初頭から市制施行まで―

宮川 展夫

はじめに

令和七年（二〇二五）四月一日現在、国分寺市の人口は、一二九、五七八人、世帯数は六四、九〇四世帯となっている。¹市は令和六年十一月に市制施行六〇周年を迎えたが、その間に市の人口・世帯数は大きく増加している。本稿では、昭和初頭から国分寺市が誕生した昭和三九年（二九六四）頃に焦点を当てて、人口や世帯数の推移を読み解いていくこととする。²

1. 戦前から戦後における人口の推移

国分寺は、明治三二年（一八八九）に市制・町村制が施行されたことにより、戸倉新田外九ヶ村組合が合併し、国分寺村となった。³その後、昭和一五年（一九四〇）

に町村制を施行し、国分寺町となった。⁴国分寺村時代の人口と世帯数を、大正九年（一九二〇）に実施された第一回国勢調査の結果からみると、人口が四、六一八人、世帯数が八〇一世帯である。⁵次に、国分寺町となった昭和一五年を見ると、人口が九、四五〇人、世帯数が一、七二五世帯である。⁶二〇年間の間に人口・世帯数ともにほぼ倍増したことになる。

その後も国分寺町の人口は順調に増加し、翌一六年には人口が一〇、〇三〇人となり、一〇、〇〇〇人を突破した（図1）。終戦翌年の昭和二二年には一五、八二四人となり、二七年には二〇、七二一人となり、概ね五年前後で約五、〇〇〇人ずつ人口が増加していることになる。また、人口が二〇、〇〇〇人を突破した昭和二七年には第四小学校が、二年後の二九年には第二中学校が新設されており、若年層の人口も大きく増加していたこと

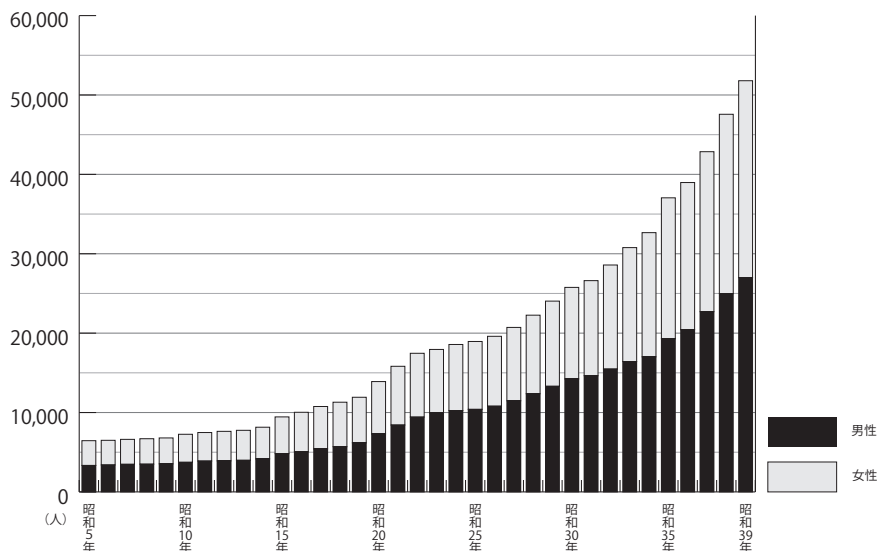


図1 昭和5年～39年 国分寺における人口変遷（各年1月1日時点）

がみられる。

こうして人口が二〇、〇〇〇人を超えた翌二八年に町村合併促進法（昭和二八法律第二五八号）が成立する。これは「深刻化してきた地方公共団体の赤字を、町村合併による財政基盤の強化で乗り切ろうとするもの」で、概ね人口八、〇〇〇人未満の町村を解消する目的であった。国分寺町の人口はそれを上回っていたが、翌二九年九月に発表された「東京都市町村合併計画」では、国分寺町と小平町（当時）との合併が盛り込まれた。小平町は国分寺町より人口が多く、二九年には二五、一〇三人であった。そのため、両町とも町村合併促進法の求める要件は満たしていたが、都の計画では「市制施行のための町村合併」を求めていた。

この合併の動きは、小金井町（当時）も加わり三町合併の方向で進んでいく。国分寺町では町報（昭和二九年一月一五日・号外）で「町村合併の問題」が報じられた。合併の動きが強まっていく一方で、反対の動きも急速に強まっていった。その結果、三〇年一月に三町の町長は会合を持ち、合併の一時延期が決められ、頓挫した。昭和三〇年代に入ると、国分寺町の人口の増加スピ-

ドはさらに加速する。昭和三〇年に二五、七六三人に達した人口は、三三年には三〇、七七五人、三五年に三七、〇四六人と三五、〇〇〇人を突破しており、二三年で約五、〇〇〇人ずつ増加している。そして、三七年には人口が四二、八五七人となり、四〇、〇〇〇人台になると、翌年には四七、五七〇人、さらにその翌年の三九年には五一、七九七人となる。三七年から三九年の三年間における前年比の平均増加数は四、二七五人であり、短期間で国分寺町の人口は大きく増加した。

地方自治法（昭和二年法律第六七号）では、普通地方公共団体が市となる要件の一つとして、人口五〇、〇〇〇人以上を有することとされている。国分寺町は昭和三八年度にこの条件を達成し、他の要件もあわせて市制施行の要件を満たしているとして、市となるべく手続きを進め、三九年一月三日に市制を施行した。

昭和三〇年代の一〇年間で国分寺町の人口は、約二六、〇〇〇人増加したことになる。しかし、この時期の学校建設は、三六年に第三中学校が、三八年に第五小学校が新設されたのみである。人口は昭和二〇年代（約一〇、〇〇〇人の増加）と比べても大きく増加している

が、小中学校の新設が相次いでいるわけではない。一方で、校舎の増築は複数の学校で行われており、学校の新設と既存学校の拡充というかたちで児童・生徒数の増加に対応していた様子がうかがわれる。

2. 前年比人口増減数

昭和一六年（一九四一）に人口が一〇、〇〇〇人を突破して以降、二七年に二〇、〇〇〇人を突破するまでに一一年、三三年に三〇、〇〇〇人を超えるまでに六年、三七年に四〇、〇〇〇人を上回るまで四年、さらに三九年に五〇、〇〇〇人となるまで二年と、国分寺町時代の人口は加速度的に増加した。しかし、この伸びは、必ずしも毎年一定数で伸び続けたわけではない。

図2は、昭和五年から三九年における前年比の人口増加数である。これを見ると、戦前・戦中期では、男女ともに前年比の人口増が五〇〇人を超える（総数で一、〇〇〇人を超える）のは、昭和一五年の一年のみである。また、女性の人口は、昭和六年や二三年を見ると、前年比マイナスとなっている。この要因については後考を期

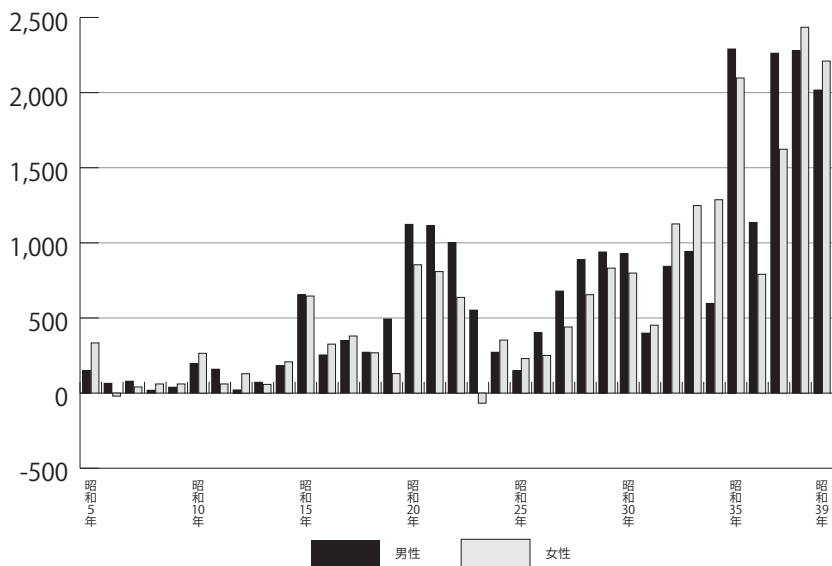


図2 昭和5年～39年 国分寺における男女別前年比の人口増減（各年1月1日時点）

したいが、男女別に見ると、人口は必ずしも右肩上がりというわけではなかった。

昭和二〇年から二二年にかけては、前後の年と比べても増加数が増加している。特に男性は毎年一、〇〇〇人を超える増加数となっており、大きい数値となっている。基準日である一月一日のうち、二〇年については戦時中であるが、二一年と二二年については、終戦後の外地からの引揚げや戦地からの復員が影響している可能性が考えられる。あわせて、二二年から二四年にかけてはいわゆる第一次ベビーブームの時期でもあり、出生数の増加も町の人口が増えた一因であろう。

その後、人口の伸びは一旦落ち着きをみせるが、昭和二七年から三〇年にかけて再び年間の増加数が一、〇〇〇人を超えるようになる。この四年間での年平均増加数は一、五四〇人であり、人口が二〇、〇〇〇人台から二五、〇〇〇人台へと伸びていく。

昭和三一年には前年比八五一人増と五年ぶりに増加数が一、〇〇〇人を下回るが、三二年以降は再び増加傾向が加速する。この年から四六年まで一五年連続で前年比人口の増加数は一、〇〇〇人を上回り、四〇年には前年

比六、六六七人増と最大の増加数を記録した。国分寺市の誕生は、この大幅な人口増加の中でのことであり、市制施行とあわせて、急激な住宅地化の進展の中で、市域の様子も大きく変容していったことが、人口の変化からも想像できよう。

一方で、こうした急激な人口の増加は、国分寺だけの事例ではなかった。周辺地域も含めて急速な都市化が進展しており、その結果、無秩序な開発が問題にもなっていた。この状況に対応するために、政府は「首都圏の整備に関する総合的な計画を策定し、その実施を推進すること」を目的として、昭和三二年四月に首都圏整備法（昭和三二年法律第八三号）を公布した。この法律は、首都圏を「既成市街地」・「近郊地帯」・「市街地開発区域」の三つに区分しており、このうち「近郊地帯」を「既成市街地の秩序ある発展を図るため緑地地帯を設定する必要がある」区域と位置づけた。

国分寺町を含む多摩地域の自治体の多くは、この「近郊地帯」に区分されたが、その結果、住宅地化や都市化が抑制されてしまうことが懸念され、地元では反対運動が起きた。国分寺町でも、昭和三一年の人口は、二五、

〇〇〇人を突破しており、直近五年の人口増加数の平均も一、四〇〇人を上回るなど、人口増加の傾向は顕著になってきていた。今後さらなる町の発展を図る上では、緑地地帯（グリーンベルト）の設定によって発展が阻害されることは懸念材料であったといえよう。

さて、話を人口の増減数に戻そう。三二年から三四年にかけての三年間で特徴的なのが、女性の増加数が男性の増加数を上回っていることである。同様に三七年・三八年も女性の増加数が男性を上回っている。要因については、必ずしも明らかではないが、この時期の一つの特徴といえよう。

なお、三二年一二月には、国分寺駅南口が、三四年九月には国立駅北口が開設されている¹¹。また、三〇年二月には西武国分寺線の恋ヶ窪駅も開業しており、鉄道や駅の利便性が向上することは、ベッドタウンとして町の発展を推し進める要因となろう。これは必ずしも女性人口が大きく増加した理由にはなり得ないが、人口の増加によつて起きたまちの変化が、さらなる人口増を呼ぶという循環になっていたと考えられる。

昭和三五年には、前年比で人口が四、三八七人増加し

しており、初めて一年での人口増加数が四、〇〇〇人を超えている。先述したように、国分寺における前年比人口の最大の増加は、四〇年の六、六六七人であるが、三五年の前年比増加数は、記録の残る限り四番目である。前年一〇月には、鉄道技術研究所（現公益財団法人鉄道技術総合研究所）が平兵衛新田（現光町）に移転してきており、その関係者も一定数市域やその周辺に居住したと想定すれば、四、〇〇〇人を超える人口増の一因として考慮されよう。さらに、昭和三七年には、前年比三、八八五人増、翌三八年には四、七一三人増、三九年には四、二二七人増と大幅な人口増加の傾向は、短期的なトレンドではなくなっていた。

こうして人口が増え続ける中で、国分寺町の事務処理も増え続けていった。当時の町役場は、それまで恋ヶ窪（現東恋ヶ窪四丁目）にあったが、この庁舎は明治四三年（一九一〇）三月に竣工したもので、約半世紀にわたって使われてきたものであった。そのため、老朽化が激しく、事務スペースも基準面積をはるかに下回る状態であった。¹³ この状況を打開すべく、町では役場の移転を決定し、昭和三八年三月に、戸倉新田（現戸倉二丁目）

の地へ移転した。¹⁴

3. 世帯数の変化

ここまで人口の変化や、前年比の人口増減から、国分寺における変化を見てきた。続いて世帯数の変化に着目しながら、市域の変化を見ていこう。

はじめにでも述べたように、令和七年（二〇二五）四月一日現在における世帯数は六四、九〇四世帯となっているが、昭和五年（一九三〇）一月一日時点の世帯数は、わずかに一、一九〇世帯であり、現在の一・八三％に過ぎない。同じ条件で人口をみると、昭和五年一月一日時点の人口は、令和七年四月一日現在の人口の四・九八％なので、当時の世帯数が今と比べて如何に少なかったかが見て取れよう。

その世帯数も、基本的には人口の増加に伴って増加傾向にある（図3）。昭和一七年には世帯数が二、〇〇〇世帯を超え、二、一三〇世帯となる。さらに、二〇年には二、五〇〇世帯を上回り二、八六一世帯に、翌二一年には三、三五〇世帯、二二年には三、七一一世帯と短期

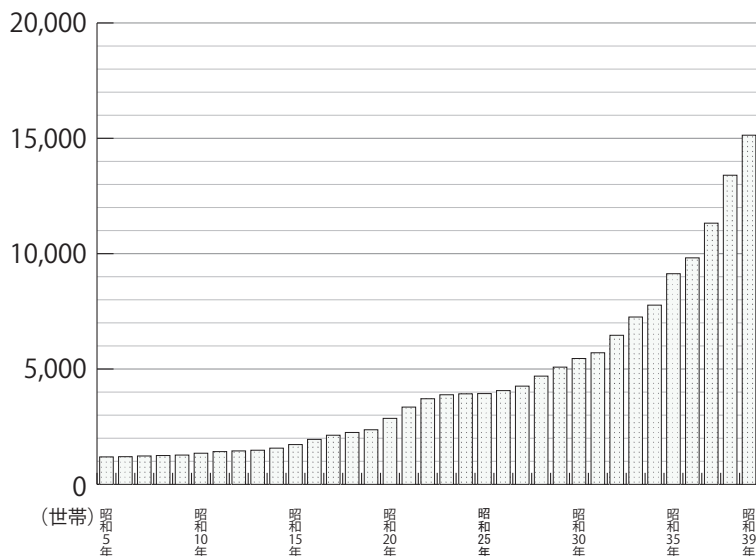


図3 昭和5年～39年 国分寺における世帯数の推移（各年1月1日時点）

間に三、〇〇〇世帯と三、五〇〇世帯を超える。ちなみに、この昭和二〇年から三三年は、人口においても大きな伸びを見せている時期であり、戦中から戦後にかけて人口・世帯数ともに顕著な増加を示している。

その後も世帯数は緩やかに増加していき、昭和二六年には四、〇六四世帯と四、〇〇〇世帯を突破する。翌二七年から人口の増加傾向が加速することは既に述べたが、これは世帯数においても同様のことがいえる。二八年に四、六九二世帯と四、五〇〇世帯を超えると、翌年には五、〇八二世帯に、二年後の三二年には五、七〇四世帯に、三三年には六、四六二世帯に達する。特に三二年から四六年にかけては毎年五〇〇世帯以上の急激な増加を見せるようになる。その中でも、三七年から四六年にかけての一〇年間は、毎年一、〇〇〇世帯以上増加しており、人口・世帯数ともに最も増加した時期であった。その結果、三七年には世帯数が一〇、〇〇〇世帯を超え、一一、三三二世帯となる。

翌三八年は人口・世帯数ともに大きく伸びた年であった。世帯数は前年比プラス二、〇七八世帯であり、記録が残るなかで歴代二位の増加数となっている。人口にお

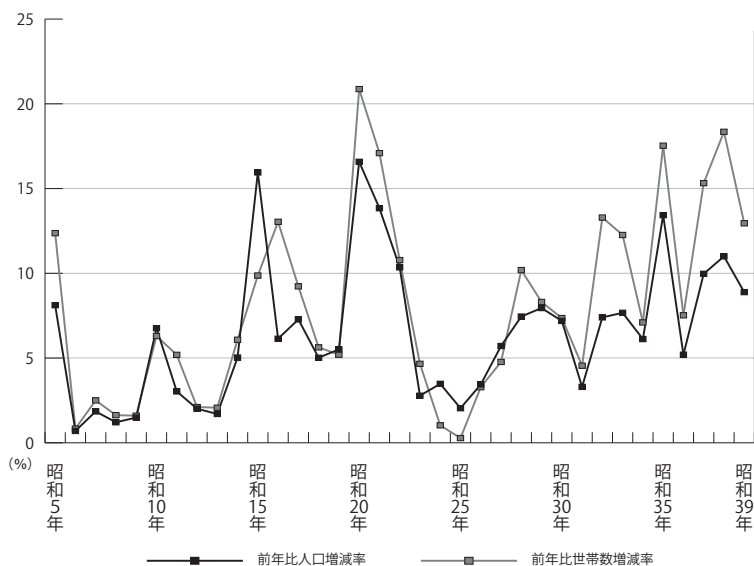


図4 昭和5年～39年 国分寺における人口・世帯数の増減率（各年1月1日時点）

いても同年は歴代三位の増加数であったので、人口・世帯数ともに一年で大幅に増加したといえよう。そして、市制施行を迎える三十九年にも前年比でプラス一、七三五世帯となったことで、国分寺の世帯数は一五、一三五世帯となった。昭和五年にはわずか一、一九〇世帯であった国分寺の世帯数は、約三五年で一三、七倍にも膨れ上がったことになる。

ここまで世帯数の変化に着目してきたが、ここからは人口と世帯数の関係に着目してみよう。図4は人口と世帯数の前年比の増減率を表したグラフである。一見して人口・世帯数ともに同じような動きを示しているが、多くの年で世帯数の方が増加率が高い傾向がみとれる。前年比で見た時に、人口よりも世帯数の伸びが大きいということが読み取れる。

図5は人口を世帯数で割って出した一世帯当たりの平均人数の変化である。全体的に右肩下がりとなっており、一世帯当たりの人数が減少していることがより明確となる。戦後の日本では、核家族化が進み、また単身世帯も増加してきたことが指摘されており、国分寺においても

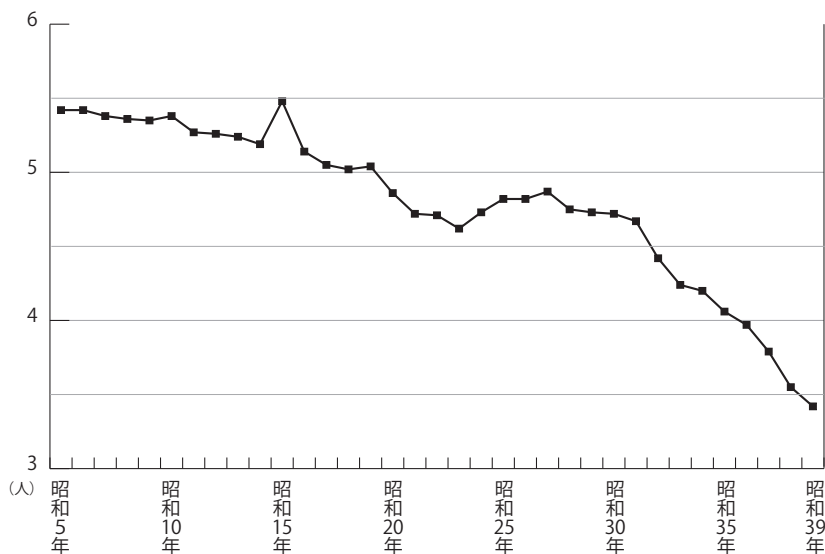


図5 昭和5年～39年 国分寺における世帯人数の変化（各年1月1日時点）

同様の傾向を示しているといえよう。

一方で、必ずしも世帯人数が減少し続けたわけではなかった。例えば昭和一五年は人口増加率が世帯増加率を上回った年であるが、その結果、世帯平均人数も上昇に転じ、一世帯当たりの人数が五・四八人となっている。この年は戦前・戦中期においては人口の増加が顕著に多い年であった。もちろん世帯数も増加はしているが、人口と異なり増加数が他の年と比べて突出しているというわけではない。そのため、一世帯当たりの人数の増加が見られたのであろう。

戦後になると、昭和一五年に見せたような事例は見られなくなり、一世帯当たりの平均人数の減少傾向はより顕著になってくる。しかし、必ずしも一世帯あたりの平均人数の上昇がなかったわけではない。昭和二二年は人口と世帯数の前年比増加率がほぼ拮抗している。さらに、先にも見たように、第一次ベビーブームにより出生数が増加すると、ごく短い期間ではあるが、人口の増加率が世帯増加率を上回る年が見られる。これは、当然世帯平均人数にも現われており、一時的な上昇傾向を見せる。

しかし、二〇年代後半以降は前年比の世帯増加率が人

口増加率を大きく上回る年が多くなっていく。その結果、世帯の平均人数も減少傾向が強まっていく。昭和五年には世帯平均人数は、五・四二人であったが、二〇年に五を下回って四・八六人になると、三六年には四を下回って三・九七人に、市制施行の年である三九年には三・四二人にまで減少した。

むすびにかえて

本稿では昭和五年（一九三〇）から、市制が施行される三九年までの人口及び世帯数の変遷に着目しながら、国分寺市域の変化を探ってきた。国分寺市はこれまで大きなあるいは長期的な人口や世帯数の減少は経験していない。今回取り上げた時期についても、男女別に見ると細かい減少はあるものの、基本的には人口・世帯数ともに増加傾向であった。

しかし、増加の傾向を詳しく見ていくと、時期ごとの特徴が見られた。特に終戦直後には、引揚げや復員と見られる人口増が確認できたり、第一次ベビーブームが影響したと考えられる増加もあった。さらに、昭和二〇年

代後半以降になると、人口・世帯数とも増加のスピードは増していく。特に三〇年代半ば以降の増加は短期間で急激なものであった。当時の国分寺町が大きく変化していく中で市制を施行したであろうことが、人口や世帯数の変化からも想像できよう。

一方で、今回は人口や世帯数の変遷という統計資料に着目したのみで、周辺資料を十分に用いることができたとは言いがたい。今後は周辺資料や周辺自治体の情報を用いることで、国分寺の特色をより鮮明にしていきたい。

註

- 1 『市報国分寺』第一四九四号（二〇二五年四月一日）
- 2 人口及び世帯数の統計情報は、『国分寺市統計』の各年度のものを用いた。なお、人口の推移については、国分寺市史編さん委員会編『国分寺市史 下巻』（国分寺市、一九九一年）でも詳述されている（第11章「人口増加と移動―統計にみる変化」ほか）。特に北多摩郡を含む周辺地域との比較にも紙幅を割いているので、あわせて参照されたい。

3 前掲註2『国分寺市史 下巻』

4 前掲註2『国分寺市史 下巻』。国分寺村の町制施行は、皇紀二六〇〇年の記念事業として行われた。

5 大正九年国勢調査 (e-Stat <https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&troukei=00200521&tstat=000001036875&cycle=0&class1=00001036876&class2val=0>)。なお、国勢調査の基準日は、調査年の一〇月一日である。

6 前掲註2『国分寺市統計』

7 前掲註2『国分寺市史 下巻』

8 昭和二十九年一月一日現在。『統計書』小平市)

9 国分寺町が市となるべくまとめた「国分寺町を市とする処分申請書」については、本書中の西木浩一「資料編さん事業がもたらすもの―地域資料を守る、活かす―」(『国分寺學』を学ぶ)第一号、二〇二五年)にも紹介されている。あわせて参照されたい。

10 「活発化した緑地地帯設定反対運動」(『国分寺町報』第一六号、昭和三十一年二月一日)、「緑地地帯設定反対その後の動向」(『国分寺町報』第一七号、昭和三十一年四月二五日)。昭和三十一年二月二日には「緑地地帯設置反対国分寺町住民大会」が開かれている(『国分

寺市史 下巻』)。

11 前掲註2『国分寺市史 下巻』

12 長谷川康「鉄道技術研究所の紹介」(『伝熱研究』第三卷九号、一九六四年)。この中で長谷川氏は、昭和三十八年五月二〇日現在の所員数を九一九人と紹介している。この全員が国分寺に居住したわけではないであろうが、一定数は住民であった可能性はあろう。

13 「恋ヶ窪にあった旧町役場」(国分寺市教育委員会市史編さん室編『国分寺市制施行60周年記念 資料でたどる国分寺のあゆみ』村から町へ、そして市制の誕生)二〇二五年三月)

14 この時建設された新庁舎は、耐震強度の問題が発覚し、平成二十四年(二〇一二)に取り壊されている。その後も、同地に市役所は置かれていたが、令和七年(二〇二五)一月に泉町の新庁舎に移転し、戸倉の町役場・市庁舎は六一年にわたる歴史に幕を下ろした。

新たな国分寺市史編さん基本方針

令和六年二月五日決定

一、はじめに

新たな国分寺市史の編さん事業は、令和五年度の施政方針で「本市の魅力発信の取組と連携しつつ、郷土愛を育み、後世に歴史を継承するため、新たに市史編さんの担当職を設置し、市制施行六〇周年を契機とした市史の再編さんに向けた検討に着手するとともに、『国分寺市総合ビジョン』（平成二九年三月）に掲げる未来のまちの姿「魅力あふれ ひとがつながる 文化都市国分寺」に込められた想いを踏まえ、これまでの歴史を受け継ぎ、文化の薫り高いまちを目指してまいります」と示されたことを機に、事業実施に向けた準備を開始しました。令和五年度から教育委員会事務局内に新設された市史編さん担当は、四月～六月に都内で自治体史の編さん事業を推進している市区の担当部署や関係機関等へヒアリング訪問を重ね、他自治体の取組状況を確認するとともに、本市で過去に行われた市史編さん事業を整理し、七

月二〇日の総合教育会議、七月二七日の教育委員会定例会、八月二五日の庁議、八月二九日の文化財保護審議会、九月一日の市議会厚生文教委員会等で、「新たな国分寺市史編さん事業の実施について」の検討と報告を重ねてまいりました。それらを踏まえ、以下のとおり「新たな国分寺市史編さん基本方針」を定めるものとします。

二、新たな国分寺市史編さんに至るこれまでの経緯

昭和三九年一月三日に東京都では一四番目となる市制を施行した国分寺市は、市区町村名に「国分寺」を冠した全国唯一の自治体で、その名前が示すとおり奈良時代に創建された武蔵国分寺の所在地でもあります。市制施行当時に約五八、〇〇〇人余りであった市内の人口は、高度経済成長長期以降、まちのインフラ整備が進んだことにより年々移住・定住者が増え、令和五年九月現在は六〇年前の二倍以上となる一二八、七五七人に至りました。この間、国分寺市は首都近郊の住宅都市として飛躍的な発展を遂げてきた一方で、市域の自然環境、景観、社会や人々の生活様式は大きく変貌し、今や少子高齢社

会の到来をはじめとして、ウィズコロナ・アフターコロナの社会への対応、SDGsへの取組、スマート自治体の推進、地球温暖化への配慮、人々の多様な在り方を相互に認め合える共生社会の実現など、いずれも全国的動向といえる社会状況にも直面しています。

こうしたなか、江戸時代中期に知識人らの関心対象となり、大正十一年一月一二日に国史跡の指定を受けた武蔵国分寺跡は、昭和三十一年以来、多くの発掘調査が行われ、天平の大伽藍の姿が徐々に明らかとなっていますが、本市の歴史的資料の収集や保存は、武蔵国分寺に関するものを除くと極めて少ない状況にあったことから、市は市制施行一〇周年を迎えた昭和四九年に国分寺市史編さん事業の実施を模索しました（以下、当時の市史を「現市史」、編さん事業を「現市史編さん事業」と呼称します）。そして、翌昭和五〇年に市史編さん方針を庁内で意思決定すると、教育委員会事務局内に「市史編さん室」を設置し、同年一二月に制定した国分寺市史編さん委員会条例に基づき「市史編さん委員会」を発足させました。

（一）現市史編さん事業【昭和四九年～平成一〇年】

現市史編さん事業は、主として近世～近代初頭の古文書史料の収集作業から着手しましたが、明治四三年に当時の村役場が火災により全焼した影響で、市役所の組織内には明治期以前の史料が全く引き継がれていない状況がありました。そこで、現在の国分寺市域を構成する江戸時代の旧一〇ヶ村で名主や組頭等の村役人を務めた旧家を悉皆的に調査し、史料所蔵者の御協力と御厚意を得て、多くの史料を収集・把握しました。その時の調査成果の一端は、『国分寺市史料目録（Ⅰ～Ⅲ）』・『国分寺市史料集（Ⅰ～Ⅳ）』（昭和五四年～平成六年刊）として公表し、市制施行一五周年の昭和五四年には、編さん事業の過程で得られた新たな知見を加味して『郷土こくぶんじ―国分寺市の歴史―』の小冊子を発行しました。また、昭和五五年に「市史編さん計画」の最終案として市史の本編を時代順に刊行することを決定し、原始～中世の歴史を収載した上巻（昭和六一年刊）、近世を収載した中巻（平成二年刊）、近代～市制施行前後までを収載した下巻（平成三年刊）の全三冊を相次いで作成し、これら上・中・下巻の普及版としては『ふるさと国分寺のあゆみ』（平成五年刊）を刊行しました。

さらに、当時の市史編さん室では、本編の制作と相前後する昭和六三年に、専門調査員で構成する民俗調査団を組織し、ほぼ江戸時代の旧村域（平兵衛新田・上谷保新田、国分寺村、野中新田六左衛門組・榎戸新田、停車場、本多新田・恋ヶ窪村、戸倉新田・内藤新田・中藤新田）を基本単位とする地域別の総合民俗調査を行い、社会構成、人の一生、衣食住、生業、年中行事、信仰、芸能、口承文芸の八部門にわたる調査成果を『国分寺市の民俗（全六冊）』（平成二年～九年刊）にまとめました。加えて平成元年からは市内全域を対象に民家調査を開始して、『国分寺市の民家』（平成八年刊）ではかつての農村景観を象徴する一六棟もの古民家を記録しました。また、市制施行三〇周年を迎えた記念誌として、国分寺市の景観変化を振り返る写真集『アルバム国分寺』を平成六年に刊行しています。

（二）現市史編さん事業後の文化財調査と国分寺市文化財保護条例の改正【平成一年～平成三年】

昭和五〇年に発足した市史編さん室は、平成一〇年九月に当時の教育委員会社会教育部文化財課と統合し、のちに課の名称も「ふるさと文化財課」に変わりました。

約四半世紀に及んで市史編さん室が担ってきた業務は、以降、同課文化財保護係の分掌事務の一つとして位置付けられ、人員体制や予算規模を縮小しながらも、編さん業務は継続していきます。その一つに、文化財指定へ結び付けることを視野にいれて、明治時代以前創建の寺院・神社における建造物、絵画、彫刻、工芸品等を対象とした有形文化財調査が挙げられます。平成一四年～一七年に長岡造形大学へ調査を委託し、平成一九年に『国分寺市有形文化財調査報告書一 神社・寺院』を発行しましたが、以降、当面の間は、体制が整わない状況下で開発等による史料所蔵者から市への相談や依頼に基づく応急対応的な調査が続けられました。

ところで、市は昭和三五年二月二五日に文化財保護条例を制定して以降、長らく本条例に基づいて文化財保護行政を推進してまいりましたが、社会の著しい環境変化により関連法令である文化財保護法、東京都文化財保護条例との異同が生じ、整合性の確保や諸規定の整備が求められるようになりました。そこで、市教育委員会は、平成一七年四月に「市内所在文化財の今後の保存、活用について（指針）」を定め、関連法令との整合、市及び

市民の責務の明確化、文化財の保存と活用に係る在り方等を検討し、平成二二年一月二四日に旧条例を全面的に改正した「国分寺市文化財の保存と活用に關する条例」を制定しました。本条例の「第五章 文化財の調査及び活用」(第二五条～三一条)では、文化財目録、市の区域外に移動した文化財の把握、文化財調査専門員、文化財ボランティアの育成、法及び都条例の規定による指定を受けた文化財に対する補助等を新たに定め、以後の文化財調査・活用に係る礎を規定したことになります。

(三) 市内総合文化財調査

【平成二四年～令和五年(継続中)】

その後、市では平成二四年五月に『第四次国分寺市長期総合計画後期基本計画(平成二四年度～二八年度)』を策定し、市内に所在する保護すべき文化財は、文化財目録作成事業を導入しながら各種文化財調査を継続していく旨がうたわれ、長期総合計画を受けて市教育委員会でも平成二五年八月に「市内総合文化財調査計画」を定めました。国分寺市域内に所在する文化財の総合調査は、東京都による昭和三七年度の「北多摩南部総合文化財調査」以外に実施されたことはなく、その後五〇年余

りが経過していること及び教育委員会がこれまでに実施してきた各種調査が一部の分野に限定され現況の総合的な把握までには至っていないことから、市の区域内に存する文化財の所在及び現状について悉皆的に把握することを目的としました。市内総合文化財調査の所期の事業計画では、「国分寺市文化財の保存と活用に関する条例」で定める文化財調査専門員の制度を活用して、史跡、名勝・天然記念物、美術工芸・彫刻、石造物、建造物、民俗文化財の六つの分野に調査対象を定め、平成二六・二八年度に予備調査、平成二九年度～三二年度に本調査を行う予定でしたが、ここでも充分な調査体制を構築することが叶わず、建造物調査の一部を民間調査機関へ委託して実施した以外は、極めて限定的な調査しか遂行できていない現状があります。

なお、この間にまとめた調査報告書には、国分寺駅北口再開発に伴う旧家調査で収集した古文書の史料集『国分寺市史料目録Ⅳ・国分寺市史料集Ⅴ』(平成二九年度)及び『国分寺市史料集Ⅵ』、『国分寺市重要有形文化財(建造物)日本多家住宅長屋門・倉保存修理工事報告書』(ともに平成三〇年度刊)、『国登録有形文化財(建造物)沖本

家住宅調査報告書』、『国分寺市重要史跡 恋ヶ窪村分水の調査』、『榎戸水車調査報告書』（いずれも令和二年刊）などが挙げられますが、収集した古文書や民具などいまだ成果をまとめきれしていない調査も多く残されています。なお、市制施行五〇周年を迎えた平成二七年には、記念誌『国分寺の今昔』を国分寺市・国分寺市教育委員会が発行しました。

（四）埋蔵文化財調査と国史跡武蔵国分寺跡附東山道武蔵路の整備事業【昭和四九年～令和五年（継続中）】

市内四六ヶ所の埋蔵文化財包蔵地における発掘調査は、昭和四九年に市が国分寺市遺跡調査会を設置して以降、令和五年現在までに市内全域で約九〇〇地点を超える発掘調査が実施されています。現市史上巻では、昭和四九年～六〇年頃までに行った調査の概要を紹介しており、その後の考古学的成果の蓄積には目を見張るものがあります。

とりわけ、平成四年の多摩蘭坂遺跡（内藤一丁目）の調査は、多摩地域では最古級の約三五、〇〇〇年以前に遡る旧石器が出土したほか、平成二年～八年の恋ヶ窪東遺跡（本町四丁目）の調査でも、縄文時代中期を主体と

する草創期から晩期に至る集落遺跡の存在が明らかとなり、また、平成五～一三年の旧国鉄中央鉄道学園跡地で行った西国分寺駅周辺の再開発事業に伴う一連の調査（泉町二丁目）では、古代官道の東山道武蔵路が発見されるなど、これらは現市史刊行後の代表的な調査成果といえます。

さらに、令和四年は武蔵国分寺跡が国指定の史跡となつて一〇〇周年の節目を迎えました。市教育委員会では昭和四〇年から史跡地の公有化事業を開始し、その後、平成元年に『史跡武蔵国分寺跡整備基本構想』を定めて以降、平成四年からは史跡整備を目的として尼寺、東山道武蔵路、僧寺各地区の調査と工事が進められてきたなかで、武蔵国分寺の関連遺跡は国分寺市域をはるかに超えて、隣接する府中市北部域一帯にも広がりを見せていることが明らかとなっています。

また、現市史刊行後には考古学が対象とする時代は原始・古代のみならず、中・近世、そして最近では、近・現代までをも射程に入れて発掘調査が行われるようになりました。市内の遺跡からも幕末～明治時代の建物跡や水路跡、戦時中の防空壕、うど栽培用の地下室、線路軌

道跡などが各地の調査で発見され、これらは市の近世史、近代史、現代史を考察する上で極めて貴重な資料といえます。このような成果をまとめた発掘調査報告書も、現市史以降に数多く発行されている現状があります。

三、新たな市史編さん事業の目的

前項で述べたように、現市史下巻では叙述の対象年代を昭和三九年の市制施行前後までとしており、その後、令和五年に至るまで約六〇年に及ぶ歴史が蓄積されてきました。「国分寺市」が誕生して以降、昭和、平成の時代を経て、令和を迎えた現代に、多くの市民が暮らしてきた過去の歴史への眼差しから、今私たちが置かれている状況を把握し、そして未来へ向けて歩むべき道標を見据えるため、新たな市史編さん事業では、以下の目的を掲げることとします（以下、新たな市史を「新市史」、新たな市史編さん事業を「新市史編さん事業」と呼称します）。

（一）国分寺市市制施行六〇周年を契機として新市史編さん事業に着手し、現市史の内容的な見直し及び刊

行以降の本市の歴史を明らかにしていきます。

（二）最新の学問的水準を確保しながら、様々な広い視点から国分寺市の過去と現在を振り返り、将来を展望することによって、市民の地域に対する理解や愛着を深め、今後の学校教育、社会教育、更には地域づくり、まちづくりのための基礎資料とします。

（三）国分寺市の自然、歴史、文化、民俗等を改めて見直すことで、国分寺市及び市内各地域の成り立ちやルーツに対する理解を深め、市民生活の向上に資することとします。

（四）市内に残されている貴重な有形・無形の歴史資料が急速に失われている現状を鑑みて、資料の調査・研究、収集・整理、保存に努め、未来の市民へ継承していきます。

（五）学校教育と社会教育が融合し、学校・家庭・地域社会の緊密な連携の下、誰もが生涯を通じて主体的に学ぶとともに、進んで教育に参加する社会の実現をうたう『第二次国分寺市教育ビジョン』（令和二年二月）の教育理念に則し、「人と人がつながり、学びが循環するまち」の姿を目指します。

(六) 市民と協働で創りあげる市史を目指し、自ら学習・研究し、成果を発信しようとする市民の育成につなげてまいります。また、この編さん事業を通じて多くの研究者や研究者を志す方々が更に国分寺市の歴史へ関心を強めるきっかけとします。

(七) 現在、市内小中学校で推進中の「地域に親しみ、地域に学び、地域を考え、地域に貢献する『国分寺学』」の理念に通じる地域学習の基礎資料とします。

(八) 新市史編さん事業の過程で収集した資料は、市民共有の財産として情報公開し、広く一般の利用に供します。

(九) 新市史編さん事業後の将来展望を見据えて、歴史的公文書等の保存と活用に向けた基盤整備を検討します。

四、新たな市史編さん事業の方針

(一) 基本的な考え方

市では『国分寺市総合ビジョン』で「魅力あふれ ひとつながる 文化都市国分寺」を未来のまちの姿としてうたい、それを実現するために「ひとと文化を育むま

ち（子ども・学び・文化）」、「活躍できる成長のまち（地域振興）」、「いきいき健やかなまち（保健・福祉）」、「心安らぐ快適なまち（くらし・環境）」、「未来につながる持続可能なまち（公共経営）」の五つの分野別都市像を定めています。

また、令和六年度中に策定を目指す『第三次国分寺市教育ビジョン』では、事前調査として小中学生を対象としたアンケートを令和五年度に実施しています。市史編さん事業の着手を見据えて、「あなたは、あなたが住んでいる地域で、昔にどんなできごとがあったのか、知りたいと思いますか?」、「あなたは、私たちの親や先祖が、昔どのような暮らしをしていたか、興味がありますか?」の二項目を設定し、子どもたちの歴史に対する関心度を確認した上で、地域の成り立ちや自身のルーツに対する理解を深めるための学習を推進していく予定です。

こうしたなか、新市史編さん事業では、現市史編さん事業の過程で収集した資料はもとより、その後蓄積した資料や調査・研究の成果を十分に活用し、更にまだ地域の中に埋もれていると考えられる新資料の掘り起こしを行い、新たな視点から国分寺市の歴史、文化財を体系

的に取りまとめいくことが求められます。その具体化に向けた取組として、以下の四点を新たな国分寺市史編さん事業の基本的な考え方とします。

① 地域史資料を整理し、市民共有の財産にします

現市史における叙述は、主に市制施行の昭和三九年までの歴史を取り上げていますが、その後、地域の都市化は顕著に進み、古くからの自然環境、景観、生活様式は大きく変化しました。この間、市では地域にとつて貴重な歴史的資料の散逸を防ぐため古文書や民具等を収集し、開発等に伴う遺跡の発掘調査では大量の考古資料も蓄積してきました。新市史編さん事業では、現市史編さん事業及び事業終了後、今日に至るまで新たに集積した地域史資料を整理し、その保存と継承に向けた位置付けを行うとともに、市民共有の財産としていきます。

② 地域を核としつつ広い視野で地域史の編さんに努めます

現市史編さん事業で収集した古文書類のうち、『国分寺市史料目録』、『国分寺市史料集』として公表されているものは、主として江戸時代から明治時代初期にかけての史料が中心です。現市史中巻の叙述の根拠史料につい

ては、目録に登載はされているものの、史料の公表は限定的で、さらに現市史下巻では、根拠史料の多くは詳細が明確ではありません。そのため、現市史編さん事業及びそれ以降に収集した古文書類の目録化、活字化作業を進め、近世史、近代史、現代史の叙述を充実させていくことが必要です。さらに、政治史・行政史的側面のみではなく、生活史・社会史的視点や、人々の営みと自然環境、戦争や災害との向き合い方、移住者の増加に伴う新旧住民が一体となった地域づくりなど、地域を核としつつ広い視野で地域史（通史）を叙述していきます。

③ 失われつつある資料を保全し、次期に継承します

これまで蓄積してきた地域史資料のみならず、現在も急速に失われつつある地域の記憶を記録にとどめるとともに、いまだ市内に埋もれている新たな資料の掘り起こしに努め、適切な記録化と将来に向けた保存にも十分配慮していく必要があります。これらの資料を保全し、将来行われる次期市史編さん事業に継承していきます。

④ 国分寺市特有の自然・歴史を表徴する以下のキーワードを意識して叙述します

・「国分寺崖線」——自然環境、原始

(旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代)

・「国分寺造営」―古代(奈良・平安時代)

・「鎌倉街道」―中世(鎌倉・室町・戦国時代)

・「新田開発」―近世(江戸時代)

・「鉄道敷設」、「東京近郊」、「都市化」―近現代

(明治・大正・昭和時代)

(二) 編集・活動の具体的な考え方

① これまでに収集・蓄積した資料を時代ごとに系統的に整理し、当面は資料編の作成を進めます。その後、資料編を根拠としながら写真や地図等を多く取り入れ、市民に分かりやすく、広く親しまれる通史編を作成します。

② 市域を取りまく様々な時代の歴史的・地理的環境を明確化するために、年表を作成するとともに、時代ごとにマクロな視点から地域を捉えた上で、ミクロな視点で歴史を叙述するよう心掛けます。そのためには、現在の国分寺市の区域内にとらわれず、各時代の生活圏を考慮した地域設定を意識します。

③ 主として市制施行後を扱う現代市制編では、国分寺市報をはじめとする各種行政刊行物を横断的に俯瞰

し、子ども・学び・文化、地域振興、保健・福祉、くらし・環境、公共経営等の市政の分野ごとに動向を整理するとともに、政治史、経済史、行政史に偏ることなく、地域に生きた人々の視点を盛り込んで編さんを進めます。

④ 教育委員会ふるさと文化財課と連携し、埋蔵文化財調査や市内総合文化財調査の最新成果を新市史に反映します。

⑤ 教育委員会学校指導課と連携し、市立小学校三年生の社会科副読本「わたしたちの国分寺」改訂版(令和八年度発行)の制作では、市史編さんの成果を反映します。

⑥ 小中学生が地域の歴史を学ぶきっかけとなる「子ども市史」を編さんし、小中学生に配布します。

⑦ 編さん事業の進捗状況は、ニュースレターを年二回、市史研究を年一回発行し、関係機関へ配布するとともに、市報やホームページ上でも掲載し、広く情報の発信を行います。

⑧ 関連事業として、教育委員会公民館課、ふるさと文化財課等と連携しながら市民向けの歴史講演会、歴史

講座等を開催し、地域の歴史に関心を寄せる市民の育成につながるよう努めます。

- ⑨ 令和六年度に刊行を予定している『市勢要覧』では、政策部市政戦略室と連携し、現市史及びその後の調査・研究成果を生かすよう努めます。

五、市史の内容と構成

現市史刊行後の歴史及び現市史刊行後の調査等で明らかとなった歴史を基本とし、時代ごとに史・資料編を作成し、その後に通史編の編さんを進めていきます。特に、昭和三十九年の市制施行後を対象とする現代史の充実を図るとともに、原始・古代・中世史及び近世史、近代史は、現市史で作成していない資料編を作成し、現市史刊行後の調査成果を反映するものとします。

(一) 史・資料編

- ①原始・古代・中世資料（文献、考古） ②近世資料（文献、考古、民俗） ③近現代資料（文献、考古、民俗） ④現代市制資料（文献、民俗）

(二) 通史編

- ①原始・古代・中世編 ②近世編 ③近現代編 ④現代

市制編

(三) 特論編

- ①生活・民俗編 ②地図・絵図編 ③行政・福祉・教育編 ④有形文化財編（建築、美術工芸）

(四) 別編

- ①武蔵国分寺跡出土瓦資料集

(五) その他

- ①子ども市史 ②概要版 ③年表・索引 ④市史研究ニュースレター等の定期刊行物

その他、通史編、資料編を補完するための『史料目録』、『調査報告書』等の刊行を検討します。

六、編さん期間及び刊行計画

別紙、『新国分寺市史』編さん事業刊行計画』のとおり。

七、編さん事業推進体制

国分寺市市史編さん推進委員会設置要綱（令和五年一〇月一日施行）で定める市史編さん推進委員会において、市史編さん基本方針及び各年度の事業実施計画等

を検討します。市史編さん基本方針は資料の収集や資料調査の進捗、その他の状況に応じて、適宜見直しを図っていくこととします。また、市史編さん推進委員会のもとに専門部会を設置し、「原始・古代・中世部会」、「近世・近現代部会」、「現代市制部会」の三部会制とします。専門部会は、部会長のもと、大学教員・博物館学芸員等の研究者で、市史原稿執筆者となる「専門員」、専門性を有する大学院生・大学生、若手研究者などで、部会長・専門員の指導に基づき市史原稿執筆者となり得る人材を含む「調査員」、市史に興味のある高校生や市民等の「協力員」の三層で組織します。さらに、市史編さん推進委員会編集委員会を設置し、各部会の執筆原稿を総合的な視点で整理、調整、編集し、刊行につなげる組織とします。市史編さん事業にかかる事務局は、令和六年度以降、市史編さん室を設置し、事業の進捗に合わせて推進体制の整備を図ってまいります。

八、市民との協働

『国分寺市総合ビジョン』では、「未来のまちの姿」及び「分野別の都市像」の実現に向けて、「ともに進める

（オール国分寺で地域課題の解決に取り組みます）」、「ともに高める（国分寺のあふれる魅力を市民・事業者等とともに高めていきます）」、「ともにつなげる（国分寺の豊かさを市民・事業者等とともに未来へつなげていきます）」の三項目を「まちづくりの基本理念」として掲げています。市史編さん事業も「まちづくりの基本理念」に則り、研究者や行政職員だけではなく、広く市民と協働して進めます。

（二）調査・研究に当たっては、地域団体、市内の小中学校、高校、大学等多くの市民と協働して行います。また、市史編さん作業に小中学生が参加する場を検討します。

（二）地域史に興味のある市民は、大学生や高校生も含め市史編さん推進委員会専門部会の「協力員」として、自ら希望する各部会への参加を促し、市民参加の機会拡充に努めます。

（三）市民や市職員に対して情報発信のみならず、資料の提供を計画的に呼びかけます。

（四）講演会・講座等の関連事業では、次世代を担う若年層の参画を視野に入れながらも、市民の歴史に

対する興味関心を誘うべく、様々な視点でのテーマを検討します。また、古文書講座などを実施することで、「協力員」の養成、ひいては市民等が自主的に歴史を学習するサークル等の形成につなげます。

九、その他

(一) 歴史的公文書等の保存・活用に向けた基盤整備に向けて

国分寺市における文書等の取扱いに関して基本的な事項を定めた「国分寺市文書管理規則」第一八条では、「ふるさと文化財課長は、保存期間満了文書等であるさと文化財課において保存する必要があると認める文書等について、当該文書等を所管する文書管理責任者に当該保存期間満了文書等の引継ぎを求めることができ」、「文書管理責任者は、法令の規定により廃棄しなければならないとされている場合その他特別の理由がある場合を除き、その求めに応ずるもの」とされています。

新市史編さん事業後における市の将来展望を見据えたとき、平成・令和期以降の公文書は、現代史・地域史の観点からも極めて重要な資料となり得るものです。その

ため、市史編さん事業の進捗にあわせて、行政における歴史的公文書の選別、保存、公開、活用に関する考え方を整理するとともに、歴史的資源の管理・活用等に関して、常に点検していくことで、より良い在り方を検討していきます。

(二) 執筆要項・市史の判型等の検討

資料編・通史編等の執筆に係る要項、市史の判型等については、事業の推移を見据えながら、順次、市史編さん推進委員会の方針を踏まえ編集委員会にて検討を進めてまいります。

(三) 基本方針の市民への周知

市史編さん事業を進めるに当たっては、本基本方針の趣旨を広く市民へ周知するよう努めるものとします。

(四) 基本方針の見直し

市史編さん事業を進めるに当たっては、本基本方針の内容を逐次精査し、必要に応じて見直しを行います。

『新たな国分寺市史』編さん事業刊行計画

別紙

●令和11年度（市制施行65周年）までに、年表・索引を除く全資料編の刊行を目指す！

※ここでのいう「刊行」とは、紙媒体、電子媒体双方を想定

年度（令和）	5年度 2023	6年度 2024	7年度 2025	8年度 2026	9年度 2027	10年度 2028	11年度 2029	12年度 2030	13年度 2031	14年度 2032	15年度 2033	16年度 2034
西暦（年度）												
市制施行												
事業実施経過年数	事業準備	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6年目	7年目	8年目	9年目	10年目	11年目
① 原始・古代・中世資料（文獻、考古）				刊行								
② 近世資料（文獻、考古、民俗）					刊行							
(1) 史・資料編						刊行						
③ 近現代資料（文獻、考古、民俗）							刊行					
④ 現代市制開闢料（文獻、民俗）									刊行			
① 原始・古代・中世編										刊行		
② 近世編												
③ 近現代編											刊行	
④ 現代市制開闢												刊行
(2) 通史編												
① 生活・民俗編								刊行				
② 地図・地図編				刊行								
③ 行政・福祉・教育編												
④ 有形文化財編（建築・美術工芸）							刊行					
(4) 別 編				刊行								
① 子ども市史・わたしたちの国分寺				刊行				刊行				刊行
② 顕彰版												刊行
③ 年表・索引												刊行
(5) その他												刊行
④ 市史研究（編文・資料紹介、講演会録等）【年1回発行・HP公開】 ニュースレター 【年2回発行・各1000部・HP公開】		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ふるさと文化財庫において、次期編さんを見据えた継続的な資料蓄積及び検証研究												

市史編さん事業着手までのあゆみ（令和4年度・5年度）

《令和4年度》

令和5年

2・24

令和5年第1回定例会本会議

令和5年度施政方針で市史の再編さんに向けた検討に着手することを表明

いて」教育長決裁

7・20

令和5年度第1回教育総合会議にて市史編さんの方向性を報告

7・27

令和5年度第7回教育委員会定例会にて「新たな国分寺市史編さん事業の実施について」報告

8・15

庁議にて「新たな国分寺市史編さん事業の実施について」報告

8・29

令和5年度第1回国分寺市文化財保護審議会にて「新たな国分寺市史編さん事業の実施について」報告

《令和5年度》

令和5年

4・1

国分寺市教育委員会事務局処務規則を改正し、教育部に「市史編さん担当課長」職、ふるさと文化財課内に「市史編さん担当係長」職を設置。令和6年度からの市史の再編さんに向けて準備を開始

10・10

「市史編さん推進委員会設置要綱」決定

10・26

令和5年度第10回国分寺市教育委員会定例会にて「市史編さん推進委員会設置要綱」報告

10・27

庁議にて「市史編さん推進委員会設置要綱」報告

4・14

都内の自治体史編さん事業先行取組市区をヒアリング訪問（八王子・羽村・府中・立川・小平・小金井・清瀬・狛江市・世田谷・港区）

11・20

令和5年度第1回国分寺市史編さん推進委員会開催

国分寺市市史編さん推進委員会委員委嘱

7・19

「新たな国分寺市史編さん事業の実施につ

き」新たな国分寺市史編さん基本方針（案）の審議

令和6年

1・17

令和5年度第2回国分寺市史編さん推進委員会にて「新たな国分寺市史編さん基本方針（案）」及び「令和6年度新たな国分寺市史編さん事業推進計画（案）」の審議

1・25

令和6年第1回国分寺市教育委員会定例会にて「新たな国分寺市史編さん基本方針（案）」報告

2・5

「新たな国分寺市史編さん基本方針」庁議へ付議、庁議後市長決裁にて決定

「令和6年度新たな国分寺市史編さん事業推進計画」教育長決裁

令和5年度国分寺市史編さん関係者名簿

（令和6年3月31日現在）

【市史編さん推進委員会】

委員長 橋本 正之（国分寺市副市長）

副委員長 坂詰 秀一（立正大学特別榮譽教授
国分寺市文化財保護審議会会長・市民）

委員 荒井 秀規（明治大学兼任講師）

委員 西木 浩一（東京都公文書館課長代理）

委員 羽貝 正美（東京経済大学現代法学部教授）

委員 太田 和子（国分寺市文化財保護審議会委員・市民）

委員 坂本 克治（元市史編さん室長・市民）

委員 古屋 真宏（国分寺市教育委員会教育長）

委員 沢柳 和彦（国分寺市政策部長）

委員 可児 泰則（国分寺市教育部長）

【事務局】（教育委員会ふるさと文化財課市史編さん担当）

市史編さん担当課長 一ノ瀬 理

ふるさと文化財課長 新出 尚三

市史編さん担当係長 依田 亮一

令和6年度市史編さん室業務日誌

令和6年

4・1 教育部に「市史編さん室」を設置

4・12 新たな国分寺市史編さん事業着手記念
トークセッション

5・27 令和6年度第1回市史編さん推進委員会
編集会議

6・12 令和6年度第1回国分寺市文化財保護審議会にて「新たな国分寺市史編さん基本方針」を報告

6・21 現代市制部会 出発式

6・24 原始・古代・中世部会 出発式

6・29 近世・近現代部会 出発式

7・8 現代市制部会 第1回部会

7・25 現代市制部会 第2回部会

8・3 原始・古代・中世部会 考古グループ
第1回会議

8・7 原始・古代・中世部会 国分寺グループ
第1回会議

8・31 近世・近現代部会 市民協力員勉強会

9・3 現代市制部会 第3回部会

9・14 近世・近現代部会 文献資料調査
(於 東京都公文書館)

9・27 令和6年度第2回市史編さん推進委員会
編集会議

9・30 現代市制部会 第4回部会

10・1 原始・古代・中世部会
考古資料所蔵者宅訪問(南町個人宅)

現代市制部会 第1回部会全体会

10・4 原始・古代・中世部会 考古グループ
第2回会議

10・11 原始・古代・中世部会 国分寺グループ
第2回会議

10・12 近世・近現代部会 第1回部会

10・15 近世・近現代部会 古文書所蔵者訪問
(東元町・北町個人宅)

10・25 現代市制部会 第5回部会

10・26 歴史講座・トークセッション
「資料編さん事業がもたらすもの」
講師 西木 浩一氏

10・30 原始・古代・中世部会 市民協力員活動開始

10・31 原始・古代・中世部会 古代中世グループ
第1回会議

10・31	現代市制部会 第1回市内巡見	12・16	近世・近現代部会 古文書所蔵者訪問 (戸倉・西町個人宅)
11・2	近世・近現代部会市民協力員展示 「資料でたどる国分寺のあゆみ」 〔村から町へ、そして市制の誕生〕	12・16	現代市制部会 文献資料調査
4		12・18	近世・近現代部会 古文書所蔵者訪問 (光町個人宅)
	(於 国分寺市役所新庁舎エントランス)	12・21	近世・近現代部会 文献資料調査 (於 東京都公文書館)
11・13	現代市制部会 第6回部会	12・22	古文書講座入門編②「くずし字を読む」 講師 宮澤 歩美氏
11・20	原始・古代・中世部会 中世考古資料調査	12・24	原始・古代・中世部会 中世考古資料調査
12・2	現代市制部会 第2回市内巡見	12・25	原始・古代・中世部会 原始考古資料調査
12・3	原始・古代・中世部会 文献資料調査 (於 川崎市立日本民家園)	12・26	近世・近現代部会 市内神社調査
12・4	近世・近現代部会 市内神社調査 古文書所蔵者訪問(東元町個人宅)	令和7年	
12・7	歴史講演会「名字のルーツに見る 日本人のくらしと文化」 講師 森岡 浩氏	1・7	原始・古代・中世部会 原始考古資料調査
12・9	近世・近現代部会 古文書所蔵者訪問 (北町個人宅)	1・9	令和6年度第3回市史編さん推進委員会 編集会議
12・10	現代市制部会 第7回部会	1・13	歴史講演会「国分寺市のことを もっと知ろう」歴史と民俗から」 講師 新谷 尚紀氏
12・11	近世・近現代部会 古文書所蔵者訪問 (並木町個人宅)		
12・12	近世・近現代部会 古文書所蔵者訪問 (戸倉・光町個人宅)		
12・15	古文書講座入門編①「古文書を読む前に」 講師 宮澤 歩美氏	1・15	現代市制部会 第8回部会

1・18	古文書講座入門編③「候文を読む」 講師 宮澤 歩美氏	2・27	令和7年第2回国分寺市教育委員会定例会 にて「令和7年度新たな国分寺市史編さん 事業推進計画」報告
1・22	近世・近現代部会 文献資料調査 (於 東京都公文書館)	3・2	古文書講座テーマ編① 「御門訴事件と国分寺の村々」 講師 三野 行徳氏
1・27	原始・古代・中世部会 グループ長会議 近世・近現代部会 古文書調査	3・7	近世・近現代部会 古文書調査 (於 府中市郷土の森博物館)
1・28	近世・近現代部会 文献資料調査 (於 東京都公文書館)	3・9	古文書講座テーマ編② 「国分寺市域の俳諧文化と宝雪庵可尊 ——かな文字を読む——」 講師 工藤 航平氏
1・29	現代市制部会 第9回部会 古文書講座入門編④「古文書を読む①」 講師 宮澤 歩美氏	3・10	近世・近現代部会 古文書調査 現代市制部会 第11回部会
2・4	近世・近現代部会 古文書所蔵者訪問 (東元町個人宅)	3・12	古文書講座テーマ編③ 「国分寺の鷹場史料を読む」 講師 山崎 久登氏
2・6	令和6年度第1回市史編さん推進委員会 古文書講座入門編⑤「古文書を読む②」 講師 宮澤 歩美氏	3・16	古文書講座テーマ編③ 「国分寺の鷹場史料を読む」 講師 山崎 久登氏
2・8	原始・古代・中世部会 資料調査 (於 埼玉県鳩山町文化財倉庫)	3・18	庁議にて「令和7年度新たな国分寺市史編 さん事業推進計画」報告
2・17	近世・近現代部会 古文書調査 現代市制部会 第10回部会	3・24	近世・近現代部会 市内巡見 近世・近現代部会 資料調査 (東元町個人宅)
2・18	原始・古代・中世部会 古代考古資料調査 近世・近現代部会 第2回部会	3・31	原始・古代・中世部会 中世考古資料調査 (於 東京学芸大学 自然科学研究室)
2・20	近世・近現代部会 第2回部会		
2・22			

令和6年度国分寺市史編さん関係者名簿

(令和7年3月31日現在)

【市史編さん推進委員会】

委員長	橋本 正之 (国分寺市副市長)
副委員長	坂詰 秀一 (立正大学特別栄誉教授 国分寺市文化財保護審議会会長・市民)
委員	荒井 秀規 (明治大学兼任講師 駒澤大学大学院講師)
委員	西木 浩一 (東京都公文書館課長代理)
委員	羽貝 正美 (東京経済大学副学長・現代法学部教授)
委員	須田 勉 (元国土館大学教授)
委員	福嶋 司 (東京農工大学名誉教授 国分寺市文化財保護審議会副会長・市民)
委員	太田 和子 (国分寺市文化財保護審議会委員・市民)
委員	坂本 克治 (元市史編さん室長・市民)
委員	古屋 真宏 (国分寺市教育委員会教育長)
委員	沢柳 和彦 (国分寺市政策部長)
委員	日高 久善 (国分寺市教育部長)

【原始・古代・中世部会】

部会長

荒井 秀規 (前掲)

専門員

有富 由紀子 (東京女子大学非常勤講師)

宇佐美 哲也 (狛江市教育委員会社会教育課副主幹)

小山 貴子 (すみだ郷土文化資料館学芸員)

須田 勉 (前掲)

野口 淳 (公立小松大学次世代考古学研究センター特任准教授)

深澤 靖幸 (府中市郷土の森博物館館長)

宮原 正樹 (埼玉県立さきたま史跡の博物館学芸員)

調査員

井上 翔 (塾講師)

宇高 美友子 (埼玉県立さきたま史跡の博物館学芸員)

中山 真治 (三鷹市スポーツと文化部生涯学習課)

協力員

小池 晶子・富田 陽子・西垣 真子・平田 昭子

有吉 重蔵・上敷領 久

【近世・近現代部会】

部会長

西木 浩一（前掲）

専門員

石居 人也（一橋大学大学院社会学研究科教授）

菅野 洋介（駒澤大学文学部准教授）

工藤 航平（国立歴史民俗博物館准教授）

黒尾 和久（国立重監房資料館部長）

鈴木 直樹（一橋大学大学院社会学研究科専任講師）

三野 行徳（昭和女子大学人間文化学部専任講師）

山崎 久登（都立砂川高等学校主任教諭）

調査員

安部 玄将（東京都公文書館史料編さん担当）

大庭 裕介（湘南工科大学非常勤講師）

木本 和志（埼玉県宮代町教育委員会）

協力員

佐藤 江美子・杉岡 わか子・鈴木 大河

福山 智美・宮崎 真紀子・武藤 功・山室 智子

太田 和子

【現代市制部会】

部会長

羽貝 正美（前掲）

専門員

杉田 孝夫（お茶の水女子大学名誉教授）

前田 成東（東海大学政治経済学部教授）

米村 創（千葉県松戸市立博物館学芸員）

米山 高生（一橋大学名誉教授）

調査員

村井 里穂（東京経済大学校友センター）

協力員

加藤 千泉・高瀬 悠・竹内 将彦

富澤 守

【作業協力員】

田端 美津枝・古屋 佑太

【事務局】（教育委員会市史編さん室）

室長

中吉 ひろみ（事務補助）
山下 加奈子（事務補助）

依田 亮一

担当係長

一ノ瀬 理

一般職員

宮澤 歩美（近世・近現代部会主担当）

会計年度月額任用職員

木村 遊（市史編さん担当
原始・古代・中世部会主担当）

宮川 展夫（市史編さん担当
現代市制部会主担当）

小村 貴子（総合事務担当）

会計年度時間額任用職員

安部 玄将（古文書解読員）

大庭 裕介（古文書解読員）

首藤 佳祐（古文書解読員）

橋本 光司（古文書解読員）

山口 紗英（古文書解読員）

山根 旨乃（古文書解読員）

高橋 由見江（事務補助）

編集後記

新たな国分寺市史の編さんが始まって一年が経ちました。まだ一年なのか、もう一年なのかは人によって感じ方が分かれるかもしれません。個人的には、まだまだ緒についたばかりの覚束なさが残る中で、もう一年経ってしまったのかという感じが強いです。

さて、創刊号となる今号では、昨年四月に行われたトークセッションをはじめ、講演会の記録を三本、市民協力を交えて行われた座談会の記録、研究ノート、講座を各一本掲載しました。テーマも幅広いものになっているので、お手に取った皆さまにとって市史編さんに興味を持つきっかけとなれば幸いです。

新たな国分寺市史の編さん事業は、市制施行七〇周年となる令和一六年度の完成を目指して進められます。まだまだ課題も多く、一朝一夕にはいかないですが、皆さまに親しまれる市史となるよう、一步一步前進していけたらと思います。編さんにあたっては、多くの皆さまのお力が必要となりますので、編さん事業へのご理解・ご協力を賜りますよう、お願いいたします。

(市史編さん室 宮川)

※文化財保護、教育普及、学術研究を目的とする場合は、著作権者の承諾なく本書の一部を複製して利用することができます (p57～p116を除く)。なお、利用にあたっては、出典を明記してください。

「國分寺學」を学ぶ

国分寺市史研究 第1号



発行日：令和7年6月30日

編集：国分寺市史編さん推進委員会

発行：国分寺市教育委員会

〒185-0034 国分寺市光町1-46-8

(教育部 市史編さん室)

電話 042-571-7815

印刷：ともしび工房

表紙	マットコート	四六判	135kg
本文	再生上質紙	A判	44.5kg